
新たなる世界 ～日本の歩み～

試製橘花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新たなる世界 ～日本の歩み～

【Nコード】

N6143S

【作者名】

試製橋花

【あらすじ】

2040年、異世界へと転移した日本国。新世界にて新たな同盟国を得て安定期へと入り科学が異常に発達した時代、そして彼らの前に現れる魔法使いたち、異なる進化を遂げた文明の邂逅は何を齎すのか。

というコンセプトでやってみようと思ったයිございます。

初投稿となりますので、恐らく駄文になると思いますし、更新も不定期だと思いますが、出来る限り頑張ろうと思います。（原作名の

中に大帝国が入っていますが世界・人物設定を参考にした程度なのでご注意ください。）

第一話 『発端』

2020年、JAXAによって首都圏上空の衛星軌道上に謎のワームホールが発見された。今までワームホールなど可能性の1つに過ぎないと考えられていたため、即座に観測対象に指定された。

観測が開始してから数ヶ月、ワームホール観測班は初観測から現在までの観測結果に驚愕することとなる。

その結果はすぐさま日本政府へと報告され、当時の内閣の全閣僚は、その報告を事実として認めるのに暫し時間を必要としたが、最終的には今後の観測結果と経過予測の内容でマスコミに公表するという決定を下した。

その報告内容とは……。

「このたび確認されたワームホールは、時間とともに僅かながら拡大しており、周辺に異常な重力異常を発生させ、ワームホールを中心として日本の領域を覆うように微弱な電磁気が確認されました。今のまま、ワームホールの拡大が続き、ワームホールに電荷が加わった場合、日本の領域の全てがワームホールのトンネルに飲み込まれ、この地球上から消滅する可能性があります。」というものだった。

そして、当初は決定に従い沈黙を守っていた閣僚達であったが、や

はりというか洩らしてしまう者はいるもので、こんな時だけ優秀なマスコミによってしつこく追及された政府は、最終的に事実を公表するという判断を下した。

しかし、JAXAからの報告をありのままに公表してしまつたため日本経済、そして世界経済が一時的に大混乱する事態に陥り、マスコミに煽られた民衆による買占めや暴動の様なものまで発生し、情報公開の正当性を訴えた総理大臣は衆議院を解散させた。

衆議院解散の数週間後、JAXAから新たな予測が出された。それによると・・・。

「ワームホールの拡大の速度と、日本上空の空間の帯電率がワームホールが完全に通過可能なトンネルになるまで電荷が加わるまでの時間を計算すると、日本国が領有する全空間は日本時間で2040年3月31日24時59分に地球上から別空間へと転移すると予測されます。」

この報告に、ある者は恐怖し、またある者は狂喜したが、一先ずこの予測によって、大混乱していた世界経済は沈静化した。

そして、この予測に基づき日本国は近年まれに見る投票率の選挙によって選ばれた新たな総理大臣の下で、転移に対する準備を着々と進めていくこととなる……………。

制限時間は20年。

全ては日本に住まう全国民の生存の為に・・・。

第一話 『発端』 (後書き)

誤字脱字等ございましたらご指摘いただけるとうれしいです。一応、
なのはとのクロスなのですが、暫くは日本だけの話を続ける予定で
おります。

第二話 『転移に向けて』

日本が転移するにあたり、解決しなければならない課題は数多くあった。

まず電気エネルギーであるが、2012年から従来の火力発電や原子力発電頼みの電力供給から太陽光、風力、地熱などの再生可能エネルギーによる電力供給にシフトし始めてはいたが、まだ総発電割合で30%程度であった。これを実用化が2030年頃まで早まった核融合発電とあわせて、国内の電力を全てクリーン発電によつてまかない、超伝導送電網やスマートグリッドの推進により国内の消費電力量を削減することを目標に、日本各地にメガソーラー発電所や、風力発電所が建設された。

そして、従来の石油エネルギーの代替として石油とほぼ同等の物質を生成しながら、自然環境に悪影響を与えないオーランチオキトリウムの培養、メタンハイドレートの商業化が進められた。

レアメタル、レアアースなどに対しては、南鳥島周辺のコバルトリッチクラストと沖縄周辺の海底熱水鉱床を調査した結果、予想を超える埋蔵量だったためある程度は自給できたのだが、それでも国内で自給できない鉱物には海外から大量に輸入し備蓄することで暫くもたせ、技術革新を待つことで対処した。

そして、食料自給率は植物工場の開発促進と、休耕田の再利用で対応した。

しかし、日本人にとって何よりの問題は安全保障であった。なにせ転移した先の世界がどのような世界であるのかは何も分かってはいないのだ。それこそ惑星全体が強大な軍事国家に独裁支配されている様な世界の可能性も否定はできない。アメリカという同盟国もない世界で、日本単独で防衛ができるように自衛隊を増強しなければならなかった。ようやく軍事力の必要性を日本人が理解したため、結果的に、憲法9条は改正され、自衛隊は国防軍へと名称を変え、保有する装備の大規模な更新と近代化改修、そして各国の軍事企業から技術を吸収し、着々とその戦力を増強していった。

そして、国防軍の中でも特に注目すべきは、新しく創設された国防宇宙軍であろう。装備は、経済産業省主導で進められている宇宙太陽光発電計画と、来るべき外宇宙探査のために開発された宇宙船である「SS-01」にレーザーユニット等を搭載し、陸海空軍の通信中継や地上に対する支援砲撃などができるよう改造したレーザー砲艦6隻と小規模ではあったが、後の大増強で日本国防軍の象徴となるとはまだ誰も思いもしなかった……。

最終的には、全目標の9割を達成することに成功し、日本国はその領有する全空間と其処に住む全ての人間とともに、まだ見ぬ世界へと旅立っていった。

第二話 『転移に向けて』（後書き）

次話は転移から15年程度たったところから始める予定で、時空管理局を登場させるつもりです。

そして、いい加減に人物を出さねば・・・。

第三話 『新世界にて』

結論から言うと日本が転移した世界には、当初、日本人が危惧していた様な強大な軍事国家等はあるか、人間というものがいなかった。ただその星にあったのは、見たことも無い大陸と島々、そして生態系のみだったのである。

日本は当初は、パートナーとなりうる国家がないか探したが、いっこうに見つから無かったため、転移に備えて自己完結型の経済になっていたとはいえ、輸出産業にとっては新しい市場が見つけれられるかもしれないという淡い希望が打ち砕かれた。しかし、日本が惑星全体を領有した事と、産婦人科を筆頭に医療システムを拡充や、今までは縦割り行政によって管轄が分かれていた保育園と幼稚園を統合した子供園の増設、補助金の拡大などで総人口が増大したことによって最終的には、生産量は増大し、それに伴って輸送業界も潤った。

しかし、日本が特に力を入れたのはやはりと言うか技術開発であった。宇宙太陽光発電、ムーンベース建設、国防宇宙軍の増強に始まって宇宙へと歩みを進めていた

新たなパートナーとなり得る国家を見つけるために……。

域

「通信士、本部に連絡、『これより本戦隊は定期哨戒任務に就くと。』」

「了解！」

柏木二等宙将が艦長を務める雪風級巡洋艦2番艦「舞風」は普段どおりパトロール任務に就いていた。雪風級巡洋艦は増強中の宇宙軍の中でも8隻しか配備されていない新鋭艦であり、レーザー核融合機関、荷電粒子砲等を搭載し、その優秀な索敵性能と指揮通信能力でパトロール任務でも警備艇や駆逐艦を伴い艦隊の指揮中枢艦として機能していた。

「．．．しかし、転移から15年経ったとはいえ新しい宇宙というのは違和感があるな．．．坂田副長、君はこの宇宙をどう感じる？」

艦長の柏木は、宇宙軍に設立当初から所属しており、当時はレーザー砲艦SG-03の砲雷長を務めていた男であり、部下からの信頼も厚い。

「確かに自分が子供のころに学んだ太陽系とは似ても似つかなかったので、転移後しばらくは戸惑いましたが、すぐになれましたね．．．そういえば艦長は転移前から宇宙軍所属でしたね．．．今と比べて何か違う点などはあったのですか？」

「違う点だらけだったさ。今でこそすっかりとした教育機関があるが、設立当初はJAXAに出向していたのだからな．．．まったく、途中で自分は軍人なのかJAXAの宇宙飛行士なのか分から

なくなったものだよ。．．．それに、今でこそ重力発生装置がついているからこうして床に足をつけていられるが、昔は艦内全ブロックにおいて無重力だったんだ．．．トレーニングもきつかったが、特に飯が大変だった。」

「そうだったのですか。しかし、私達だってワープ航法には完全に慣れたとは言い難いですね。」

ワープ航法とは日本が来るべき外宇宙探査、及び宇宙開拓の為に転移前からワームホールを解析、研究したことで完成した、正式名称を異層次元航法推進システムという次元跳躍型ワープである。

「確かにアレは何度経験しても、慣れることは無いね。」

柏木は笑ってそう言うと、副長に持ち場に戻るよう指示し、自身もCICに設けられた艦長用の座席に座り自艦と僚艦を表示しているホログラムを見つめながら一人つぶやいた。

「このまま何もおきない平和な時間が続けばいいのだが．．．。」

しかし、柏木の願いは無情にも聞き届けられることは無かったのである。

「艦長、緊急事態です!！」

「何事だ!!」

レーダー員からの報告に驚きつつも柏木は、状況を説明するよう部下に指示した。

「ハッ!! 本艦前方にて、空間歪曲、及び次元断層を確認。それによりレーダー、通信機を含めた電子機器が使用不能となっておりま
す!!」

「分かった。通信士、僚艦に発行信号にて『本戦隊の前進を停止、次元断層より後退し警戒レベルをレベル4まで引き上げる。』」

「『了解!!』」

「……しかし、エライ事になったな。」

「艦長!!」

「今度はどうした!!」

「レ……レーダーに艦影が……。」

「……!!?」

驚いた柏木は、艦の前方を映し出すカメラ映像をみつめた。

すると……。

次元断層から見たことも無い白亜の船体が姿を現した。
しかし

「あれは 喰われている のか?」

知る者がいたらこう答えたであろう

日本艦隊の目の前に現れたソレは、かつて味方艦の砲撃によって闇
の書と共に葬り去られた

L級次元航行艦2番艦『エステリア』であると

第三話 『新世界にて』（後書き）

セリフとはここまでむずかしいものであったのか……。追記、投稿時に第三話を第三話と表記してしまいました。地球艦隊を日本艦隊に訂正しました。まことに申し訳ありませんでした。

第四話 『月軌道付近にて1』

「総員戦闘配置！！通信士、本部に連絡。『本戦隊は哨戒任務中、月軌道付近にて未知の攻撃的生命体及び、生命体の攻撃を受け、航行不能状態に陥っていると思われる国籍不明船を確認。これより生命体の排除、及び不明船の救助を行う』とな！！」

この時、その光景を見ていた地球艦隊の人員は、多少の違いがあれほぼ同じ事を頭の中で思っていた。．．．つまり、

「アレは一体何なのか？」

という事であった。それもそのはずで、自分達の目の前で見たことも無い艦が化け物に食われているのだから、誰が見たところで困惑したことだろう。

しかし、そこは軍人たるものいつまでも頭の中に疑問符を浮かべているわけにはいかない。艦長であると同時に戦隊司令も務める柏木は戦隊に所属する全人員の命に責任を持つものとして、アンノウンをエネミーと判断し、戦隊に所属する全艦艇に戦闘態勢に移行するよう指示した。

「副長、あの船からSOSなどは確認されたか？」

「．．．いいえ、今のところ何もあの船からは発せられてはおりません。」

「という事は、あの化け物に船のシステムを掌握されたか、脱出に成功したか．．．または、」

「全員死亡したか．．．ですね。」

「考えたくは無いがな．．．とにかくあの化け物を何とかしよう。
全艦に通達！主砲斉射用意！目標、敵性生物！」

「主砲斉射用意！」

「主砲斉射用意．．．．．諸元入力．．．．．完了しました！」

「よし！全艦に告げる。全艦、間違っても船のほうにはあてるなよ、
主砲斉射！！」

「了解！主砲斉射！！」

復唱とともに、戦隊を構成している全艦の前部主砲から、莫大な量の破壊のエネルギーが青白い光となって闇の書へと襲い掛かった。

それらのエネルギーは着弾とともに付近一帯に目がくらむほどの閃光を撒き散らした。

「クツ！．．．スクリーンの光度を最低にするのに加えて対閃光防御をしているとはいえ、いつも目を閉じてしまうな．．．．レーダー員、あの化け物は？」

「艦長、それが．．．．健在です。」

「何！？」

「エネミーは、荷電粒子砲着弾前にエネルギーシールドらしきもの

を展開。我々の砲撃を無力化したものと思われず。」

「そんな馬鹿な．．．本当に生物なのか？」

柏木は目の前の光景が信じられなかった。否、信じたくなかったというべきであろう。この当時の宇宙軍の艦船に搭載されていた49式連装荷電粒子砲は、開発中の次元歪曲弾や陸軍などが保有する熱核爆弾を除けば最も高い攻撃力を誇っていたのである。それが相手に何らダメージを与えることが出来なかったという事実は、柏木のみならず戦隊に所属する人員の全てが信じる事が出来なかった。

「．．．．．撤退だ。」

柏木は沈痛な面持ちでそう言った。

「何ですと!？」

副長は、まさかこんなにも早く柏木が撤退の決断をするとは思ってもしなかった。

「坂田副長、現状の戦力で奴に対抗することが出来ないことは、今の砲撃の結果を見れば分かる。認めたくは無いがな．．．。」

「．．．了解しました。全艦艇に撤退を指示します。」

副長は内心で安堵をしながらも、一つの疑問があった。それは、この化け物がこれから何処へ向かうのかという事である。それがもし日本なのならばこの撤退は結局のところ問題の先送りにはかならないのではないかと．．．。

（いや、奴が日本に来ると決まったわけではないし、仮にそうだとしても強力な防衛艦隊が奴を待ち受けていることになる。きっと大

丈夫だろう。」

そうポジティブに考えた副長は、その疑問を心の底にそっとうしまったのだが、それに対する解答はすぐに与えられたのである。

「艦長！エネミーが不明船を離れ本戦隊に接近中！」

「クソツ！奴さん狙いをこちらに向けたか．．．航海士！逃げることは可能か？」

「それが．．．エネミーは足も速いようでして、警備艇などもいる本戦隊では逃げることは困難かと思われます。」

「分かった。まず警備艇2隻にはそのまま撤退を続けるよう指示しておきなさい。それと、本部に救援要請を出すように。これより本艦、及び駆逐艦『若葉』はエネミーを迎撃。救援艦隊が本宙域に到着するまでの時間稼ぎを行う！」

「了解！」

第四話 『月軌道付近にて1』 (後書き)

戦闘描写というものを書くのはとても難しいものなのでね。格好よく書けている他の作者様達には本当に脱帽であります。

誤字脱字、内容に不自然なところ、感想等ございましたら、ご指摘いただけるとうれしいです。

第五話 『月軌道付近にて2』 (前書き)

文字数がだんだん増えてきたのは何故？

第五話 『月軌道付近にて2』

日本国・国防宇宙軍ムーンベース周辺

現在、この宙域では哨戒任務に出ている戦隊からの救援要請、政府からの防衛出動の許可をうけた、国防宇宙軍第1機動艦隊が出撃準備を完了し、見事な単縦陣を組みながら最大戦速で味方艦のいるであろう宙域へと急行していた。

「宇宙軍人たるもの、どんな敵が来ても驚かないつもりではあったが．．．まさか荷電粒子砲を無力化する生物が来るとは思いもしなかったな。」

そう呟いたのは第1機動艦隊旗艦、雪風級巡洋艦1番艦『雪風』艦長にして同艦隊司令の長谷川一等宙将である。彼は哨戒任務に出ている柏木二等宙将とも知り合いであり、よく話す中であつた。

「柏木、俺達が着くまで死ぬんじゃないぞ．．．。」

そんな不安を口にしながらも、長谷川は自らの友人が部下の命を第一に考えつつも、いざという時にはたかだか主砲が効かない程度で諦めないことをよく知っていた。

現在、柏木は自らを囮にして闇の書を月から引き離すことに成功していたが依然、敵に対して有効な攻撃を与えることが出来ずにいた。

「全く．．．荷電粒子砲、対艦ミサイル、果ては量子魚雷による浅異層次元からの不意打ち攻撃まで防ぐか．．．。たいした化け物だ。」

柏木がこのように呟く間にも巡洋艦『舞風』、駆逐艦『若葉』は、闇の書の触手攻撃や、次元航行艦からコピーしたであろうアルカンスィエルの攻撃にさらされており、アルカンスィエル着弾時に発生する次元断層に外部装甲の一部を剥がされている状況であった。

しかし、柏木達もただいいようにやられている訳ではなく、しっかりと敵の情報を収集して分析し、現状を打破する方法を探そうとしていた。

「つまり、奴は我々の航空機に搭載されているスマートスキンの様に常時360度を監視して、どこから攻撃が来ても必要最小限のエネルギーでシールドを張っているというのかね坂田副長？」

「はい。エネミー周辺のエネルギー量などを分析した結果、平常時はエネミーを覆うように均等にシールドが展開されているのですが、

ミサイル着弾時などには明らかにシールドのエネルギー量にバラつきが出ていましたので、恐らく間違いないかと。」

「ということは、我々が奴を倒すためには同時に多方向からの飽和攻撃によって奴のシールドの防御限界を超えればいいわけだ。」

「はい。しかし、そうなることや第1艦隊の到着を待たねばなりませんね。」

「そうだな．．．しかし、せめて一矢報いたいものだ。副長！駆逐艦『若葉』に今の旨を知らせ！本艦と共に主砲、及び対艦ミサイルでの正面攻撃と量子魚雷による敵後方からの攻撃を同時に行うと！」

「了解いたしました。何事にも実証実験は必要ですからね。」

副長は少し笑いながらそう言うと、指示通り『若葉』へと柏木からの攻撃命令を伝えた。

「艦長、全兵装使用可能、『若葉』も同様です。いつでもいけます。」

「．．．分かった、では始めるとしよう。全艦に通達！全兵装一斉射撃．．．．ファイア！！」

「アイサー、全艦、全兵装一斉射撃．．．．ファイア！！」

副長と砲雷士達の力強い復唱と共に放たれた主砲と対艦ミサイルは、闇の書のシールドを前方に集中展開させるために、その膨大なエネルギーを闇の書の正面にぶつけるため突撃し、その外側を大きく回りこむようにして浅異層次元潜行状態の量子魚雷が駆けていった。

「主砲、弾着．．．．今！！」

「対艦ミサイル、弾着．．．．今！！」

「敵、エネルギーシールドを前方に展開中です。」

「量子魚雷は！？」

この攻撃が成功すれば後続の艦隊の負担を減らすことが出来ると期待していた柏木は、この攻撃の要でもある量子魚雷の状況を砲雷士に報告させた。

「はい。量子魚雷全弾、順調に敵に接近中です。」

「そうか、これで決めねば後は無いぞ。」

柏木はそう不敵に笑うとレーダー画面に目を移した。こうしている間にも2隻の闇の書に対する砲撃、及びミサイル攻撃は続けられておりこの攻撃で闇の書に有効打を与えられなければ、後は逃げるこ
としか出来なくなるのである。

「量子魚雷全弾、弾着まで5、4、3、2、1、．．．．．今！
！」

弾着の瞬間、艦内のスクリーンは白一色となり、レーダー員はレー
ダー画像を食い入るように見つめていた。

まばゆい光がようやく収まったところには、先ほどまで敵がいた宙域
には何の反応もしなくなっており、そこにはいつもどおりの静寂が
支配する黒の世界が広がっていた。

「レーダーに反応なし。目標の消滅を確認しました。」

副長からの報告にもいまいち実感が沸かなかった柏木であったが、一度リーダー画面を見るとようやく自分達が勝利したという実感が沸いてきた。

「勝った？．．．我々は勝った．．．のか。」

「はい！艦長！！」

その時、艦が揺れた

「勝ったぞおおおおお！！！！」

「やった！勝ったんだ」

「第1艦隊の奴らめ、おいしい所は全部俺らがもらったぜ！」

それは、勝利に対する歓喜と、自らが生きていることに対する安堵からの魂の叫びであったろう。

よかった

柏木は心からそう思っていた。今回の勝利はなによりも、未知の敵に対する恐怖を抑えて戦ってくれた優秀な部下がいたからこそだと

思えた。それを踏まえて柏木は言った。

「ありがとう、みんな。」

その声は、歓喜の声に満ちたCICでは誰にも聞こえることは無かったが、柏木はそれでも満足していた。

「坂田副長。第1艦隊に伝えてくれるか『我、敵の排除に成功。負傷者もいるため、早急な基地への帰還を望む。ひいては不明船の回収は貴艦隊にお願いしたい』」と。

「了解しました．．．艦長．．．．．おつかれさまでした。」

副長は、疲れているであろうに笑顔を見せながらそう言うと、通信士へと指示を飛ばした。

「ああ。本当に疲れたよ。」

柏木は、一人そう呟くとCICに設けられた艦長席にその身を深くゆだねたのであった。

「 以上で報告を終わります。」

部下からの報告を受けた長谷川は、その報告に若干の悔しさと無力感を覚えたが、それよりも自らの友人の無事を確認できたことによる安堵のほうが大きかった。

（柏木の奴め、おいしい所をもつていけるだけもつていつておいて後始末は俺らにやらせるか……。まあ仕方が無い。何もしないよりかは数倍マシだ。）

そんなことを思いつつもまだ見ぬ世界の船に、並々ならぬ好奇心を持っていた長谷川は不明船が見えてくるのを今か今かと子供のように待ちわびていた。

「 司令。不明船を確認しました。スクリーン、拡大します。」

拡大された映像には、不明船こと「級次元航行艦『エステイア』」が映し出されており、長谷川はその映像を食い入る様に見つめていた。

白を基調として曲線が多い船体は、黒を基調として無骨なデザインの宇宙軍の艦艇とは、また違った美しさというか、優美さのようなものが見て取れた。

しかし、いつまでも見とれているわけには行かないと現実世界に戻ってきた長谷川は、自らの部隊に命令する。

「全艦に通達、周辺警戒を厳に！ 駆逐艦『吹雪』は不明船に接舷後、内部調査の後曳航作業を開始する。お姫様に傷をつけるなよ。」

こうして日本国は転移後初めて自国以外の星間国家を認知することとなる……………。

第五話 『月軌道付近にて2』 (後書き)

感想、ご指摘等ございましたら。教えてください。

第六話 『未知なる勢力』

7月10日・国防宇宙軍ムーンベース・第4ドック

現在此処では回収されたL級次元航行艦『エステリア』がドック入りし、解析と調査をされていた。

「宇宙怪獣出現!!」のニュースは瞬く間に日本全国に知れ渡り、一部では外宇宙探査を取り止めるべきだという声まで出ていた。

しかし将来、人口の増加に伴って高まるであろう資源需要、そしてなにより自分達以外の知的生命体がいるかもしれないという可能性は、日本人の宇宙に対する期待をさらに高める要因となったのである。

そしてそんな中、注目を集めている『エステリア』の前に一人の男が立っていた。

「主任! . . . 主任ってば! ! !」

主任と呼ばれた男は、声をかけてきた若い研究員のほうに顔を向けると小さなため息を一つして言った。

「全く、君という奴はいつも．．．どうしてこう空気を讀まないんだ。私が一人、妄想にふけっているというのに．．．。」

「いつまでもふざけないでくださいよ。この艦のコンピュータの情報が修復できるだけだったのでその中身を見せに来たんですよ。」

「随分早かったな。言語翻訳とかどうしたんだ？」

「英語に似ている言語でしたので、比較的早く解読できました。そんなことより、早く確認してください！」

研究員は少し苛つきながら報告書を主任へ手渡した。それを主任は面倒くさそうに受け取ると表紙をめくり、中身を確認し始めた。

「んーと．．．何々？。艦名、L級次元航行艦2番艦『エステリア』、所属は．．．．．長いな。後読んでくれ。」

「．．．はあ。分かりましたよ。えーと、所属は時空管理局次元航行部隊第3方面本部第2番艦、全長230m、全幅130m、「おい。」．．．．．はい？」

「艦内コンピュータから新しく判明した情報だけ教えろ、時間の無駄だ。」

「・・・了解しました。簡単に言うとこの艦の出身地の情報と、主砲と思しき魔道砲アルカンシエルとやらのデータ、デバイス、本局とやらの住所、先の化け物の正体などですね。」

「・・・ちょっと待て、魔道砲って例えはどうかと思うぞ。ついでに後半の情報は適当すぎるだろ！」

主任と呼ばれた男はそう言うと、軽く若い研究員の頭を小突いた。

「例えとかじゃ無いですよ。」

若い男は表情を変えることなくそう言った。

「・・・まじか。」

「ええ、まじです。」

数秒間の沈黙の後、先に口を開いたのは若い男の方だった。

「こいつの推進方式はレーザー核融合もありますが、魔道炉とかいう未知の推進システムとのハイブリッドです。武装のエネルギーも

全てそれからきています。」

「興味深いな。」

そう主任は答えると、報告書にもう一度目を通した。それによると、この艦は艦内で必要とされるエネルギーの大部分を魔法などという物に頼っており、初期の次元航行能力を有している戦闘艦という内容が書かれていた。その中でも主任の目に留まったのが、アルカンシエルであった。

「魔法エネルギーによって空間を歪曲、対象をその周辺の空間ごと消滅．．．か。我が軍の次元歪曲弾よりも進んでいるんじゃないか？」

事実。この時はまだ次元歪曲弾は試験段階にも入っておらず、先の間書ののような敵に対処するためにも早期の実用化が叫ばれていたのである。

「それも重要な点の一つではありませんが、それよりも主任．．．
．．．これを。」

そう言つて、研究員が渡したのはまだ主任が目を通していない報告書だった。

何をもつたいぶっているのかとも思った主任ではあったが、黙って

それを受け取ると内容を確認し始めた。それは時空管理局の情報であつたのだが、その中で2点、主任の目に留まったものがあつた。それは……

「ロストロギア接收の名目で行われている侵略行為、そして次元世界の平和を守るといふ名目での質量兵器廃絶。」

そう言ったのは研究員の方であつた。何か言おうとした主任ではあつたが、何も言わずに『エスティア』を見やり、心の中で呟いた。

(どうも……仕事が増えそうだな……)

事実、この報告を受けた日本政府は時空管理局なる組織を警戒すべき対象と設定。防衛大綱や、防衛力整備計画を見直し、さらなる国防宇宙軍の増強、外宇宙探査が進められたのである。

第六話 『未知なる勢力』（後書き）

次話は年表形式で書いて1世紀程、時間を進めるかもしれません。
（その間に技術チートを決定的なものにしたいという野望があるの
で・・・）

原作キャラはその後出る予定です。申し訳ありません。

感想、ご指摘お待ちしております。

年表 1 2060年～2159年

2060年

日本政府、第2外宇宙探査船団を派遣。（この探査から宇宙軍の艦船が護衛に就くようになった）

日本国本星があるメビウス星系（公募により決定）の第4惑星である惑星『扶桑』の調査が終了し、初期入植が開始された。

2066年

防衛大綱に則って進められた、各国防軍の増強が終了。

国防軍に海兵隊が新設される。

日本の総人口が7億人を超える。

2068年

第2次外宇宙探査船団が幾度にも重なるワープを経て、始めて日本人以外の知的生命体とのコンタクトに成功。それによると、国家名称を『エイリス連合王国』という新興星間国家である事が判明する。国防宇宙軍所属、若ノ宮級航空母艦1番艦『若ノ宮』が就役する。

2069年

第2次外宇宙探査船団が帰国。

日本政府として公式に『エイリス連合王国』と接触し、国交樹立に向け動き出す。

2075年

第3次外宇宙探査船団を派遣。

星間シャトルによる日本～エイリス間の定期航路が開通される。扶桑への計画的入植が完了。

2085年

第3次外宇宙探査船団が帰国。

日本国の総人口が8億人を超える。

2091年

第4次外宇宙探査船団を派遣。

扶桑の開発目標を達成。

メビウス星系第5惑星『瑞穂』のテラフォーミング実験開始。

2094年

第4次外宇宙探査船団が日本本星とほぼ同じ環境の無人惑星を発見。船団の一部が残り、調査を開始。

第4次外宇宙探査船団が2度目の日本外知的生命体とコンタクトをとることに成功。それによると、国家名称を『バレンティン第三帝國』という星間国家であることが判明。

2095年

第4次外宇宙探査船団が帰国。（無人惑星残留組は除く）

日本政府として公式に『バレンティン第三帝國』と接触し、国交樹立に向け動き出す。

エイリス連合王国との国交樹立25周年。

2100年

『瑞穂』のテラフォーミング実験完了。

無人惑星の調査が完了。公募により惑星『アリア』と命名される。

2104年

日本国の総人口が9億人を超える。

星間シャトルによる日本〜バレンティン間の定期航路が開通される。

2110年

日本国、エイリス連合王国、バレンタイン第三帝國の間で（以後、日英葉と表記）国際機関の設立に向け協議が開始される。

2011年

バレンタイン第三帝國との国交樹立25周年。

2117年

日英葉の3カ国によって構成される国際連合が設立する。

2118年

日英葉の3カ国で、集团的防衛と平和維持を目的とした国家間軍事同盟機構である独立国家連合軍、通称『ISAF』が設立される。

2119年

ISAF加盟国による初の共同訓練が実施される。

2020年

エイリス連合王国との国交樹立50周年

2122年

日本国防宇宙軍所属、金剛級戦艦1番艦『金剛』が就役する。
初の3カ国共同外宇宙探査が計画される。

2125年

日英葉の3カ国共同外宇宙探査船団が派遣される。

2131年

外宇宙探査船団が周辺空間を電磁パルスで遮断し、小惑星帯によって構成されたトンネルを発見。

2136年

次元断層を 回廊と暫定的に命名。無人機による内部調査を開始。
バレンタイン第三帝國との国交樹立50周年。

2137年

回廊の内部調査の結果、内部はそのままトンネルとなっていて別の宇宙につながっているものと見られ、通常航法で航行可能と分か
った。

3カ国共同で惑星防御、回廊防御、宇宙観測などに使用する超大型
宇宙ステーションの基礎研究が開始される。

2138年

回廊の有人調査開始。

2140年

回廊の有人調査完了。回廊をぬけた先に未確認の宇宙空間を確認。
外宇宙探査船団が帰還。

日本国の総人口が10億人を超える。同時に男女比が4：6となる。

2142年

回廊中継ポイントに別宇宙の調査拠点、及び外敵からの防衛拠点
として機能する超大型宇宙ステーションの建造開始。

2145年

エイリス連合王国との国交樹立75周年。

2147年

バレンタイン領内に国籍不明船団が侵入。難民という事が判明し、
乗組員からの話によると国家名称を『ガイア社会主義共和国』とい
う国家であり、隕石群の衝突により惑星環境が急変。結果的に、人

間が住める環境の星を見つけるために各方面へ移民船団を派遣するということになったという。

バレンタインがガイア本星へ調査船団を派遣。到着後、調査を開始。

2148年

ガイア本星の調査が完了。日本が保有するテラフォーミング技術の使用を提案。

日本、提案を受諾。

2149年

日本、ガイア本星のテラフォーミング開始。

各移民船団の帰国開始。

国防宇宙軍所属の艦船が異層次元パトロール中に地球と酷似した惑星を発見。調査の結果、平行世界の地球であり西暦2004年ごろであると断定。以後、観測継続。

2150年

観測中の地球衛星軌道にて時空管理局所属と思われる艦船が闇の書と思われる生物をアルカンシエルにて周辺空間ごと消滅させた事を確認。

回廊内にて宇宙要塞『ルナ1』の建造完了。

2151年

ガイア本星のテラフォーミング完了。

『ガイア社会主義共和国』が国際連合、及びISAFに加盟。日英葉賀の4カ国共同での外宇宙探査が計画される。

星間シャトルによる日本～ガイア間の定期航路が開通される。

2153年

ガイアも含めた初のISAF加盟国による共同訓練が実施される。

日本国の総人口が11億人を超える。

国連加盟国の全体での保有惑星数が200を超える。

4カ国共同外宇宙探査船団が派遣される。

2157年

外宇宙探査船団が帰国。

2159年

日本国防宇宙軍所属、大和級戦艦4番艦『紀伊』が就役する。

年表1 2060年～2159年（後書き）

これを書いている最中に、何度この作品がなのはとのクロスという事を忘れそうになったことか・・・。反省してます。

次話は2160年から始まります。原作キャラも出せる・・・かな？唐突に出した3カ国に関して追々紹介していきたいと思っております。

第七話 『いつもの光景』（前書き）

不定期とはいえ更新が遅れて本当に申し訳ありません。
弁解させていただきますとリアルが忙しかったのです。
そして、何故か投稿する度に文字数が増えています。
．．．原作？．．．はい、出すの忘れしました。

第七話 『いつもの光景』

2060年4月25日・日本国・首相官邸

現在此処では定例閣議が行われており、現首相である篠原政美（19、女）を含めた10数人が日本国の現在と将来について話し合っていた。

日本国は従来、衆議院議員は25歳以上、参議院議員は30歳以上からしか被選挙権が無かったが転移前に憲法改正がし易いように憲法が改正されていた為、バレンタインの帝國議會に倣って義務教育を終えた（飛び級も可）日本国籍の全国民に被選挙権が与えられるように憲法が改正され、実力があり公正な選挙で当選すれば国会議員になれるようになっていたため、現政権のように最年長が42歳、最年少は15歳という日本史上最年少の政権が誕生したのである。

「　　と言う事で、惑星『日高』の開発計画が難航しております、経産省としましては防衛省に国防陸上軍の派遣を要請します。」

「　とはいつでも此方だって金が自然と湧いて使えるわけではないですよ。財務省も支出は厳しいという立場なものですから、開発計画を見直せばよいのでは無いのですか？　．．．それとも全額、そちらでもっていただけると言う事であれば検討しましょう。．．．もちろん、死亡者が出たときの保障も含めて．．．ね。」

「・・・・・・・・!!」

今の議題は日本が開発中の惑星『日高』に関してで、この惑星は無人ではあるのだが、攻撃的で巨大な原住生物が生息していることが最近判明し、開発計画が思うように進んでいないため、国防陸上軍に開発団の護衛をしてもらいたいというものだった。

しかし、国防軍としても新規に発見された惑星の調査団の護衛などに人員の多くを割かれている状況であり、そうやすやすと部隊を派遣できる訳でもなかった。

明らかに経産相の萩原涼夜（21、男）と防衛相の園宮奏（17、男）の二人によって険悪な空気となった会議室であったが、その空気を払拭したのは副総理の本堂純一（19、男）であった。

「お二方とも、もう少し落ち着いてください。そもそも『日高』の開発計画に関しては多少の遅れが出てても対応が出来るように作成させたいです。」

「しかし、当初の調査結果では危険な原住生物など確認できなかったではないか。未確認だったのだから対応など出来るわけが無い。」

そう反論する萩原経産相であったが、その発言に対してキレた人間が一人いた。

篠原総理大臣である。

「あー、萩原くん。私達是对応出来るか出来ないかを聞いています訳ではなくてね、対応しろといっているのだけれども．．．理解してるかな？」

「しかし、護衛g」まだ言う？」．．．．．申し訳ありません。」

萩原の反論をぶった切った篠原は黒いオーラを発しながら、追い討ちをかけるかのように言った。

「今の計画では対応が出来ないのであれば、計画を見直せばいい。ただそれだけの問題だと私は思うのだけれども、何か問題があるのかな？」

「．．．分かりました。直ぐに取り掛からせます。」

「うん！物分りがいい優秀な部下を持つてる私は幸せだね．．．ね、奏ちゃん？」

「（涼夜め、それみたことか．．．！）え！？．．．そ、そうですね。」

いきなり自分に振られて困惑した園宮ではあったが、この時点ではまだ彼も首相が言っているのはただの質問だと思っていたのである。ただ首相の追及の矛先が自分に向けられただけとは知らずに……。

「私、一つ奏チャンに提案したいんだけどね。この惑星調査団の基
本警備計画なんだけれども、人……多すぎない？」

「それに関しましては調査団の規模、護衛範囲、及び指揮系統の問題等から部隊規模を判断した結果であります。」

「それにしても、この部隊庁舎の警備人員は多すぎると思うんだ。
・何のために無人警備ロボットがあるのかな？それをフル活用すれば幾ら部隊庁舎が広大だといっても必要最低限の人員で済む筈だよ。特に調査中の惑星『オーシア』、『クイント』、『日輪』では陸軍を派遣こそしているけれども危険な生物とかも発見されていないし、特に脅威になるものも無い。なら派遣規模を縮小して『日高』に回すことも出来るんじゃない？……奏チャン、何をそんなに恐れてるの？」

あ・な・た・で・す！と全力で叫びたい園宮ではあったが、質問に答えるべきと判断し、その口を開いた。

「確かに、現在のところ脅威となる生物等は確認されてはおりませんが、『日高』の件もあるように調査中にそう言ったものと遭遇す

る可能性も否定することは出来ません。従って、派遣規模の縮小のご提案に關しましては「可能性の話で」・・・？」

話を途中で遮られた園宮は、訝しげに首相の方を見ると先ほどとは明らかに雰囲気が変わっていた。嫌な予感がした園宮は首相から目をそらすと、周りの大臣の多くが不思議そうにしているのに対し、副総理の本堂だけがあからさまに「あゝあゝ、やっちゃまった」とでも言いたげな顔をしていた。

会議室を嫌な沈黙が支配する。

それはまさに、嵐の前の静けさであった。

「可能性の話で言い訳をするな!!」

「「「「「!?!?!?!?!」」」」」

それは多くの閣僚にとっては始めて聞く音量であったし、明らかに怒っていることが分かり、普段から閣議などで彼女と接している閣僚達は皆、驚きの表情をしていた。

特にその怒りの対象であった園宮などは内心では逃げたい気持ちでいっぱいであった。

「ただ単に面倒くさいだけの癖に、未確認の脅威の可能性？バカじゃないの？前例主義なんていつの時代の遺物？いいかげんにして！」

散々な言われようであったが事実ではあったため園宮は反論することが出来なかった。確かに手間がかかる仕事であったために、手を抜こうとしたのは事実であった。しかし、だからと言って彼を責めるのも酷というものである。なぜなら近年、国防軍、及びその上位組織である防衛省の仕事量は日本国の勢力の拡大と比例して増大しており、その他にもISAFとの共同訓練や、救難任務、そして第2の地球で確認された時空管理局に対する警戒任務などもあり、防衛相である園宮に任される仕事の量も半端なものではないのだが

しかし、それは全ての大臣に言えることであった。この閣議に出席している全ての人間が日本国の勢力拡大と比例してその疲労も増大していたのである。

だが、そんな時代だからこそ仕事をこなさなければいけないと園宮は改めて思い知り、反論することなく首相に言った。

「申し訳ありません総理。直ぐに計画の見直しに取り掛かります。」

「よろしい！さすが私の奏チャン！」

怒涛の勢いで会話が進んでいたのだが、流れに付いていけなかった萩原は、園宮が態度を変えたことによろやく気づくと園宮に確認を取るように言った。

「．．．？、という事は陸軍を派遣してくれるのか？」

「ええ、金に余裕が出来ましたからね（時間の余裕が無くなったが）、検討しましょう。」

「あ、ありがとう！」

一応、国防陸上軍を派遣するということで決着がついたようである（細かいところは後で詰めるとして）が、今日の本題は次の議題であった。

発言するのは先程こつ酷く叱られた園宮防衛相と星野遥外相（30、男）であり、議題の内容は時空管理局に関してであった。

日本国を含めた国際連合加盟国が直接彼らと接触したことはまだ1度も無かったが、2055年の日本国領での敵対生物への対処事件

において回収された、次元航行艦『エステリア』の艦内コンピュータを解析して入手した情報には、時空管理局の組織体系、目的、規模、魔法技術、次元航行システムなど様々なものがあつたが、その中でも管理局の目的である「ロストログアの回収と質量兵器の廃絶」や、映像資料の中に艦に搭載されている魔道砲アルカンシエルによつて惑星を宇宙空間から攻撃し、それによつて地表は着弾地点を中心として百km以上が消滅し、その余波で惑星環境が急変し生き残つていた人々も次々と死んでいく資料が残されていたため、国際連合としてはこれから別次元の宇宙にも目を向けていこうとしている中で管理局と接触する可能性は極めて高いと判断していた。

勿論その映像資料も当初は、敵対勢力に対する脅しの為に作成されたのではないかという意見もあるにはあつたが、平行世界の地球衛星軌道で確認された時空管理局艦船が敵を消滅させる時に周りの人工衛星を含めた空間を丸ごと消滅させたため、国際連合では「時空管理局という組織は自らの目的のためには第3者の犠牲も厭わない武装組織」という認識で一致していた。

「では総理、私のほうから始めさせていただきます。」

そう言つて話し始めたのは園宮防衛相であつた。

「今月の23日、次元パトロール中の国防宇宙軍所属艦艇が第3異層次元において大規模な艦隊を確認。観測の結果、時空管理局次元航行部隊と見られることが判明しました。艦隊規模は27隻で、艦隊構成ですが我々が今まで確認していたL級、S級の他にも未確認

の大型艦が多数確認されました。航行目的は不明ですが、報告によるとL級の最大速度で航行していたといえますから何か緊急事態でも発生したのではないかと。」

「その間、相手に見つかったりはしなかったのですか？」

そう質問したのは本堂副総理であった。園宮は本堂のほうに向き直ると報告書を見ながら言った。

「追跡に当たったのは駆逐艦『秋月』ですが、追跡中は浅異層次元潜行状態でしたのでまず見つけることは不可能に近いかと。」

「そしてこの件の大まかな所は各国にも知らせております。」

この発言は星野外相であった。

「皆どついつたの？」

「はい、3カ国とも現状維持に努めるとの事です。」

「しかし、我が軍としましては万が一にも時空管理局が相對している脅威が、我々にも影響を与えるのであればISAFで出動する可

能性も視野に入れて準備をしております。」

「うん、分かったよ。じゃあ、星野さんはレーティアちゃんと、セーラちゃんと、オリガちゃんに今回の件の詳細を伝えて、出来るならば警戒レベルを引き上げてもらえるように言ってください。あ、奏ちゃんはそのまま準備を続けていいからね。」

ここで、篠原が言った3人は正式にはバレンタイン第三帝國レーティア・アーデルハイト総統（16、女）、エイリス連合王国セーラ・アヴァロン王女（21、女）、ガイア社会主義共和国オリガ・カテーン最高委員会委員長（11、女）と言う、れっきとした国家主席なのであるが、篠原総理はマスコミ非公開の場では基本的に愛称で人を呼ぶためこの様な緩い空気が作られるのである。

「了解いたしました。」

時は2060年、ミッドチルダではJS事件が発生し、英雄達の活躍によってその混乱が治まった年である。

そのころ他国では……………

同日・バレンタイン第三帝國・首都ザクセン・總統官邸

「総統閣下、日本国より先日の時空管理局の件で追加の報告書が届いております。」

「ああ分かった。其処に置いておけ、後で目を通す。」

現在この総統官邸執務室では帝國総統であるレーティア・ハーデルハイトがその小柄な体を半包囲する形で構築された紙の要塞を攻略している最中であつた。

「かしこまりました。．．．では失礼します。」

そう言うと初老の男性は書類を机の隅に置き、静かに部屋を後にした。

すると、男が部屋から居なくなり、部屋にレーティア一人となつた瞬間に部屋の中から何かが消えた。

何が？

「音」である。

今までレーティアが要塞戦デスクワークをしていた時のキーボードをたたく音や、

筆の音が一切しなくなったのだ。簡単に言えばレーティアが仕事を中断したのである。

仕事などはじめから無かったかのように机から離れたレーティアは、部下が置いていった報告書を手に取るとニヤニヤしながら中身を確認しようとした。

（デスクワークなどしておいたら、あまりの退屈さに寿命が短くなるわ。やはり、人生には刺激が必要だな。）

バレンタインは議会こそあるものの、あくまで発案や法案の調整役としての役割が大きく最終決定権は実質、総統であるレーティアが握っている。デスクワークも演説も完璧にこなすことは出来るのだが、最近は時空管理局に興味津々であり（日本から輸入したマンガ、アニメ等によって魔法というものに興味をもつたため）管理局に関する報告書が届くと、仕事そっちのけで飛びついているのであった。

（フッフフ・・・さて、おそらく内容はこの前確認された艦隊のことだろうが・・・今度は何が分かったのかな？）

上機嫌に報告書に手を伸ばしたレーティアであったが、その楽しみは頭に響く衝撃と共に潰えたのであった。

「ガッ!?!?.....き、貴様ゲツベルス!いきなり何をするか

「!!というか何時からいた!!」

「だめよレーティア。それは、お仕事が済んでからのご褒美なんだから・・・何時からって・・・私はいつでもあなたと一緒によ」

「気・色・悪・い・わ!!」

このように、レーティアをいよいよに弄くっているのは国民啓蒙・宣伝相であるグレシア・ゲツベルスであるのだが、仮にも帝國總統である人間に対してこの様な態度で接するのも彼女ぐらいである。

「それにしても何で貴女、そんなに管理局に敏感なのかしら？」

「リアル魔法だぞ！魔法！興味をもつに決まっておろうが!!」

（後で、ヒルデガルトちゃんに輸入規制提案してみようかしら・・・）

この後も言い争い（レーティアが一方的に怒鳴ってグレシアが流して遊んでいるだけだが）が続いたことから、恐らく要塞戦は日をまたいだことであろう。

同日・エイリス連合王国・首都アルビオン・王宮・第1執務室

こちらにも日本国より報告書が届き、第1王女であるセーラ・アヴアロンが側近であるウルフガング・カニンガムより報告を受けていた。

「そうですか．．．分かりました海軍に警戒レベルを引き上げるように伝えてください。それと、『ルナ1』の基地司令にも同様に警戒レベルを引き上げるようにと．．．。」

「かしこまりました。国防相を通じて直ぐにお伝えいたします。」

エイリス軍は成層圏以下の防衛任務を担当する陸軍と、宇宙空間での作戦行動を担当する海軍の2つだけであり、最高司令官でもあるセーラが直接命令することも出来るのだが平時は国防相を通して指令を伝えていた。

そして、宇宙要塞『ルナ1』は一応国際共同管理なのだが、国連加盟国の中で最も回廊から距離的に往来がしやすかったエイリスが管理権の多くを保有していたため基地司令もエイリス人であるため、要塞の警戒レベルなども本国であるエイリスからの指示に従って決定されるものであった。

「嫌なものですわね。部下を危険な宙域へ向かわせなければならぬ
ことは……。」

「それが彼らの使命にして存在意義でもありますゆえ……どうか
そのような悲しい顔をなさらないでください。」

「……そうね。彼らにこんな心配をするのも失礼に当たるかもし
れませんわね……本当にこの国の騎士には感謝してもしきれませ
んわ。」

王女はそういつと椅子に深く座ると筆をおき、窓の外の世界へと目
を向け、自国の騎士たちの無事と民たちの平穏を願ったのであった。

エイリスの夜空に光る二つの月はその美しさと優しさでアルビオン
の地を照らしていた

同日・ガイア社会主義共和国・首都カテーリングラード・国家
院・委員長私室

「カテーリンちゃん 日本之星野さんから報告書が来てるよ」

「リーリヤ、もう少し静かにしてほしいんだけど・・・今、仕事
中。」

ガイア社会主義共和国は国家名称こそ社会主義を謳ってはいるが、長く続いた社会主義体制は少数企業による市場の独占状態による国家経済の低成長の反省から、個人資産も認められつつあり全体的な経済成長と共に段々と資本主義に移る予定であり、現在政府の仕事量は今までの比ではなくなっていた。

そして、そんな国の指導者を務めるのがこの少女オリガ・カテーリンであり、リーリヤと呼ばれた少女はガイア最高委員会副院長を務めるリーリヤ・V・リトヴァクであるのだが、両方とも日本ならば小学校に通っているような年齢であり、会話の内容が国政に関することでも傍から見ると幼女たちの微笑ましい会話にしか見えないのが数少ない彼女たちの悩みでもある。

しかし、ガイアはバレンタインと同様に実力さえあれば国家指導者にもなれるシステムを敷いているので、このような光景が見られても不思議では無いのだ。

「それで、リーリヤ・・・報告書って・・・何の？」

「ん？．．．ああ、例の自称、次元世界の法の番人様御一行（笑）の事だよ。『警戒レベル上げてくれませんか』だって。」

「上げてもいいけど．．．パトロールの回数は増やせないよ？お金無いんだから。」

彼女の言うとおりガイアはまだ小惑星群の衝突による荒廃から完全に立ち直ったわけではなく、復興予算捻出のため軍事予算は出来る限り削減されていたため、宇宙軍の規模もISAF中最も小規模なものになっており広範囲の哨戒任務は極力行わないようにしていたのである。

「でも用心するに越したことは無いと思うけど．．．。」

「分かった。リーリヤがそこまで言うなら何とかしてみる。」

「じゃあ！ジュザン元帥に伝えておくれ！」

そう元気に言う通りリーリヤは、カテーリンの部屋を飛び出していった。一人残されたカテーリンは少し疲れながらも少し元気をもらった様な気がしていた。

「それじゃあ、仕事をしますか！」

そう言うとカテーリンは自らの前に重なる職務を先程よりも幾分か速いペースでこなしていくのであった。

第七話 『いつもの光景』（後書き）

というわけで、それぞれの国家がいろいろとカオスな状況になって
おります。

次は話ではなく国家の設定を書こうかと思っています。
感想、ご意見お待ちしております。

もう一度、更新開いて申し訳ありません。

GWが終了しましたのでまた更新が滞る可能性が高いです。ご了承
ください。

追記：日付を変更させていただきました。

国家設定 〈エイリス連合王国編〉

『エイリス連合王国』

首都：アルビオン

人口：9億8千万人

通貨：スターリング・ポンド（呼称、ポンド）

国家主席：セーラ・アヴァロン

保有惑星数：78（共同管理を含む）

観測中惑星数：6

公用語：エイリス語

政治：

政治体系は限定的民主主義を採用しており、平民から選挙によって選ばれる議員で構成される下院と、貴族などから選抜された議員で構成される上院からなる立法機関を有している。立法権は両院でもっているが予算の先議権などは下院が有している。昔、貴族である事を鼻にかけて自己中心的な政治をしていた上院は、下院から監視をされる立場であり権力も弱い。両院の議員の給料は国家の平均年収を基準にして決定される。両議院とも解散権は国民にある。

行政は最終決定権を女王に委ねており、政府は女王を中心にして各大臣は両院から憲法に定められた人数比で女王が指名する。

経済：

資本主義経済であるため多くの私企業が存在する。外国企業も多く国内に入ってきており経済状況は良好である。主な輸出品は自動車、宇宙船舶などの重工業製品から紅茶や宝飾品など多岐に渡る。

歴史：

エイリス連合王国のある惑星『エイリス』は昔、幾つもの国に分かれておりエイリス連合王国はその中でも大国として君臨していた。しかし、それらの国は国家紛争や内戦によって疲弊、滅亡していった。エイリス連合王国も何度も侵略行為を受けていたがそのことごとくを撃退、国家を守り続けていた。最終的にエイリス以外の大国が滅亡し、その他の中小国も衰退の一途を辿り、それらの国々をエイリスが吸収することによって勢力を拡大、惑星全土を掌握するに至った。

軍事：

エイリス連合王国はエイリス王室軍を保有しており、軍は陸軍と海軍によって構成されている。陸軍は、保有惑星の治安維持（空も含む）を担当し兵力は200万を保有している。海軍は、宇宙空間にある宇宙交通路の警備、防衛を担当し兵力は300万（海兵隊を含む）を保有している。

・エイリス王室海軍

エイリス軍の象徴ともいえる軍であり、ISAFの中でも第3位の規模を誇る。

軍人はその階級に関わらず騎士と呼ばれ、国民からの評価も高い。艦隊は、機動艦隊を7個艦隊保有し、その他に多数の警備部隊を保有している。

戦闘中はISAFの中でも最速を誇る性能を持つ戦闘艦による一撃離脱戦法が得意。（もちろん指揮官によって多少かわるが）

・主力艦

『ヴァンガード』級宇宙戦艦

全長410m

主兵装

大口径ハイレーザー8門

小口径ハイレーザー24門

各種ミサイル用VLS128セル

近接防御用パルスレーザー16門

量子魚雷発射管12門

主機関

レーザー核融合炉4基

詳細

レーザー兵器の塊ともいえる艦であり、艦体の至る所にレーザー砲が格納されている。艦の形状は流線型であり、空間歪曲シールドを最も効率よく展開できるように設計されている。塗装は海軍の標準塗装である白に塗られており、ISAFの軍艦の中でもっとも優美な艦として知られている。

『ドントレス』級宇宙巡洋艦

全長320m

主兵装

大口径ハイレーザー6門

小口径ハイレーザー16門

各種ミサイル用VLS96セル

近接防御用パルスレーザー12門

量子魚雷発射管8門

主機関

レーザー核融合炉3基

詳細

機動艦隊の防空艦や、警備艦隊の旗艦として運用されているヴァンガード級の簡易版ともいえる艦。デザインは基本的にヴァンガードと変わりは無い。この艦も武装は全て格納されており、外からその武装を見ることは出来ない。

『オーディシヤス』級宇宙航空母艦

全長

400m

主兵装

対空ミサイル用VLS32セル

近接防空用パルスレーザー32門

艦載機

FA-07テンペスト

E-05センチリー

等80機

主機関

レーザー核融合炉4基

詳細

エイリス海軍の保有する航空母艦。双胴空母のような形状をしており、艦隊の防空任務、早期警戒任務などを担当する。武装は個艦防御用の物しか装備されておらず、作戦中は常に巡洋艦や駆逐艦などが護衛している。艦載機はバレンタイン第三帝國との共同開発である。

『ジャベリン』級宇宙駆逐艦

全長

270m

主兵装

大口径ハイレーザー6門

小口径ハイレーザー8門

各種ミサイル用VLS32セル

近接防御用パルスレーザー4門

量子魚雷発射管6門

主機関

レーザー核融合炉3基

詳細

艦隊の中で最もよく目にする艦である。艦隊防空任務、護衛任務、警備任務、哨戒任務などその担当する任務は多岐にわたる。武装は全て格納されており、外から見るとは出来ない。

国家設定 ㄥエイリス連合王国編ㄥ（後書き）

次はバレンタインの予定です。

この設定も話を進めていく中で少しずつ細かい所まで書き加えていこうと思っています。

国家設定　↳バレンタイン第三帝國編↳

『バレンタイン第三帝國』

首都：ザクセン

人口：12億4千万人

通貨：マルク

国家主席：レーティア・ハーデルハイト

保有惑星数：80（共同保有も含む）

観測中惑星数：8

公用語：バレンタイン語

政治：

基本的には総統であるレーティアによる専制政治体制であるが、今のところ本人の頭脳が優秀な人と人格者であることが幸いして、国民の圧倒的な支持を得つつ安定的な発展を遂げている。立法組織である議会はありますが、議員の選出は選挙ではなく時間内点数無制限の各種試験と面接によって上位から決定されている。総統職は希望者に対する各種試験、面接によって候補を絞っていき、最後は国民投票によって決定される。ちなみに、バレンタインには解散権は存在しない。

経済：

バレンタインは資本主義経済であり多くの私企業が存在している。宇宙に出てから交流が始まった日本やエイリスの企業も多く国内に進出している。ガイア社会主義共和国と初めて接触したのがバレンタインであったため、ガイアに進出している外国企業の割合の中でバレンタインの企業は最も多い。主な輸出品は自動車、宇宙船舶から木材や医療機器など多岐に渡っている。

歴史

バレンタイン第三帝國がある惑星『バレンタイン』は、昔からバレンタインしか国家というものが無かった。しかし、惑星『バレンタイン』には国家はバレンタインだけであったが、少数民族は存在していた。バレンタインはその勢力拡大とともに少数民族とも対立していき、終には武力による衝突に至った。ゲリラ化した少数民族らを圧倒的物量と技術レベルで制圧し惑星全土を領有した結果、現在のバレンタイン第三帝國が出来た。

軍事：

バレンタイン第三帝國はバレンタイン第三帝國軍を保有しており、陸軍、海軍、空軍、宇宙軍で構成されている。陸海空軍は惑星の防衛を担当し、宇宙空間における任務は宇宙軍が担当している。総兵力は約700万と、ISAF最大の規模を誇る。

・バレンタイン宇宙軍

バレンタイン帝國軍の中でも最大の軍であり、ISAF最大の規模を誇る宇宙軍である。艦艇は1次大戦の戦艦の様な形状をしており、主砲も光学兵器ではなく大口徑レーザキャノンが主である。迷彩色は基本的に青で統一されている。

・主力艦

『シユヴァルベ』級航空戦艦

全長

480m

主兵装

連装大口径レールキャノン8基16門

連装小口径レールキャノン4基8門

各種ミサイル用VLS64セル

多連装近接防御用コイルガン8基

量子魚雷発射管12門

艦載機

FA-07テンペスト

E-05センチリー

等30機

主機関

熱核融合炉4基

詳細

バレンタイン宇宙軍の主力航空戦艦である。その名の通り、航空機を運用することが出来るが、航空母艦並みの航空機管制能力は無い。エネルギーシールドに加え、艦そのものの複合装甲のおかげで高い実弾防御能力を誇る。

『ブランデンブルク』級航空巡洋艦

全長

360 m

主兵装

連装大口径レールキャノン4基8門
連装小口径レールキャノン4基8門
各種ミサイル用VLS32セル
多連装近接防御用コイルガン12基
量子魚雷発射管6門

艦載機

E-05センチリー
8機

主機関

熱核融合炉3基

詳細

バレンタイン宇宙軍の主力巡洋艦である。艦隊においては防空任務などに就き、警備艦艇などでは旗艦を務めることが多い。シュヴァルベ級同様に実弾防御に優れており、艦隊戦においてはアウトレンジからの砲撃を基本戦法としている。

『ケーニヒスベルク』級宇宙駆逐艦

全長

310 m

主兵装

連装大口径レールキャノン4基8門
連装小口径レールキャノン2基4門
各種ミサイル用VLS32セル
多連装近接防御用コイルガン6基
量子魚雷発射管4門

主機関

熱核融合炉2基

詳細

バレンタイン宇宙軍の主力駆逐艦である。各国の駆逐艦同様、哨戒任務、防空任務、護衛任務、艦隊戦など様々な任務に就くため最も多く目にする艦である。

『U318』級潜宙艦

全長

160m

主兵装

量子魚雷発射管8門

対艦ミサイル用VLS12セル

主機関

レーザー核融合炉1基

詳細

バレンタイン宇宙軍が運用している潜宙艦は、日本から提供された浅異層次元潜行技術を導入した「宇宙の潜水艦」である。主な任務

内容は領域の接続宙域のパトロールや、国連管理外の世界の情報収集であるが、敵と万が一にも遭遇し、戦闘に至った場合に単艦にて帰還できるだけの戦闘能力を持たせている。

国家設定　くバレンタイン第三帝國編く（後書き）

次にガイアについてやってから話をあせらずに進めていこうと思っています。

そして、作者のリアルのほうで少々忙しくなりそうなので、更新頻度が落ちる可能性が高いです。申し訳ありません。

国家設定 〈ガイア社会主義共和国編〉

『ガイア社会主義共和国』

首都：カテーリンググランド

人口：6億4千万人

通貨：ループル

国家主席：オリガ・カテーリン

保有惑星数：46（共同管理を含む）

観測中惑星数：2

公用語：無し（しかし、使用人口ではガイア語が圧倒的多数）

政治：

政治体系は社会主義であり、議会は現在のところガイア共産党の単党独裁状態である。しかし、上層部に権力が集中したため国家運営がうまくいかず経済は破綻寸前の状態にまで陥り、少ない人口にも関わらず勢力を広げたため本星の防空体制が整っておらず、結果的に小惑星群に国土をいよいよ粉碎されてしまった過去の歴史を反省し、資本主義による経済の形の大転換、国家の規模に合った勢力維持、そしてそれを守るだけの国防力の構築を掲げたカテーリンのもと、現在、ガイア社会主義共和国は全力を挙げて改革中である。

経済：

昔は社会主義であったため公企業による市場の独占状態が続き、経済が麻痺状態になってしまったため資本主義経済に転換中であり、公企業の民営化や多くの私企業が発足している。主な輸出品は、木材や希少金属などである。国内に進出している外国企業のなかではバレンタインの企業が最も多いが、最近ではエイリスの企業も多く進出してきた。

歴史：

元々、ガイア社会主義共和国が存在していた惑星にはガイアの他にも幾つかの中小国家が存在していた。ガイアはそれらの国と交流し同盟を組み、敵対する国家を侵略、併合していくことよって勢力を拡大。友好国も傘下に収め、ガイア社会主義共和国連邦が誕生したが、所属していた国家の一部が同盟を組んでガイアに宣戦したことよって世界大戦に拡大。最終的に戦争には勝利したものの、連邦に所属していた中小国は経済破綻をしている国が多く、その全てをガイアが管理下においたのが現在のガイア社会主義共和国である。

軍事：

ガイア社会主義共和国はガイア共和国軍を保有しており、軍は陸軍、海軍、空軍、宇宙軍、海兵隊によって構成されている。主な任務は宇宙交通路の防衛と惑星の防衛であるが、総兵力は約400万とISAF中、最も小規模な軍隊である。

・ガイア共和国宇宙軍

ガイアが保有する軍としては最大の規模である。しかし、ISAFの中では量、質の全てにおいて劣っているため現在、日本とバレンティンからの技術提供によって軍の近代化を進めている。艦艇の基本迷彩色は赤であり、主な戦法は多数の対艦ミサイルの斉射による敵艦隊に対する飽和攻撃である。

・主力艦

『クロンシュタット』級ミサイル宇宙戦艦

全長

370m

主兵装

連装中口径ハイレーザー4基8門

多連装近接防御コイルガン8基

各種ミサイル用VLS192セル

量子魚雷発射管8門

主機関

熱核融合炉2基

詳細

多数のミサイルによる敵艦隊への飽和攻撃をするために開発されたミサイル戦艦である。艦の形状はロシア海軍のキーロフ級巡洋艦の様であるが、此方はステルス性を考慮した設計のためにさらに平べったい印象を受ける。艦隊においては旗艦として行動する。

『ヴァリヤーグ』級ミサイル宇宙巡洋艦

全長

320 m

主兵装

連装中口径ハイレーザー4基8門
多連装近接防御用コイルガン4基
各種ミサイル用VLS128セル
量子魚雷発射管4門

主機関

熱核融合炉2基

詳細

ガイア共和国宇宙軍の主力巡洋艦であり、艦隊の盾、槍として機能する。当初は巡洋艦というよりは、武器庫艦のようになってしまったため、近接防御能力が低くなり、大量のミサイルを積み込んだため被弾時に弾薬庫が誘爆する危険が高くなった。そのため一度建造計画を凍結し、設計を一からやり直したが、コンセプトはあまり変わらなかつたためやむなく艦内の隔壁の強化、実弾防御力向上、EN防御力向上などが設計に加えられ建造された。

『レーズヴィ』級ミサイル宇宙駆逐艦

全長

280 m

主兵装

連装中口径ハイレーザー4基8門
多連装近接防御用コイルガン6基
各種ミサイル用VLS64セル
量子魚雷発射管4門

主機関

熱核融合炉2基

詳細

ガイア共和国宇宙軍の主力駆逐艦である。他国の駆逐艦と同様に多種多様な運用方法が要求されて建造された。ミサイル搭載数も控えめに、防御能力を向上させ単艦行動がしやすくなっている。普段はもっぱら保有惑星の警備任務についている。

国家設定　くガイア社会主義共和国編　（後書き）

と言う訳で、ひとまず国家設定は終えて話を焦らずに進めていこう
と思っています。

エイリスの時に書きましたが、国家設定も話が進むのに合わせて書
き加えていこうと思います。

第八話 『第一ゲート周辺宙域にて1』 (前書き)

今回は短めの話です。

お気づきかもしれませんが作者名を変更させていただきました。

第八話 『第一ゲート周辺宙域にて1』

2160年・10月6日・回廊・第一ゲート監視基地

“ゲート監視基地”とは 回廊の中間宙域に在る『ルナ』を指揮所として回廊の両端のゲートに建設された小型基地である。建設目的は“回廊への侵入の阻止”であり、国連の領域と反対方向にある第一ゲートを監視する監視基地は侵入防止の為にゲート封鎖用の電磁パルス発生器、機動艦隊クラスの敵部隊と交戦状態になつても『ルナ』からの救援が来るまで持ちこたえられる程度の武装が施されている。

そして現在この基地では当直に当たっていた基地指令室の人間達が
．．暇を持って余していた。

「先輩、俺らなんでこんなとこに居るんでしたっけ。」

そうガイア人のレーダー員に言われたバレンタイン人の通信員はさわやかな笑顔と共に言った。

「これ以外に就ける職が無いからだ。」

「先輩ならどんな仕事にもありつけると思いますがねえ．．正直な所、暇でしょうがないですよ。こんな所で無表情な画面と仲良くにらめっこするくらいだったら、毎日、巨大モンスター狩りでもしてた方がエキサイティングでいいじゃないですか。」

「平和を嫌うなよ．．画面といちゃつくだけで給料が出るんだか

ら言っことなしろっ？」

「それはそうですねえ．．．やっぱり刺激が足り「皆、きちっと働いておるか？」．．．。」

「おっと、司令がご到着か。おしゃべりはまた後でな。」

そういうとバレンタイン人の男は自らの席へと逃げるように戻っていった。

そして、会話の中断の原因であるエイリス人の基地司令、クリストファー・ヘイワード大佐は基地指令室を一瞥すると、自らの席に座りさきほどのガイア人のレーダー員に声をかけた。

「今日も宇宙は平常運転かい？」

「はっ！、今のところ不審な物体などは確認されておりません！」

そう聞くとヘイワードは満足したように微笑み、もう少し肩の力を抜くように言うと今度はバレンタイン人の通信員に話しかけた。

「そういえば、今度の長期偵察任務にかりだされるバレンタインのUボート部隊は指揮官があのでーニッツ提督なんだって？」

「はい、今回の任務はUボートの長期間航行演習も兼ねておりますので、バレンタイン軍人の中で最も潜宙艦に精通したでーニッツ提督が選ばれたそうです。」

「若いのにたいしたものだ．．．やはりこれからの世界に必要なの

は若者の力なのだ。君達も追い抜かされないようにがんばれよ。」

「ハハハ、我々もまだまだ若い事をお忘れなく。」

そんなやり取りを繰り返しながら平穏な日常が過ぎていくものと誰もが思っていたのだが、それはガイア人のレーダー員が発した言葉によって裏切られることとなった。

「ん？・・・これは、レーダー反応？」

「どうした？」

「あ、司令・・・レーダーに反応あり、数1、距離40000、速力35宇宙ノット、真っ直ぐゲートに向かって進行中です。」

「今、パトロールから帰ってくる艦はいないはず・・・通信員！ルナに報告、『不明船接近中、ゲートへの侵入を阻止する』と、総員戦闘配置！電磁パルスを発生させゲートを封鎖する！」

「了解」「」

その言葉と共に第一ゲート監視基地があわただしく動き始めた。第一ゲートは電磁パルスが展開され完全に封鎖され、ゲート周辺の小惑星に施された多数の武装が目覚めたのである。

同日数十分前・回廊周辺宙域・???

「オイ！局の奴らはまだ追ってきてるか？」

「一応、スピードじゃあこっちの方が上なんで離してはいるんスケド．．．エネルギー量がヤバイツス。」

彼らは次元犯罪者といわれる者達であり、宇宙空間や管理外世界で海賊行為をして生計を立てていたのだが時空管理局の次元航行艦に犯行中のところを見つかってしまい攻撃を受けながらも現在、逃走中であつた。

しかし、攻撃を受けたときに推進機関である魔道炉が損傷し、このまま航行してもいずればエネルギー切れで航行不能状態に陥ること間違い無しであつた。そしてそれは、時空管理局に捕まるということと同義なのである。そのため、彼らはエネルギー切れになる前に管理局の追っ手を撒くために身を隠すための小惑星帯を探していた。

「ボス！！見つけましたよ。いい隠れ場所を！」

「本当か！？」

「ええ、ちと行くまで時間がかかりますが一度入っちゃえばこっちのもんです！」

「よし、そうと決まれば簡単だ！最大スピードでかつ飛ばせ！！」

「へい！ボス！」

同じころ・時空管理局・次元航行艦隊所属XV級次元航行艦『チエレスタ』・艦橋

現在、『チエレスタ』は通報によって駆けつけた際に発見した次元犯罪者を追跡中であり、艦橋内は緊張感で満たされていた。

「副長、奴らの動きに変化は？」

「依然、速力、進行方向に変わりはありません。」

「そうか、通信士！以後も投降を呼びかけるんだ。」

「了解しました。」

XV級次元航行艦は、管理局艦船の中でも最新鋭であり、その速力も従来のものとは比べるべくも無く優秀であった。しかし、犯人たちの宇宙船は通常空間においての速力ではXV級を凌駕しており、先程から『チエレスタ』は犯人達との距離が開いていくばかりであった。その『チエレスタ』艦長であるアデル・ベイントンは部下からの信頼も厚い優秀な艦長であったのだが、艦の性能で負けているのだからどうしようもなかった。

「艦長！該船が進路を変更しました・・・これは、奴ら小惑星帯に逃げ込むつもりです！」

「何だと!？」（奴らめ、頭は回るようだな）

アデルは内心でそう毒づく舌打ちをした。なぜなら、障害物が多い小惑星帯において、全長300mを超えるXV級では、全長70m程度の快速艦に追いつくことなど不可能であった。強引に実行しようものなら艦の航行能力自体に支障が出るかもしれないのだ。

しかし、追跡をやめることはできない。そのためアデルは部下に追跡続行と支局へのS級次元航行艦の増援要請を出させた。出来る限り、犯人の位置を特定しておいて、その後に着した小型のS級と共同すれば如何に小型快速の宇宙船だろうと確保できると踏んだのだ。

(絶対に見失うわけには行かない……!!)

アデルはそう決意を強めたが、無情にもレーダー画面は彼我の速度の差を如実に示していた。

回廊・『ルナ』・中央指揮管制センター

「司令、本国政府より回答が届きました。」

照明が落とされ暗い部屋の中に一人の男が入ってきた。彼は、少し前に第一ゲート監視基地から不明船接近の報を受け、本国政府へと報告、並びに回答をもらい『ルナ』の司令に報告をしに来たのだ。

「早かったな。読み上げなさい。」

「は、『国際連合領域内への如何なる勢力の侵入を認めない。全力を持って此れを阻止せよ。』とのことです。」

それを聞くと司令は、とても楽しそうな笑顔を見せると、目の前の3次元映像を見ながら言った。

「．．．単純なのは良い事だ。つまり、如何なる手段を用いても侵入者を排除すればいいんだらう？」

「端的に言えばそういうことになりますね．．．如何いたしますか？恐らく第一ゲート監視基地のほうでは既に戦闘準備が整っているころかと。」

「．．．こちらからも、部隊を出すとしよう。『ジャベリン』級駆逐艦2隻あれば十分かな？今準備中だが、到着までどれくらいかね。」

「出撃準備はもう整いつつありますから、10分と言った所でしようか。最も、不明船が電磁パルスで封鎖されたゲートを突破しようと思つかどうかは疑問ですが．．．。」

「バカは追い詰められると何をするか分からんと言っしな。最悪の可能性を考えるに越したことは無い．．．自滅してくれば仕事が減って有難いがな。」

「了解いたしました、第一ゲート監視基地へ戦闘許可を出し、駆逐艦の出撃を急がせます。」

そう言うと男は指揮管制センターを後にした。

一人残された司令は、目の前に映し出されている第一ゲート監視基地のレーダー画面を見やり、一人呟いた。

「よつこぞ、この素晴らしき世界へ。」

第八話 『第一ゲート周辺宙域にて1』 (後書き)

これから少し時空管理局との絡みがありますが、それが終わると少し国内や、他国の話を書こうかと思っています。

焦らずに、なのはと絡ませていこうと思っています。

テスト期間が始まり、忙しくなるため更新が滞ります。ご容赦ください。

第九話 『第一ゲート周辺宙域にて2』 (前書き)

更新再開いたします。

ご都合主義がかなり入りました・・・あと話しも短めになります。

第九話 『第一ゲート周辺宙域にて2』

第一ゲート監視基地・基地指令室

現在、監視基地内では人員が慌ただしく動いており、その中でも基地指令室は特に喧騒としていた。

「おい！彼らとの通信はまだ出来んのか！」

「申し訳ありません。魔法技術なんてもので作られた通信機器の場合、こちらの通信機器との相互運用性は皆無とも言っているのです。」

「発光信号でも何でもいいだろうが！」

「試してみはしたのですが、彼らと我々では信号の内容が違うのか応答が無いのです。」

「このままだと、彼らはゲートの電磁パルスでおじやんだぞー！」

ゲート封鎖用に展開されている電磁パルスシールドは、その高エネルギーを持って対レーザー防御と高速性に優れるエイリスの駆逐艦までも焼き切る事が可能であった。それが今回は、軍用艦と比べれ

ば中速程度の小型船である。結果は火を見るより明らかだった。

第一ゲート監視基地の面々は当初、呼びかけで停船させ侵入を阻止という形で侵入を防ぎたかったのだが、このとき小型船は『チエレスト』の攻撃によって通信機能が喪失しており、呼びかけに応じるはずも無かった。

そのため、基地司令であるハイワードは部下に一つの提案をしていた。

“不明船の機関部にハイレーザーによる砲撃を行い、強制的に停船させる”というものであった。

第1目標である進入阻止は、電磁パルスシールドの展開に伴い成功したとも言つてよく、あと十数分で『ルナ』から増援として高速性に優れたジャベリン級駆逐艦が到着する筈であり、仮に不明船が逃走を図ったとしても確実に拿捕できる状況が整う。ならば、如何にいい終わりを迎えるかが問題であった。

しかし、不明船が呼びかけに応じず、このままだとゲートのシールドに接触して消滅してしまうのでハイワードは不明船の強制停船を提案したのだった。

「どつだろつか？」

「．．．．．それは、難しいですね．．．。該船は、映像から見るにかなりの損傷です。あの状態の船体にハイレーザーを完璧に機関部だけに当てたとしても最悪、船体がバラバラになるかもしれません。やはり、増援部隊が到着するのを待ったほうがいいかと。」

「分かった．．．しかし、このままでは増援が到着する前に彼らはシールドに接触してあの世行きなのは明白。何としてでも、接近を妨害して時間を稼がねば．．．威嚇射撃の用意は？」

「後160秒で完了します。」

第一ゲート周辺宙域・?????

「局の奴ら、まだ追ってきてるか？」

「いや、何とか離せてるみたいっす。」

「よし、今のうちに隠れられる場所を見つけておこう。しばらくすれば、奴らも諦めるだろ。」

「ボス！前方にトンネルみたいのがありますぜ、周りは小惑星がかこんでるみたいだ……。こりゃ、周りの惑星群に隠れるのはちと難儀しますね。こっちの動きが制限されませぬ。」

「ほう。ならば、中に入って見るとするか。もとより、後退という選択肢は無いわけだしな。」

「くくへい！くく」

このとき、彼らの船のセンサーが、正常に作動していればそのトンネルの入り口を塞ぐ様に展開された電磁パルスシールドを確認することが出来ただろうが、残念ながら「チェレスタ」の砲撃によってセンサー類はそのほとんどの機能を喪失していたため、ただの小惑星群の中に開いた穴という認識でこのボスを含めた全クルーが一致してしまったのである。

数分後・第一ゲート監視基地・基地指令室

「司令、該船が主砲の射程圏内に入るまであと30秒です。」

「・・・発射用意。」

「了解しました。対艦用ハイレーザー全門、発射用意。該船が射程に入り次第、威嚇射撃を開始せよ」

復唱と共に基地や、周りの小惑星に取り付けられた大口徑ハイレーザーが不明船に向けてその照準を近づけた。勿論、命中させはしないが・・・。

「該船、射程圏内まで残り、10、9、8、7、6、・・・」

カウントとともに室内の緊張感が高まっていく

「5、4、3、2、1、・・・0!..!」

ハイワードはゆっくりと静かに、「一言で

「射撃開始」

戦いが始まった

第一ゲート周辺宙域・???

「小惑星帯より高エネルギー反応！、砲撃です！！」

「くそっ、こんな所にも局の奴らが居たのか！？．．．魔力反応は？」

「すみません。そっち系統のセンサーは故障してまして．．．。」

「しかしこんな辺境にも勢力を拡大させたとはな、どのみちここ」

に留まっても捕まるだけなんだ。ここは当初の予定通り突っ切ってみようぜ。．．．生き残っている砲を全て動かせ！とにかく撃ちまくりながら中央突破だ！」

「了解！」「」

彼らは、後が無い事を悟り中央突破という策をとることで一致したが、その望みは無情にも叶えられることは無かった。

回廊・『ルナ』駐留艦隊所属・『ジャベリン』級駆逐艦『シエフィールド』・CIC

エイリス製の艦の特徴の一つに、艦内が明るいということが挙げられる。

これは昔、艦内にお客様などをお招きするときなどに備えて貴賓室を設け、艦内のいたるところを煌びやかに装飾していた頃の名残といわれるが、他の国の軍艦ではまず見られない光景であるといえる。

そしてそれは本来、明かりといえはディスプレイからの光ぐらいしかないＣＩＣでも例外ではない。それを証拠に、現在艦長であるレイ・ド・モルガンは暇なときに余裕で本を読むことが出来た。

「さて、うちの基地司令は“どんな手を使ってでも”侵入を阻止しろと言って来た訳だが・・・まあ、撃沈って言う結果は避けたいものだね。」

「ええ、全くです。後味の悪い終わらせ方はしたくない。・・・しかし、あの基地司令も冗談を言うものなのですね。」

「あの人は冗談を言う様な人間じゃあないよ。１００％本気で撃沈を許可している。・・・いや、寧ろ望んでいるかな？」

「まさか。」

「・・・君も、もう少し長くあの人の下で勤務していれば直に分かるようになるぞ。」

「はあ・・・。」

レイは気の抜けた返事をする部下から目を離すと、どの様に不明船を拿捕するかを考えた。

監視基地からの報告で、電磁パルスシールドの展開が完了したことは知らされていたし、威嚇射撃をすることも報告されていた。ならば、不明船のゲート内への侵入は不可能と断言していい。その場合、自分達に出来ることと断言したら“不法侵入者の確保”ということに尽きるのだ。

(船の状態のせいで機関を破壊することが叶わないならば、内部の制圧を試みるとするかな・・・)

レイは一人考えをまとめると副官に声をかけた

第九話 『第一ゲート周辺宙域にて2』 (後書き)

感想、ご意見お待ちしております。

第十話 『第一ゲート周辺宙域にて3』

第一ゲート監視基地・基地指令室

第一ゲート監視基地は先程から威嚇射撃を始めていたのだが、不明船が発砲してきたため対応に苦慮することになってしまった。

「単純に“敵”と判断すれば楽なのだが・・・出来れば拘束したいな。」

これが、基地指令室内にいる人間の総意であった。

不明船が発砲してきたとはいえ距離以前に火力不足なのか、基地の火器にかすり傷一つつけることが出来ていないのだ。そして、船体規模と今までの速力から考えて、仮に基地に向かって最高速力で突撃して来たとしても何の問題もないし、そもそも意味も無いため基地指令室内の人間はどのように対応するか決めかねていた。

「強制的に停船させるといっても、あの状態の船体に撃ち込んだりしたらすぐさま爆沈ではないですか？」

「いつそのまま待って奴さんがばてるのを待つか?・・・俺はそれでも別にいいが。」

「しかし、彼らの必死さを見るに何か絶対に捕らえられてはいけな
いというような感じを受けますね。 . . . 何かから逃げてきたので
しょうか？」

「その線が強いだろうな。 . . . とすると、追っても追ってきてい
るのか? . . . 面倒なことになるな。」

「皆、分からない事を今論じても時間を無駄に浪費させることに他
ならない。まずは、増援の部隊が到着するのを待とう。『ジャベリ
ン』級駆逐艦には強襲艇も搭載されているから内部から制圧するこ
とも可能かもしれないしな。」

「ああ、その手がありましたな。しかし、到着までにはまだ時間が
かかるのでは？」

「なら、到着まで時間を稼げばいいだけの話さ。」

回廊・『ルナ』駐留艦隊所属・『ジャベリン』級駆逐艦『シ
エフィールド』・CIC

現在『シエフィールド』は僚艦の『ジャベリン』級駆逐艦『トライバル』とともに、最高速度でもって第一ゲートへと急行していたのだが、その間にある準備をしていた。

“敵船”の内部制圧、“不法侵入者”の拘束である

「艦長、制圧班総員の強襲艇への搭乗完了。強襲艇自体の出撃準備はあと140秒ほどで完了します。」

「分かった。．．．到着まではあとどれくらいかかる？」

「．．．現時刻より190秒で現場宙域に到着します。」

「強襲艇の準備を急がせなさい。」

「了解いたしました。」

彼らの考えている作戦はこうだ

1、敵船制圧用の部隊を搭載した強襲艇2隻を光学迷彩を展開させて敵船へと接近させる。

2、第一ゲート監視基地と合同でハイレーザーとミサイルによる威嚇射撃で敵船の注意を前方に集中させる。

3、強引に接舷後、時間差で敵船に侵入。内部を制圧、搭乗員を拘束する。

はつきり言つて高速航行中の小型船に接近するのもかなりの危険行為のため作戦の成功率は高いとはいえなかったし、制圧班の人間を危険にさらすことにもなつてしまうので幹部の中からは慎重論を主張する者もいたのだがハイワードとレイは不明船の乗組員から情報を入手したかつたため上記の作戦をすすめることにした。

数分後・第一ゲート監視基地・基地指令室

「司令、『シエフィールド』、『トライバル』の2隻から強襲艇2隻の発艦を確認しました。不明船との接触まで90秒です。」

「味方部隊のゲート通過のため電磁パルスシールドの展開を一時中断します。現在、シールドエネルギー減衰率70%。100%到達まで13秒です。」

「不明船、針路、速力、依然変わらず。ゲート到達まで150秒で

す。」

現在基地指令室は現在、通信士、レーダー員、砲雷科、幕僚のそれぞれが自らの職務をひたすらに遂行していた。

ハイワードは先程、『ルナ』基地司令に作戦を伝え認可もとっていた。

後は、どれだけいい結果で終わらせることが出来るかである。

「司令、シールド減衰率100%。僚艦の通行が可能です。」

「レイの奴と通信回線を開けるか？」

「かしこまりました。」

数秒の間においてハイワードの目の前にディスプレイが現れ、『シエフィールド』艦長、レイ・ド・モルガンが映し出された。

『何かあったか？』

「ゲートの通行が可能になった。．．．後は任せたぞ．．．とでも言えればいいかな？」

ヘイワードは皆無に等しい演技力を使って出来るかぎり嫌みっただしく言ったのだが、レイは特に気に留めずに答えた。

『．．．後は任された。』

「出来る限りサポートはしてやる。．．．しくじるなよ。」

『はて？誰に言っているのかな？』

このような無駄口がたたけるのもこの二人がお互いの事を認め、信頼しているからといえるだろう。

第一ゲート周辺宙域・不明船

「ボス！」

「何だ！？今度はどうした？」

「前方から大型の宇宙船が．．．」

「何!？」

このころ彼らも自らの針路を塞ぐように展開している『シェフィールド』、『トライバル』の2隻を確認していた。彼らは自分の目で見て得られる情報と今までのことから、明らかに目の前の船が戦闘艦であると確信していた。しかし、自分たちの後ろから接近していた強襲艇には気づくことは無かったのだが．．．。

「．．．どうしましょうか?」

乗組員の一人がボスを見て不安そうに言う

「このまま馬鹿正直に突っ込んで行っても沈められるだけだしな．．．
かと言って無駄に時間をかければ後ろから追ってきてる局の奴らが追いついてくる。八方塞とはこの事か．．．。」

ボスは悩んだ末に一つの結論を出した。

「．．．降参だ。船を停める。」

「「「!?!?!」」」

周りのクルーはまさかの言葉に驚愕した。

「そんな、捕まったって碌な事になりやしませんぜ!?!」

「そうです!まだ何か手はあるはずですよ!」

「いや、船長の言うとおりだ。このまま殺されるよりかは捕まって裁かれたほうがましかもしれん。」

船内はボスの意見に賛成する人間と反対する人間に分かれたが、トップの決断に従うということで最終的に決着し、船を停止させた。

第一ゲート周辺宙域・『ルナ』駐留艦隊所属・『ジャベリン』
級駆逐艦『シエフィールド』・CIC

「停まった?」

「．．．停まりました．．．ね。」

CICにいる面々はレイを始めとしてしばらく現状に驚いてしまっていた。しかし、何時までも呆けているわけには行かないため、レイは強襲艇に作戦の続行を伝えようとした。

「通信士、制圧班に作戦の続行「艦長！！」．．．何だ！？」

「不明船から人が．．．。」

第一ゲート周辺宙域・不明船

「ボス！ほんとにやるんですかい！？」

「ああ、本気だ。」

彼らは目の前の敵に投降の意思を示そうとしたのだが、通信機器が全損していたためボス自らが船外に出て白旗をあげようと言いついたのだ。（目の前に居る人間が白旗の意味を理解しているという危険な前提の下だった。）

「このままここに居てもいいより危険でも行動したほうがいい。．．．それとも、このまま死んでみるか？」

「だからってなにもボスが行くこと無いでしょう．．．。」

「こういつときはリーダーが出張るのが常識なんだよ。いいから行かせろ．．．なあに、死にやしないさ。」

「．．．分かりました。気をつけてください。」

「おう。」

そう言うとボスは宇宙服を着てエアロックへと入っていった

数分後・第一ゲート監視基地・指揮指令室

「．．．本当に投降するということなのか？」

「恐らくは・・・。」

「レイ提督の部隊には作戦の変更を伝えております。既に強襲艇の光学迷彩も解除されていますので後は、内部の人間の拘束と船の接収ですね。」

不明船からリーダー格と思われる男が投降の意思を示したため、当初の作戦を変更し穩便に人員を拘束することになった。そのため、ハイワードは部下を危険に晒さなくてもよくなった為、安堵していた。

「通信士、レイの奴にご苦勞とでも伝えておいてくれ。」

「了解しました。」

戦闘することなく終わったためか通信士の顔も晴れやかに見える。

しかし、悪いことの後には悪いことが続くものと言われる。

そして、それはリーダー員の叫びと共に基地指令室の人間の知ると

ことなつたのである。

「基地司令!!」

「どつした!?!」

「レ、レーダーに反応あり。大型艦1、速力30宇宙ノット、針路は・・・真つ直ぐ此方に向かつてきます!!」

本番はまだまだこれからなのであつた・・・

第十話 『第一ゲート周辺宙域にて3』 (後書き)

ご意見、ご感想お待ちしております。

急ぎでつくったため、間違いが多いかもしれません。

第十一話 『増援到着』（前書き）

久しぶりに小説情報を見たまいたら、PVが39000、ユニークが9600に達していました。（中途半端で申し訳ありません。）

こんな作品を見てくださっている方々に感謝の意を表すと共に、これからも精進していく所存であります。

第十一話 『増援到着』

日本国・首相官邸・危機管理センター

とうとう来たか

というのが全閣僚の本音であった。

特に、近年になって干渉している惑星の一部国家で不穏な動きがあったり、宇宙怪獣や、調査中に遭遇する危険生物などの対応に追われている防衛相の園宮奏や、これから仕事が増えること必至の外務省の長である星野豊などは自身のこれからを想像して暗い雰囲気を漂わせていた。

「我々が広大な宇宙空間や平行世界にも手を出している以上、彼らと接触するのは時間の問題ともいえましたが・・・とうとうと言った所でしょうか？」

副総理である本堂はやれやれといったように言った。

しかし、これに異を唱える者も出た。

「しかし、現段階では今回の件に時空管理局が関わっていると判断するのは難しいのでは？そう悲観することも無いと思いますが。」

「いや、報告に出ている不明船が来た方向には時空管理局の支局や管理世界が存在していることが報告されている。不明船の損傷の原因が事故でないのであれば、管理局からの攻撃を受けたか仲間割れかだ。そして、どちらにせよ管理局が介入してくる可能性が高い。特に前者はな。」

「各国の対応はどうなっているのかしら？」

そう質問したのは、最高権力者である篠原であった。彼女にとっては時空管理局が介入していようがしていまいが国境警備になんらかの強化策を打ち出さねばならなかったため、そして今回の事件が起こっているのが国際共同管理の『ルナ』であるため、各国政府首脳との意思疎通が重要であった。

「管理権が最も強いエイリス政府は『ルナ』司令部に最悪、撃沈をも許可して侵入を阻止するように伝えたようですが、細かい所は現場指揮官に任せているようですね、しかし念のため周辺の基地から増援をいつでも送れるように部隊を編成しています。」

こう答えたのは園宮であった。彼としては、数年前につくられた防衛計画の大半が完了していたため、いざ戦争になったとしても持ちこたえられる体制が出来上がっていたのでそこまで心配はしていなかったのだが、やはり同盟国の動きは気になるものなのだ。

「バレンタイン、ガイア両政府は 回廊から離れていることもあり
ますし、さほど警戒感を強めているわけではありませんが、一応此
方から注意を促しておくように伝えます。」

外相である星野もさほど今回の件で外敵に対する警戒を強めたわけ
ではなかったが、公僕というものはいつでも“悲観的に準備し、楽
観的に行動しなければならぬ”のである。従ってエイリスと比べ
て危険度が小さい同盟国に対してもある程度の危機感を持つてもら
わなければ困るのだ。なぜなら、今後、ISAFとして行動すると
きに支障が出る可能性も否定することができないからである。

「・・・まあ、妥当かしらね。」

篠原は聞くことは聞いたとでも言うつように静かにそついつと園宮に
話を振った。

「さて、園宮防衛相？今回こんな事態になつてしまつたわけだけ
ども・・・“例のやつ”は予定通りすすめるのかしら？」

「・・・迷いましたが、先方は乗り気ですしこの様な事態になつて
しまったからこそ進めるべきと我々は考えています。・・・それが
時空管理局との衝突を生むとしても。」

「やっぱりね。．．．いえ、別に否定したいわけではないし、むしろ賛同したいのだけれども．．．。」

「だけれども．．．なんですか？」

「奏ちゃんの仕事が増えちゃうなーとか思っただけ。」

「総理．．．。」

園宮はまさか篠原が自分の心配をしていたとは思っても見なかったので驚愕と共に感動したのだが数秒後、この感動が全くの無駄であった事を知る。

「奏ちゃんを弄って遊べない．．．キュウ。」

「キュウってなんですか．．．本堂さんともいちゃついでください。」

いきなり巻き込まれた本堂は“何てこと言ってくれたんだ”とばかりに園宮を睨んだが直ぐに現実に戻ると話題を戻した。

「コホン、．．．何はともあれ現在、事態は収まってはおりません。閣僚の皆さんは不測の事態に備えて緊急時の体制に移れるように準備をしておくようお願いいたします。」

「これで、今回の閣議は終了とする。解散!！」

篠原の声と共に全閣僚は席を立ち、自らの戦場へと戻っていったのである。

第一ゲート監視基地・基地指令室

この部屋の主、ハイワードは一生分の疲れを体感しているような気分であった。なぜなら、不明船の確保に成功したと思っただら今度は、追っ手と思しき大型艦が接近しているというのだ。これで疲れない人間が居るだろうか？少なくともハイワードはそうだった。そしてそんな彼の心労を増やすような報告が飛び込んでくる。

「司令、画像データ照合完了。日本国からの報告にあった時空管理局新型艦と思われます。」

「例の奴か．．．。」

日本国防軍の駆逐艦が偶然捉えた時空管理局の大艦隊。その中に複数いた大型艦。画像データと目の前の艦を見比べたが、どう見ても同型艦であることは間違い無いだろう。

「レイに通信を．．．。」

「了解しました。」

通信士は程なくして回線を開いた。

『どうしたもんかね．．．。』

「一応、此方としては彼らとの対話をしようと思っている．．．出来ればの話だな。」

『分かった。俺達は今の作業が終了しだいゲートの封鎖に勤めることにする。．．．それでいいか?。』

「ああ、そうしてくれ。」

『じゃあな。』

二人は互いに現状で出来る事をする事で一致した。

第一ゲート周辺宙域・時空管理局・次元航行艦隊所属XV級次元航行艦『チエレスタ』・艦橋

これは一体どういうことだ？

これは、艦内の人間全てが似たような事を思っているだろうと艦長のアデルは思っていた。自分達は先程まで追跡していた海賊船を見失ってから、海賊船が最後に進んでいった方向に進んでいた。

そして、ようやく追いついたと思ったらなんと海賊船は所属不明の小型船に接舷されていて、その奥には見たことも無い高エネルギーシールドを背にこれまた見たことも無い大型艦が2隻展開しているのだ。

これで混乱しないほうがおかしいと言うものだろう。

しかし、アデルは現実に戻ってくると当初の目的を思い出した。

（しつかりするんだ。我々の目的は犯罪者の確保だ。まずは彼らが何者なのかを聞きだして、犯罪者の仲間でないのならば身柄をこちらに引き渡してもらおうように交渉しなければ．．．。）

アデルはまず正体不明の勢力との対話を試みようと考えたが、自分で動くよりも先に状況は動いた。

「艦長！！前方の小惑星群の施設から通信が。」

「回線をひらけ。」

アデルはまさか向こうから対話を申し込んでくるとは思わなかったが、どちらにせよ自分も同じ事を考えていたため結果オーライと判断した。

数秒の間を置いて目の前の空中にディスプレイが展開される。そして、その中には第一ゲート基地司令であるクリストファー・ハイワードが映し出されていた。

アデルはまず自分から話始めることにし、口を開いた。

「お初にお目にかかります。私は時空管理局・次元航行艦隊・第1次元方面部隊第131艦隊所属・XV級次元航行艦『チェレスタ』艦長のアデル・ベイントン一佐です。」

『・・・ISAF所属、宇宙基地『ルナ』第一ゲート監視基地司令、クリストファー・ハイワードです。』

ハイワードは無表情にそう言った。そして、アデルにこう言った。

『貴艦は我々の領域を侵犯しています。貴艦の航行目的を知らせ、即時停船せよ。さもなければ此方は実力を持って対応する。』

冷たい声であった。まるで、自分が見ているのは人間ではなく機械なのではと思ってしまうほどであった。それほどまでにアデルの目の前に居た人間は“軍人”であったと言えるだろう。

しかし、アデルも職務に忠実な“管理局員”であったため画面越しに伝わる威圧感にも必死で耐えた。そして、自らに与えられている職務をこなそうとハイワードに対して交渉の口火を切った。

「現在、貴方達が拘束をしている人間は我々の管理世界内で強盗容疑、及び殺人容疑がかけられています。我々はその者らを追跡中でした。貴方達が犯人を確保してくれたことに感謝いたします。そして・・・」

『彼らは我々の領域を侵犯し、あまつさえ攻撃を加えてきました。従って身柄を拘束したに過ぎませんので貴方達から感謝されるようなことはしておりません。今後、彼らの身柄はISAFが管理し、我々の本国へと連行、我々の法によって裁かれます。』

アデルは犯人の身柄引き渡しを要請しようとしたのだが、ハイワードはその先を言わせなかった。そして彼が言った言葉を簡潔にまとめるところなる。

彼らはもう我々の管理下にありません。よって引渡しに応じることはありません。

しかし、アデルも負けてはいなかった。彼は出来る限りの作り笑顔をすると先程ハイワードに遮られた言葉を間違いなく伝えた。

「彼らは凶悪な犯罪者です。そして我々には彼らを逮捕する義務があります。身柄の引渡しをお願いできませんか？」

しかし、ハイワードもにこやかに返答した。“お断りします”と。

そして、そこで通信は途切れた。

艦橋は沈黙に支配される。

まず脱却したのはアデルの副長であった。

「艦長。如何いたしますか？強制的に身柄を確保いたしましょうか？」

アデルは少し逡巡したが、副長に静かに言った。

「増援の部隊が到着するまで後どれくらいだ？」

「2分といった所でしょうか。」

部下からの答えを得たアデルは迷いを振り払って自分の副官に命令を伝えた。

「増援の部隊が到着するまで少し、様子を見るとしよう。到着したら艦長たちと対応を協議する。できれば、交渉を再開したい。」

アデルは増援部隊と合流した後、目の前の勢力との交渉を再開して犯人たちの身柄を強引にでも確保しようと考えていた。これは、管理局の戦力を過信し目の前の勢力の戦力を過小評価していたからでた結論であったといえるだろう。しかし、管理局内でこのような考えが一般的であったのも事実であるため一概に彼を責めることも出来ない。

「了解しました。」

副長は納得して短く答えると部下に命令を伝えに言った。アデルはその後姿をしばらく眺めていたが、ディスプレイの方に目を移して考えにふけた。

（お願いだからこちらの言う事を聞いてくれ。僕だって、出来る限り平和的に事を収めたいんだ。）

しかし、現実というものは思っているよりも残酷なものであった。

数分後。

増援のS級次元航行艦2隻と合流した『チェレスタ』は陣形を立て直すと再び不明勢力との交渉を試みようとしたが、その時状況が大きく動いたのである。

「よし。副長、彼らとの間に通信回線は開けるか？」

「少々お待ちください・・・」

作業に取り掛かった副長であったが、彼が作業を終える前にレーダー員からの報告が上がってきたのであった。

「艦長！！不明勢力の小型船が！」

「！？」

報告を受け、アデルはディスプレイを見た。そこには不明勢力の小型船に曳航されている海賊船の姿があるではないか！？それに加えて小惑星群の中にぽっかりと開いた穴を塞いでいた高エネルギーシールドが消失しつつあることが報告された。

（まずい！このままでは逃げられてしまう！）

アデルは副長に通信回線を開くのを急がせると同時に、艦隊に戦闘態勢につく事を命じた。

このとき彼は大いに焦っていたのだが、そんな彼をさらに追い詰めるような報告が上がってきた。

「艦長！レーダーに反応。あの小惑星群の開口部の向こう側です。数は．．．6！？、大型艦6、そのうち4隻は前方の2隻と同型艦と見られます。速力30宇宙ノット、本艦隊に向け直進コースをとっています！」

「奴らの仲間か．．．！！！」

彼らの目の前に立ちふさがるようにして現れた新たな艦隊。それは、『ドントレス』級宇宙巡洋艦を中核とし、元から居た『ジャベリン』級宇宙駆逐艦2隻を合わせれば『ルナ』駐留艦隊の3分の2にあたる戦力であった。

第十一話 『増援到着』（後書き）

管理局は艦船の速力の単位に何を使用するのでしょうか？

今回は仕方ないのでノットを使用させていただきました。

しかし、いまだに戦闘描写が無いですね・・・（しっかりと書けるかどうかもわかりませんが・・・。）

ご意見感想お待ちしております。

第十二話 『睨み合い』（前書き）

更新が遅れましたことお詫び申し上げます。

現在リアルの方でまたテスト期間が始まりそうですので、また更新頻度が低くなります。申し訳御座いません。

テストが終われば夏季休業が始まりますゆえ、安定した更新頻度に出れると思っています。

第十二話 『睨み合い』

第一ゲート周辺宙域・『ルナ』駐留艦隊旗艦『ドントレス』
級宇宙巡洋艦『フォーミダブル』・CIC

「艦隊を、戦闘態勢へ移行。先遣の『シェフィールド』、『トライバル』と合流した後、前方の管理局部隊を包囲する。」

「了解いたしました。」

『ドントレス』級巡洋艦。エイリス宇宙軍の主力巡洋艦であり、その美しい外観とは裏腹に多数の大口徑ハイレザーを搭載し、その高速性を活かした一撃離脱戦法が特徴である。

そして、そんな『ルナ』駐留艦隊の旗艦を勤めるこの艦のCICの指揮官席に座上するのは『ルナ』基地司令にして駐留艦隊司令官を務めるサイモン・プライス中將である。

本来ならば彼は、自らの基地指令室にて状況を見守りながら必要に応じて味方を動かせばいいのだが、彼は現場主義の人間であり、緊急時には自らが前線にでることをモットーにしているため今回のような状況が生まれたのである。（もちろん、基地のほうは副官に任せてきている。）

「通信士官。管理局の奴らと少しおしゃべりをしたい。回線を開いてくれ。」

「了解しました。．．．司令、くれぐれも彼らに必要以上の事を伝えないでくださいね．．．」

「あたりまえだ。私は、自国と同盟国の利益のみを考えて生きている。そんな人間が利敵行為などするはずも無かる。」

「．．．今、“敵”って言いましたよね。」

「．．．．．。」

「閣下。回線開けます。」

「おお！早速やってくれたまえ！！」

（ごまかしましたね．．．。）

このとき、サイモンの目には通信士官が天使に見えていたとか．．．

なにはともあれ、CICの中心に大型のホログラムが映し出され、胡散臭い笑みを浮かべた（サイモン視点）アデルが出てきた。

「初めまして。私は時空管理局・次元航行艦隊・第11次元方面部隊第131艦隊所属・XV級次元航行艦『チエスタ』艦長のアデル・ベイントン一佐です。我々の要求は、そちらが拘束している犯罪者の身柄引き渡し。どうかお願いできませんか？」

「丁寧な自己紹介どうもありがとうございます。私はサイモン・プライス。一応、宇宙基地『ルナ』の司令をやっとる。ああ、階級は中将だ．．．つまり、さつき君が話したヘイワード君の上官に当たる。」

これを聞いたアデルは内心で“しめた！”と思っていた。先程の交渉は一方的に拒絶されてしまったが、今回は先程の男よりも上位の人間が出てきている。つまり、この男を負かすことが出来れば犯人の逮捕が可能かもしれないからだ。

天はまだ自分達を見捨ててはいないと思えた瞬間であった。そしてアデルは犯人の身柄引き渡し要求に加えて情報収集も行おうとしていた。これだけの戦力を保有している組織である、将来に管理局の障害となるのは確実といってもいい。

交渉に限らず会話にとって一番大切なものは笑顔である。そのため、アデルは出来る限りの笑顔で話し合いに臨んだ。

しかしこの時アデルに限らずこの場に居る全ての管理局員に伝えることがあった。それは、目の前に居る艦隊が自分達よりも戦力的に劣っているという根拠もない先入観であったであつた。

もちろん数的には自分達が劣勢なのだが、目の前の艦隊は魔力センサーに反応しなかつたため純粋な科学力で動いているものと判断したのだ。時空管理局は今まで数多くの世界と接触してきたがその中には管理局に抵抗した勢力も居た。

それらは、魔法を拒絶する中小勢力であり、大抵は管理局憲章で廃絶を目指している質量兵器、つまり魔道技術を使用しない兵器を使用している犯罪集団であつたのだ。そのような勢力は小規模な船団を率いて管理局の次元航行艦に攻撃を加えることもあつたが、数で劣つていても魔法技術を運用している管理局は向かう所敵なしであつたのだ。

何度か負けを知れば慢心というものも消えるかもしれないが、これが長く続いているためにたちが悪かつた。そのためアデルたちは現在の時空管理局に根付く魔法優越主義と慢心をこれでもかというほどに証明していたと言えよう。

しかし、今回は相手が悪かつた。

「単刀直入に言いますとそちらの要求にこたえることは出来ません。」

サイモンはこれまた要求をにこやかに突っぱねた。だが、ハイワードも今回は早々簡単に引き下がるつもりは無かった。

『我々は、上からあなた方が拘束している犯罪者の身柄の確保を命じられています。もちろん“どの様な手を使ってでも”です。あなた方が此方の行動を妨害するのであれば、我々は武力に訴えることも出来るのですが?』

「おやおや、これは怖いな。一応我々は主権を持った独立国家の間なんだぞ?それは宣戦布告と捉えてよいのかな?」

『そういえば先程お話しさせてもらった男性もなにやら“ISAF”等と言っていましたね。勿論我々も戦争がしたくてこんな所にきたわけではありません。しかし、我々はあなた方の事をよく知りません。まずはあなた方の国家とやらについてご説明してもらってもいいですか?』

これを聞いたサイモンの副官は（これはまずい展開だ!）と思った。自分の上官が要らぬことペラペラと話してしまうかもしれないからだ。

「人のことが知りたければ先ず自分のからしゃべるものだろう？それとも君らの組織には礼儀というものが存在しないのかな？」

これは暗に“お前達に話すことなど一つも無い”という意思表示でもあったが、アデルはこの要求に応じた。

『これは失礼いたしました。我々時空管理局は数多ある次元世界の治安維持、災害救助、犯罪捜査などを行っている武装警察組織です。私に出来るのはこれくらいです。』

サイモンは目の前の優男が一番重要なことをいっていないことを知ってはいたが、顔には出さずに自分たちの事を“簡単に”説明し始めた。

「“私は”エイリス連合王国の軍人であります。先ほど私の部下であるハイワードが言ったISAFと言うものは“我々が所属している”軍事組織の名称であります。我々の任務は国境警備でありますゆえこの宙域を警備しているに過ぎません。」

「ところで、あなた方が停泊しているその宙域は我々の領域なのですが・・・撤退してはもらえませんか？」

『・・・・・・・・。』

アデルは目の前の人間の言葉が真実か否か図りかねていた。しかし、仮に彼らの言っていることが真実だとしたらまずいことになる。アデルたちは犯罪者の確保がしたいだけであって戦争をしに来たわけではないのだ。もちろん戦争状態になったとしても管理局がてこずることも無いとは思っていたが、次元世界の中心であるミッドチルダ出身のアデルは自分達の方が精神的にも先を行くという自負から平和的に事を済まそうと考えていたのだ。

悩んでいるアデルを見て副官が心配そうに声をかけた。

「大丈夫ですか？艦長。」

「ん？、ああ。問題ない。．．．しかし、どうしたものかね．．．」

「出すぎているかと思いますが一つよろしいでしょうか？」

「？．．．言ってみる。」

「現状で我々が犯人らの身柄を確保することは極めて困難であると判断いたします。従って、撤退を提案させていただきます。」

アデルは特に驚いた様子も無く続きを促した。

「クルーに前方のエネルギーシールドのエネルギー密度を予想してみてもらった所、あれは支局が緊急時に展開する障壁の数倍という超高密度で構成されています。仮にアルカンシエルを斉射したとしても破ることはおろか減衰させられるかどうかも未知数です。」

「・・・つまり、現状我々は犯人たちの下までたどり着くことも出来ないということか。」

「はい。それならば我々は、速やかに支局に帰還し今回の件の報告の後、まとまった部隊でもう一度彼らと交渉を試みるべきだと思います。」

アデルは少し悔しそうな顔をしたが、決心が付いたのか直ぐに行動を起こした。

「よし！ならば直ぐに帰還するとうかが。通信士！彼らのトップ・サイモン氏に“また後日、交渉に参ります”との旨を伝えておいてくれ。」

その数分後、第一ゲート周辺宙域に展開していた時空管理局部隊は撤退していった。

さて、通信士から報告を受けたサイモンはというと

「何だ、結局撃てなかったじゃないか．．．何のために私が重い腰を上げたと思っているんだ。」

「自己満足でしょう?。」

「．．．口が過ぎるぞ．．．まあいい、直ぐに本国に報告をしておいてくれ。私はこれから書類という人類永遠の敵と戦わなければいけないのだから。」

「了解いたしました。」

新たなる戦いの火蓋が切つて下ろされていた。

第十二話 『睨み合い』（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

ちなみに、次は国内の話を予定しています。（ますます原作キャラの登場が遅れてしまいますね・・・。）

そしていつかは日本の設定も書きたいと思っています。

国家設定 ～日本国編～（前書き）

ということ、テスト期間にも関わらず国家設定を投降させていた
だきました。

いつかはやろうと思っていた日本国編ですが、まさかこんなに早く
に書くことになるうとは思ってもいませんでした。

次回は、テストが終了した後、続きの話を進めていこうと思ってい
ます。

そして、PVが50000を、ユニークが10000を超えました。
皆様本当に有難う御座います。これからも執筆活動を続けてきたい
と思っておりますので、どうかよろしくお願いいたします。

国家設定 〈日本国編〉

『日本国』

首都：東京都

人口：11億2千万人

通貨：円

現内閣総理大臣：篠原政美

保有惑星数：70（共同保有を含む）

観測中・干渉中惑星数：12

公用語：日本語

政治：

日本国は憲法施行時から現在に至るまで民主主義体制を継続させている。内閣は国会の信任の元に内閣総理大臣を中心に組織され、国

家行政を担当する。長年の間、その必要性が疑問視されてきた参議院は解体され、代わりにコンピュータによって経歴や実績、能力などから議員を選出する国民審議院（ネット上での国会）が組織された。任期は3年。本人の希望と議員としての実績が認められれば再任もありうる。ちなみに初回の参加は義務とされる。

ネットでの投票も認められ、選挙への参加も国民の義務とされた。転移後に国会議員の条件なども変更され、両院議員の平均年齢が若返っているのが現状である。立法の最高機関は国会、司法の最高機関は最高裁判所である。

ISAFの中で唯一、先住民のいる有人惑星に直接干渉している日本国は、現地の無人島などに行政機関を置いて日本人で構成される小規模な町を作っている。そしてそこを拠点に惑星の観測や研究などを行っている。

経済：

日本国は資本主義経済を古くから続けている。多くの民間企業が存在しており、日本国が宇宙に進出してからは同盟国などに進出。高い技術力を活かした製品を輸出している。主な輸出品は自動車、船舶、航空機などの重工業製品から、先端素材や繊維素材などの軽工業品なども輸出している。

転移後の資源の発見、インフラの整備等によって生まれた未曾有の好景気は日本経済全体を回復、発展させた。その結果多くの新興企業などが成長し、現在では古くからの大企業と肩を並べるほどに成長した企業も存在する。

国民：

日本国の大多数は日本民族によって構成されるが、元を辿れば琉球民族やアイヌ民族と呼ばれる民族や、日本国が転移する時に新天地

を夢見た外国人も存在する。

転移前に問題視されていた少子化は、転移前当時の男女比が1：1・24と女性の方が若干上回っていたため一夫多妻制と社会保障の充実などで対応した。

医療：

医療技術の進歩によって人体の平均寿命が大幅に伸びている。現在の平均寿命は150歳。同じく技術の進歩によって人体の老化も大幅に抑えることが可能となっている。（結果、定年退職の規則も大幅に改められ、今でも企業の現場では100歳を超えた人間が貴重な労働力として存在している。）そして脳科学の進歩によって精神的にも若さも維持することが出来ている。産み分けなども可能になり、親の好みで子供の身体的特徴（髪の色、目の色、等．．．）までも操作できるようになってしまい一時期社会問題となったのだが現在では特に問題視されなくなった。（操作された側の子供が特に気にしなかったため。）

教育：

義務教育の期間などは特に変わりはないが、小学生から進級が能力制になっている。大学は“入りやすく出にくく”へとスタイルが変わった。全ての機関で睡眠学習などで直接脳に情報を“入れる”ようになったため記憶力の問題は解消され、現在では発想力や判断力などが重要視される傾向にある。同盟国に倣って飛び級制度も導入し、奨学金制度等も拡充され、義務教育期間中の教育費は全て国家が負担するようになっていく。

軍事：

日本国は統合幕僚部の下に陸海空宙からなる日本国防軍を保有している。ISAFではバレンタイン軍に次ぐ規模を有し、質を含めた総合戦力では他の同盟国を圧倒する。陸海空の国防軍は惑星防護を任務とし、宇宙空間での作戦行動は国防宇宙軍が担当している。惑星強襲任務では国防宇宙軍が国防陸上軍を輸送する形を取っている。現在は四個機動艦隊と八個警備艦隊からなる連合艦隊と、多数の警備部隊、哨戒部隊、そして多数の潜宙艦から構成される4個潜宙艦隊、大型の強襲揚陸艦で構成される輸送部隊、多数の補給艦から構成される補給部隊等が存在する。

・国防宇宙軍

日本国防軍中、最大の規模を誇りISAF中最強の軍隊である。艦体はステルス性を重視した形状であり、通信性能、策敵性能などが他国の艦と比べて秀でている。迷彩色は基本的に黒で統一されている。そしてISAFでは唯一、日本国防軍の艦艇には省コスト化作業の効率化の為にAIが搭載されている。さらに、日本国防宇宙軍の主力戦闘艦艇には浅異層次元潜行装置が搭載されており、潜宙艦には及ばないながらも長時間にわたって次元潜行状態で行動することが出来る。

・主力艦

『大和』級宇宙戦艦

全長

450m

主兵装

3連装大口径荷電粒子砲5基15門
連装中口径荷電粒子砲4基8門
各種ミサイル用VLS96セル
近接防御用小口径レーザー16基
量子魚雷発射管16門

艦載機

48式艦上多用途哨戒機「彗星」
6機

主機関

熱核融合炉4基

詳細

日本国防軍最新鋭の宇宙戦艦である。アクティブステルスに加え光学迷彩機能を有し、高いステルス性を誇る。主砲の荷電粒子砲は惑星攻撃にも使用できるほどに長射程、高威力である。哨戒機である彗星の運用能力に加え、高い指揮通信能力を武器に任務中は艦隊指揮艦として行動する。現在は4隻が就役しており国防宇宙軍にある4つの機動艦隊の旗艦を務めている。そして日本国防軍の主力艦艇の標準特殊装備として艦の運用をサポートするAIも搭載されている。

『伊吹』級宇宙戦艦

全長

420m

主兵装

3連装大口徑荷電粒子砲5基15門
連装中口径荷電粒子砲2基4門
各種ミサイル用VLS96セル
近接防御用小口径レーザー16基
量子魚雷発射管12門

艦載機

48式艦上多用途哨戒機「彗星」
3機

主機関

熱核融合炉4基

詳細

日本国防軍が保有する新鋭宇宙戦艦である。前述の『大和』級戦艦が艦隊の指揮中枢艦として行動するのに対して、この艦は機動艦隊の防空、警備艦隊での空母護衛などを主な任務としているため『大和』級宇宙戦艦から過剰な指揮通信能力を省いて、速力向上や策敵能力の向上が図られている。建造コストも抑えられているように設計されており現在多数が就役している。

『赤城』級宇宙航空母艦

全長

480m

主兵装

対空ミサイル用VLS32セル

近接防御用小口径レーザー16基

艦載機

60式艦上戦闘機「疾風」

48式艦上多用途哨戒機「彗星」

等100機

主機関

熱核融合炉4基

詳細

日本国防軍が保有する主力正規宇宙空母である。ステルス性が高い形状に加えアクティブステルスシステムを搭載することにより、完璧に近いステルス性を持つ。主に艦隊行動中は高い航空機運用能力を武器に艦隊防空と哨戒任務。平時の際には災害救助などにも利用される。武装は個艦防御用の物のみで作戦行動中は常に何らかの護衛を伴っている。

『霧島』級宇宙巡洋艦

全長

350m

主兵装

連装大口径荷電粒子砲5基10門

4連装小口径レーザーガン8基32門

各種ミサイル用VLS64セル

近接防御用小口径レーザー6基

量子魚雷発射管6門

艦載機

48式艦上多用途哨戒機「彗星」
2機

主機関

熱核融合炉3基

詳細

日本国防軍が保有する宇宙巡洋艦である。ステルス性を重視した設計をしており、艦隊行動中は艦隊防空や対戦任務などをこなす。日本国防軍艦艇らしく高度な電子戦能力、策敵能力、通信能力を誇る。警備部隊などでは旗艦として行動することも多い。

『秋月』級宇宙駆逐艦

全長

300m

主兵装

連装中口径荷電粒子砲4基8門
4連装小口径レーザーガン6基24門
各種ミサイル用VLS32セル
近接防御用小口径レーザー4基
量子魚雷発射管4門

艦載機

48式艦上多用途哨戒機「彗星」
2機

主機関

熱核融合炉2基

詳細

日本国防軍が保有する主力宇宙駆逐艦である。他の艦と同じくステルス性を重視した形状でありアクティブステルスシステムも搭載している。主任務は護衛任務や哨戒任務に災害救助と多岐にわたる。高性能に加え生産性も高く、旧式化した駆逐艦を速いペースで更新している。発展性も高く、武装の更新や電子装備の更新も楽になっている。

『黒潮』級潜宙艦

全長

140m

主兵装

量子魚雷発射管6門

各種ミサイル用VLS12セル

主機関

熱核融合炉2基

詳細

日本国が保有する宇宙空間での隠密行動や偵察行動に特化した特殊戦闘艦である。戦艦や空母に積まれている物よりも大型の浅異層次元潜行装置を搭載し、長期間の浅異層行動が行える。ステルス性も国防軍中最高で、滅多な事では発見されない。それに加え、バレン

タインの潜水艦には搭載されていない潜対空ミサイルも搭載し、非常時には対潜哨戒機にも対応することが出来るようになっていて、機動艦隊に随伴することもあり、その場合には艦隊の外縁に展開し艦隊の第一の盾として行動する。

『三浦』級強襲揚陸艦

全長

1700m

主兵装

対空ミサイル用VLS32セル

4連装小口径レーザガン22基88門

近接防衛用小口径レーザー12基

艦載機

53式多用途戦闘機「流星」

48式多用途哨戒機「彗星」

等40機

主機関

熱核融合炉8基

詳細

国防宇宙軍が保有する最大の艦艇である。惑星強襲用に国防陸上軍の大部隊を迅速に安全に地上に展開させる事を想定して設計された結果。護衛の艦隊が地上を掃討した後、陸上戦力を“基地ごと”降下させることによって地上部隊の作戦行動を円滑なものにするという大胆な発想の下、この艦は建造された。勿論、前述のような任

務も存在するが、惑星レベルでの大規模災害時には住民の輸送船として機能し、災害時の物資運搬船としても使われる。

国家設定（日本国編）（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

第十三話 『いつもの光景 大臣たちの憂鬱』 (前書き)

現在テスト期間です。

気分転換に投稿してみました。

後書きに少々、今後の予定のようなものを載せていただきました。

第十三話 『いつもの光景 大臣たちの憂鬱』

「バーバレンタイン領・惑星『ハンデスブルク』周辺宙域 - -

「ソナーに反応有り。数、8。大型艦1、小型艦7。輪形陣を構築して接近中。日本艦隊と思われませう。」

「分かりました。対艦戦闘用意。本戦隊は殿をつとめます。．．．他の戦隊は速やかに撤退行動を開始してください．．．．．気を付けて。」

「了解しました。」

暗い艦内で複数人が静かにコミュニケーションをとっていた。

彼らの目的は、“日本艦隊からの撤退”。

静かに静かに動き出した艦は後ろから追ってくる敵の進行を阻むようにをゆっくりと陣形を変えていて進んでいく。

そんな静寂を極めたような艦内で一人の人間が声をあげた。

「間もなく戦闘準備が整います。僚艦も同じく。」

その報告を受けた人間は、表情を変えることなく頷いた。

「分かりました。艦の戦闘準備が整っても命令あるまで撃たない様に、我々が戦闘を行うのは敵に気づかれたときです。．．．今日こそは何としても任務を達成しなければ。」

そんな指揮官が一人つぶやいた時だった。

「司令！！敵艦隊に動きが．．．これは．．．気付かれました！！急速に本艦へ向かっています。」

「まさか！？．．．こんなに早くに気付かれたというのですか！？」

司令はいつでも冷静であれとはいつの時代でも言われる事なのだが、理解し難い事態に混乱してしまうのは、人間らしいといえれば言えばそこまでなのだが、混乱したところで事態が好転する訳が無いのは明白である。

「敵艦が本戦隊に向け魚雷を発射！！数26、着弾まで30秒です。」

」

「回避を。」

半ば悲鳴にも似た命令であったが、命令を受けた側の人間の幾人かはその命令を遂行することなくソナー画面から姿を消した。

『潜宙艦「U-48」、「U-37」通信途絶、同「U-50」大破。』

『潜宙艦「U-43」中破、「U-35」小破しました。』

『艦内、第三区画に亀裂を確認。修復作業に入ります。』

大破と撃沈はほぼ同意、実質この潜宙艦戦隊は、その戦力の過半をたった一回の攻撃によって削られてしまったという事を意味していた。そのような事実を突きつけられてもなお潜宙艦乗りとして当然の決まりである“報告は静かに正確に”を守り通す所は彼らが歴戦の猛者である事を示していた。

「そんな・・・。」

それは室内に居る全ての人間の思うところではあったが、新たな報告によって彼らは現実というものが如何に非常であるかを再確認させられることとなった。

「司令、敵艦隊から本戦隊に向け魚雷攻撃の第二波が接近中です。
．．ご命令を。」

「全艦退避行動をとってください。．．ところで撤退状況は？」

「現在の作戦進捗率は、68%です。」

「．．分かりました。．．本戦隊の残存艦は引き続き戦闘行動
を続けます。最優先事項は友軍の撤退支援。これだけは何としても
成功させるのです。」

「了解。」

この後、この潜水艦部隊は友軍の8割強を安全圏まで撤退させるこ
とに成功。その代償は殿部隊の全滅、指揮官の戦死という悲惨な幕
引きであった。

「任務は達成することが出来ましたか．．．良かった。」

「ええ、これもデーニッツ提督のおかげです。本当に素晴らしい！、あなたこそバルンティン軍人の鑑です！！」

『一生ついていきます！！』

先程とは打って変わって賑やかになった艦内には、初の任務達成に沸くバルンティン軍人たちの姿があった。

「しかし、6度目にして初めて任務達成ですか．．．やはり日本国防軍は強いですね。」

『いやはや、私としましても貴女の指揮能力の向上には驚かされたばかりですよ。うちの若い者にも発破をかけませんとな！はっはっはっはっは！！』

そういう彼は日本国防宇宙軍第23護衛隊の司令官。

そうこれは、

『偵察任務中に有力な敵性艦隊と接触してしまった場合の迅速な撤退行動の実現』ということで、今回6度目が実施された“日葉共同軍事演習”であったのだ。

画面の向こうの日本人は先程の可愛い教え子を見るような目をそのままに、バレンタイン宇宙軍第一潜宙艦隊の司令、エルネスティ・ネ・デーニッツを激励した。

『今度の外宇宙探査の派遣、大変そうだな。私は君ならどんな事態にも対処できると思っている。まあ、まずくなったら逃げればいいんだ。若い命を無駄に散らすんじゃないぞ？』

「はい。ありがとうございます。言われなくともレーティア様から預けられたこの職責と新鋭艦、無駄にするつもりは毛頭御座いません。」

ゲーニッツが乗艦している艦はバレンタイン軍最新鋭の潜宙艦、『ファルケナーゼ』。戦艦かと思間違えるほどの大型艦であり、その大型の艦体ゆえの高い防御力、大火力、指揮通信能力、そして日本の潜宙艦を大きく凌駕する潜航時間を有している。

『いい心意気だ。死ぬんじゃないぞ、私は君のことが気に入っているんだから。』

「ありがとうございます。任務が終わり次第、また会える事を期待しております。」

『ああ。．．．では私はこのへんで失礼させてもらつよ。では!』

そう力強く言うと、男は通信を切った。それと同時に目の前に広がっていた3次元スクリーンも消えていく。

「さて、私も私の仕事をこなしましょう。」

その独り言は誰にも聞かれること無くにぎやかな艦内に消えていった。

日本国・防衛省・大臣執務室

「そろそろ、向こうも終わった頃でしょうか？」

回廊の防衛において重要な役割を持つ第一ゲート周辺宙域で発生した領海侵犯事件。それに時空管理局が関与している事が発覚して各国の首脳の頭痛の種が増えてから早一週間。

広々とした執務室を独り占めしているのは日本国の防衛を担う日本国防軍を管理する防衛省の長、園宮奏であった。

彼は、肩まで伸びた銀髪をクルクルと弄りながら部下から渡された大量の報告書、上申書に目を通していく。

「人事異動、惑星調査中の被害報告、装備品の不具合、職場環境の改善、．．．入隊支援ポスター案、イベントの参加要請、セクハラ、e t c。今日も仕事がなかなか終わりそうにありませんね。」

奏は小さくため息を洩らすと窓の外を見やった。

「今日は帰れるかと思ったのですが．．．また皆に謝らなければいけませんか。」

自らの家族たる人達の事を頭に思い浮かべると彼は、直ぐに目の前に広がる仕事の処理を始めた。

しばらくして彼は一つの書類に目を留めた。そして自室の天井を見つめながら、自国の将来への不安を一人呟いた。

「『第一次元世界ミッドチルダ、及び時空管理局本局の情報収集任務計画』ですか．．．レーティアさん。先日に関わつて衝突しかけたのですから、くれぐれも関係をこじらせる様な失敗はしないで欲しいものです。」

それは自国の将来を憂いたのか自分への負担を憂いたのかは彼にしかわからないのであろう。

「さて、30分後の会議までに仕事を片付けましょう。」

考えても仕方が無いことは後回しにする。まずは目の前の仕事を片付け、次の仕事に備えること。

椅子に座っているだけで日本国の防衛大臣は務まりはしないのだから。

「この報告書が真実だとするんだったら、今の小学生の子達って私の時代より全然学力が高いわけだよな？ずるい〜ずるい〜！」

「大臣、静かにしてください。私の仕事の邪魔になっています。」

「え！？慰めてくれるのを期待してたのに！ひどいよ〜（泣）。」

「……………」

「スルー！？」

「どうぞ、次の報告書です。」

「仕事増えた！？」

「何をおっしゃる、もともと貴女の仕事ですよ？大臣。」

賑やかな大臣室をつくるのは、日本国文部科学大臣である一条次葉

(18、女)と、同副大臣を務める九条二葉(24、男)の二人。

国際連合加盟国の中でも科学技術において数多くの分野で他の同盟国を圧倒している日本の教育と技術開発などを預かるこの二人は普段どおりに仕事をこなしていた。

「しかし、この予算概算要求はまた三國さんから何か言われそうですね．．．。」

二葉は何時もこの科学至上主義の上司に頭を悩ませられている不幸な財務大臣の顔を頭に思い浮かべた。そして考える、この上司に自重と言っ言葉を教えなかった自分もある意味共犯者なのかもしれない．．．と。

「基礎研究はお金がかかるものだけでも、『未来への投資だ』とか何とか言えば分かってくれるんじゃない？」

三國さん乙、と二葉は深く思った。

「しかし『超光速恒星間宇宙機』、『次世代型電気炉』、『相転移機関』の三つを同時に研究している現状には無理がありませんか？ただでさえ前年度に研究が完了した『異層次元世界間通信システム』や『次世代型宇宙機用機体素材』やらの開発経費が馬鹿高いと文句を言われているんですからね。」

「これでも自重してるんだけどな。」

この言葉を聞いた二葉は何故か不思議そうな顔をして自身の上司を励ました。

「自嘲ですか？何をおっしゃっているのやら。貴女は篠原総理からその優秀さと教育や技術開発にかける情熱を買われて大臣という重要な職務に当たっているのです。何を自嘲するというのが。」

二葉の言葉が自身の放った言葉と噛み合っていないような感覚をもった次葉は一応確認の為に自身の右腕たる二葉に先程の発言の真意を聞こうとしたのだが……。

「九条さ〜ん。何か勘違いをしてないかな？」

「さあ、仕事を続けましょう。我々にはなすべき仕事はまだ山のように残っているのですから。貴女は十分に優秀です。」

「やっぱり何か誤解してるよ〜!？」

部下の天然なのか演技なのかわからない発言と、仕事という現実と

再び直面することとなった次葉は若干涙目になりながらも渋々仕事を再開することとなったのである。

国際連合加盟国の中でも最先端科学技術を誇ることでも知られる日本国。

その国の技術開発を任せられている大臣の仕事はこの後、夜を徹して行われた。

日本国・外務省・東口玄関前

夜も遅く、世界が闇に支配された時刻。

人も少ないこの場所に一人の男が立っていた。

黒い高級そうなスーツで身を固め、その掛けている眼鏡（伊達眼鏡）や雰囲気もあいまってその男がかもし出す落ち着きや優しさ、そして何より優秀さのようなものを感じることが出来る。

彼の名前は星野遙。

日本国の外務大臣である。

そんな彼が今、何を目的に深夜の外務省東口玄関前なんか立っているのかというと。

「……………迎え、遅いですねえ。」

と、このように迎えの車を待っているのだった。普段ならば外に出れば目の前に停まっていたのだが、今日は時間がかなり遅くなったことや、遙が運転手に連絡をし忘れていたこともあって、未だに待ちぼうけをくらっていたのだった。

することも無いので遙は一人、自国の現状について考える。

先ず第一に日本国は此処数年の間、久方ぶりの安定期に入っているという事である。それまではガイアの件などがあり、事情が事情だったため一時期国内でも緊張が高まった程だったのだ。

もちろん安定期に入ったと言っても問題が全く無いかと問われれば答えは否である。

同盟各国との関係は良好なものであることに疑いは無いが、惑星の管理や資源などで揉める事もあるし、特に日本国はその保有する技術情報の開示を同盟国から求められている。それもそのはず現在市場に出回っているものの中で最先端技術を謳っている製品の大半は“日本製”なのだから。言ってみれば最先端技術の独占状態だ。他国から不満が出ないはずが無い。結果として我が国は数年前から同盟国に対して一部技術の提供、共同開発等を行うようになった。

しかし、それらの技術は他国から見れば最先端なものには違いないだろうが、それは“日本”では最先端ではない。なぜなら我が国には外国人はおるか一般の国民でさえも普段は入ることの許されない技術開発の桃源郷のような場所が存在するためだ。

惑星『コクーン』。

日本の技術開発の中心にして先駆者、我が国の最先端科学技術の源泉である惑星だ。元々第一次移民計画の一環として研究基地が築かれたことから始まり、今では多くの政府研究機関、大学などの教育機関で構成されている。

政府直轄領でありその行政権は内閣総理大臣とし、その下に『コクーン』内の有識者で構成される統括理事会が存在する。

その内部は一年に数回の一斉学園祭の時にだけ公開され、普段は国防軍で使用されているような最新の警戒システムと迎撃システムで

侵入を阻止している。

そのせいもあって『コクーン』は現在では日本国の一部でありながら一つのコミュニティとして形成されている。

今どれ程の技術レベルかは知らないが、確か5年前の時点で同盟国と比べて30年以上の開きがあったはずだ。現在どれだけになっているのかはわからない。

篠原総理は『コクーン』の保有する技術情報を開示すると命じ、同盟各国は『コクーン』の保有する技術情報も含めて開示するように求めてきている。現在『コクーン』発の最先端技術を日本国内だけで独占している状況なのだ。他国が羨むはずだ。

日本が外国と付き合っていくために重要な地位を占める最先端技術が、皮肉なことに同盟国との歪を生じさせている。

私は経済は専門外だが、少しぐらい妥協して情報を開示してくれれば同盟国との関係をより強固なものにすることが出来るというのは安直だろうか？

そこまで考えていた時に漸く目的の迎えが到着した。

運転手は到着しだい車を降り、遙に頭をペコペコと下げながら扉を開けた。遙は「別にかまいませんよ。」と言いながら後部座席に腰を下ろす。遙が座つたのを確認した運転手は直ぐに運転席に戻り二人を乗せた車を起動させる。

“ピッ”という音と共に車の駆動部に電気が送られ小さな振動も無く加速して、深夜にもかかわらず高層ビルから漏れる光やライトに照らされた道路へと入っていった。

（ああ、時空管理局って言う心配事もあったのでしたね。）

遙は窓の外に広がる大都市を眺めながら先程の考え事も忘れて新たな悩みの種を思い出したのだが、しばらくすると今日の疲れを癒すために眠りについていた。

日本国・首相官邸・内閣総理大臣執務室

三権分立

そのうちの一角、行政権のトップである内閣総理大臣篠原政美。

彼女は現在、深夜の執務室にて防衛大臣園宮奏、国家諜報局局長であるイリーナ・明石・ラピナ（21、女）に指示して作成させた計画書の最終案を眺めていた。

その名を『防衛戦略計画番号SS・00・F計画』

対時空管理局の全面戦争に備えるために作成される国家防衛戦略計画である。

それを確認し終わると政美は深いため息をつく。天井を見つめると、ぼやきながらも明日に待つ試練に備えることにした。

「陛下へのご報告。宮内庁長官に頼めないかな。．．．ま、無理だよな。」

それはもう夜が明ける頃の話であった。

第十三話 『いつもの光景 大臣たちの憂鬱』（後書き）

作中では陛下ということになっていますが、実際は大帝国の帝様で御座います。

と言う訳で、当初は日本国も100%オリジナルにするつもりだったのですが、やはり日本勢も出したいと言う事で予定を変更させていただきました。

なまけもの様を始めとして感想に対する私の返信に振り回されてしまった方々にはこの場を借りて謝罪させていただきます。本当に申し訳ありませんでした。

次回の更新はテストが終了してからしばらくした頃と考えておりますゆえ、可也後になるかと思えます。本作品を楽しみにしております方には申し訳ない気持ちでいっぱい御座いますがご了承ください。

最後となりましたが、ご意見ご感想お待ちしております。

第十四話 『事情聴取と情報収集』（前書き）

というわけで、予定よりも早くに投稿させていただきました。（テキストは終わっておりません・・・台風のおかげで。）

今回は前話の続きではなく、第一ゲートでの事件の後日談みたいなものです。

ちなみにその結果、文字数も前話と比較してもかなり少なくなっているのをご了承ください。

第十四話 『事情聴取と情報収集』

前話より少しさかのぼって・時空管理局・第11支局・基地指令室

「この無能どもが！！最新鋭のXV級を預かりながら犯罪者の一人も確保できんのか！！」

先日、第一ゲート周辺宙域まで犯罪者を追っていたが、エイリスの艦隊に追い返されてしまったアデルは最寄の時空管理局支局まで3日かけて帰還し、副官と共に上司への報告に来ていた。

その結果、無能なくせに上昇志向だけはやけに強い上司からの叱責を受けることとなってしまったのだ。

アデルの隣にいる副官は悔しさを押し隠し、無表情を維持しながら目の前の上司に頭を下げ続けていた。いくら弁明しようとも聞く耳を持たない上司の話など適当に受け流しておけばいいのだから。

しかし、アデルはそうはいかなかったようでも必死に上司にISAFとの再交渉の為に自分たちの派遣を許可してくれるよう求めていた。

「しかし提督、いずれにしろ彼らとの再交渉は進めるべきです。私には今回の件を失敗させてしまった責任が御座います。もう一度チ

ヤンスをいただけないでしょうか。提督としても、このまま担当が本局に奪われるのも癪でしょう?」

「だからもう一度機会をくれてやれと?」

「お願いいたします。」

「わ、私からもお願いします。」

提督は少し悔しそうな顔をつくるとアデル達に言った。

「まだお前達には言っていないがな．．．既に本局の方からXV級を中心とした航行部隊が派遣されている。恐らく5日後あたりに到着するだろう。」

これを聞いた副官は、そのような重要な事を伝えなかった上司に憤慨しながらも、本局の部隊が派遣される時に生じる可能性について考えた。それは“自分たちの派遣のチャンスを完全に奪われてしまうのでは?”という不安であった。

しかし、それは杞憂に終わる。

「その派遣されてくる本局の部隊に補助戦力として我々の一部を参加させることになっている。．．．貴様らが行っても盾程度の働きしか期待できんが．．．。」

「参加させてください!!」

二人は間髪居れずにそう叫んだ。彼らとしては上司が自分達を盾としての使い道しか考えていなかったとしても、まだ自分達が彼らと再び合間見えることが出来る可能性を神が残してくれたことに感謝した。

本局の部隊が指揮を執るとはいえ自分達にはこの事案を失敗させてしまった責任が残っていると二人は思っていたのだった。

この二人の反応に少し驚きながらも納得すると提督は、自身の副官にデータの変更を頼んでからアデル達の目の前から立ち去っていった。

「さて、艦長。我々も準備を始めましょう。」

「ああ!」

そうアデルが力強く返すと二人は自分たちの艦へと戻っていった。

回廊・宇宙基地『ルナ』・第一収容所

「つまり、君達は意図的に我々の領域に侵入する気は無かったということだね？」

「そう何度も言ってるだろうが……。」

暗い聴取室の中には数人の男子がいて、一方は無表情に、もう一方は「またか……」とでも言いたげな顔で向かい合っていた。

「君達を追っていたのは時空管理局と呼ばれる組織、で間違いは無いですね？」

神妙な面持ちで確認を取るのはバレンタイン人の捜査官。

「だから、何度同じこと言わせんだよ！」

不機嫌そうに返事をし、机に八つ当たりをしているのは先日、エイ

リスを中心としたISAFに身柄を拘束された海賊グループのリーダーであった。彼らは今、拘束されてから3度目の事情聴取を受けていたのであった。

ISAFもさつさと本国の方に送りたかったのだが、一つだけ問題があったのだ。

エイリスに送るのでいいのか？ということである。

時空管理局との接触時には「本国に送る」などと基地司令のサイモンが口走ったが、冷静になって考えてみるとサイモンは現在、エイリスの軍人ではなくISAFの軍人なのであるから最終決定権は国際連合本部にある。

その結果、拘束された海賊グループの面々はただすることも無く『ルナ』の捜査官から管理世界や次元世界に関する情報を提供する日々を過ごしていた。

先の会話はいつもの事で、聴取の最初に一応の確認を取っているのである。

そして、今日も事情聴取（と言う名の情報収集）が終わり、担当捜査官が書類をまとめて部屋を出ようとすると今まで不機嫌そうだった海賊のリーダーが捜査官に声をかけた。

「おい、待てよ。」

「……………なんだ？」

捜査官は不思議そうにリーダーを見た。今までは聴取が終わっても特に何も声をかけられることも無く部屋から出て行けたからだ。というか事情聴取が終わって聴取対象が捜査官に声をかけてくることの方が少ないのでは？などと思いつつも捜査官は席へと戻った。

「それで？何の用なんだ？まあ、時間はあるから付き合っただけでやるが……………」

「さんざん喋ったんだ。そろそろあなた達の事も教えてもらいたいもんだね。」

そう言われた捜査官は何かを思い出したように書類を取り出してきた。その内容は国際連合加盟国の大まかな紹介であった。捜査官はそれを目の前のリーダーに渡すと、すまなそうな顔をして謝罪した。

「いやはや、すまんな。君から言われる前に思い出せばよかったんだが。今回は事情聴取の後に我々の国家について大雑把に教えておく事を頼まれていたんだ。大まかな事は君に今渡した書類に書いて

である。後で皆で見るといい。後、今のうちに質問しておきたいことなどはあるか？」

「・・・そうだな。」

リーダーは少し考えると大切な事を思い出したようで、真面目な顔で捜査官に質問をした。

「あんだ達は、時空管理局とどういう関係を作っていくつもりなんだ？」

捜査官は少し言葉の意味を考えたが確認の為に一度質問した。

「・・・言っている意味が少しわからないな。」

「・・・あんだ達は俺達を拘束している。局の奴らが追っていた俺達を、だ。確実にあいつらはもう一度此処に来るぞ。それにさっき言った通り奴等には広域殲滅魔法や次元航行システム搭載艦が配備されている。・・・強大な戦力だぞ？」

さて、どう答えたものかと捜査官は思った。彼は事情聴取が始まる前に上司から自国の説明をする際に軍事力に関していらん事は言うなど釘を刺されていたからだ。目の前の男はもう少し立てば『ルナ』

から上が決めた星域の収容所に送られるだろうが、万一のこともあるため下手に教えるわけには行かない。

そこで彼は目の前のリーダーの質問は軽く誤魔化す事にした。

「無干渉を貫けるのならばこのままいくと思うよ?」

「もし、相手から接触してきたら?」

「それは上の判断にもよるが．．．私の意見を述べさせてもらうとすれば、別に我々と彼らが敵対関係になったと決まったわけじゃない。仲良くできるのであれば仲良くしたいものだね。」

「甘ちゃんだな。魔法を舐めてやがる。」

「魔法か．．．子供のころに見たアニメの世界だな。実際に目にしてみたいものだ．．．と言うか、その魔力適性というやつはどうやって判るんだい?もしかして私にも魔力はあるのかな?」

「さあな．．．って!俺の質問に答えろ!!」

ここで男は自分の質問が何時の間にかやらはぐらかされていた事に気

づいた。そのため強引に話を元に戻そうとした。

「．．．？、だから仲良くできるのであれば仲良くしたいって言ったじゃないか。」

何度言っても無駄だと言う事を察したのか男は、質問を変えた。

「．．．．．じゃあ、友好関係が築けなかったら？」

「それこそ上が判断することだ．．．私には分からない．．．だが。」

「．．．．．だが？」

「．．．．．いや、何でもない。」

国連加盟国の首脳たちの性格等を思い浮かべた捜査官は自分の言葉を途中で終わらせ、リーダーを一瞥すると筆記官に軽く挨拶して部屋から出て行ってしまった。

結局今日の彼の収穫は担当捜査官に自国の説明をする事を思い出させ、各国政府が発行している観光用パンフレット等を数枚入手した

ことだけだった。

しかし、この入手した情報によって彼らは自分達が侵入した領域を支配する勢力が想像していたものよりもずっと強大であった事を知ることになる。

第十四話 『事情聴取と情報収集』（後書き）

次はまたまた国内編、に加えて管理局の本局からの派遣部隊について触れたいと思っております。

余談では在りますが、私は日本国内の話を書いている時が一番作業がはかどります。やはり日本人だからかもしれませんね。なので国内編の次話は文字数が多くなっているかもしれませんが。（根拠は特に御座いません。）

後、事情聴取の担当ってどのような役職の方が務めるのか分からなかったので暫定的に捜査官としました。ご指摘があれば修正するかもしれません。

それではお読みいただいた方に感謝の意を表すると共に、これからもよろしく願っています。

そして、ご意見ご感想お待ちしております。

第十五話 『動き出す世界』（前書き）

夏休みですよ。夏休み。

何をしようか何も決めてはいませんが、今は小説を安定して投稿できればいいなと考えております。

作中、この作品始まって以来のご都合主義が入っております。

第十五話 『動き出す世界』

回廊・宇宙基地『ルナ』・第4バース

多くの人たちに見送られ、港を離れていく船団があった。

「第一次時空管理局調査船団」

バレンタイン政府の指令で潜水艦のみで構成された調査船団である。

「はい。了解しました。それでは第一ゲートを通過する前に念のため潜行状態に入ります。．．．はい。次元転移は所定の宙域で。」

その船団の旗艦を務める艦、潜水艦『ファルケナーゼ』の艦長席に座り目の前のディスプレイを見つめながら宇宙基地『ルナ』司令のサイモンと通信をしている少女、エルネスティーネ・デーニッツはこれからの任務に緊張しながらも元々技術畑の人間だったこともあって新鋭艦の航海に対する期待が勝っていた。

『と、こちらから言つとくことはこれぐらいだな．．．じゃあそろそろ時間だし通信も切らせてもらおうとするかね。．．．達者でなデーニッツ嬢。』

「はい。ありがとうございます。．．．お互いに何事も起きない事を願います。」

『そつちがどうなるかは分からんが、こつちは確実に一波乱あるだろうな。再交渉に来るといった以上、こない理由が見当たらん。．．．じゃあ、切るぞ。』

そう言うとデーニッツの目の前に広がっていたディスプレイは消え、無機質な室内が見渡せるようになった。デーニッツはデスクに置いてあったコーヒートを少し口に含むと席を立ち暗黒の宇宙の海へと目を移した。

愛しの『ファルケナーゼ』の周りには護衛として随伴するバレンタイン宇宙軍所属の潜宙艦が多数、航行していた。それを眺めながらデーニッツは敬愛する総統の姿を思い浮かべながら一人呟いた。

「みていてください閣下。あなたのデーニッツは．．．必ずや任務を成功させて見せます。」

第一次時空管理局調査船団は暗い宇宙の海を進んでいく。

目指すは法の番人の住まう世界。

日本には古来より天皇家とよばれる家系が存続している。

時には国家の指導者として、そして今では国家の象徴として、現人神、人間とその存在自体も変化しながら初代の神武天皇から2800年もの長きにわたってその歴史と伝統を守ってきた。

しかし、転移前から悩まされていることが一つだけあった。

皇位継承者の問題である。

代々天皇は皇太子である男児が即位させることが多かったのだが（女性天皇の即位も例がある）転移前より中々、男児に恵まれなかったのである。長らく男系を継承してきた天皇家はこの問題に対して苦渋の決断をすることになった。

女性天皇の即位である。

幸い、子供に恵まれなかったわけではなかった。後は決断するかどうかといったところだったのだが、もちろん女兒を即位させることに各方面から賛同の声や反対の声（どちらかというと此方の方が多い）が多く寄せられた。しかし、歴史と伝統の存続と言う問題に対して頑なな対応をとって取り返しが付かなくなるより柔軟に対応していく方針に決定したのだ。それに加え社会的に女性の方が男性よりも地位が上昇していたこともこの決定の原因と言われている。

その結果、従来の皇室典範は改訂され日本国の天皇家は男児に恵まれなかった時にのみ女性天皇の即位を認めることが明記された。要するに男児に恵まれた時までのピンチヒッターと言うわけである。そのため日本国は皇室典範が改訂された2080年より女性天皇
男性天皇 女性天皇（現在）という変遷を経ている。

しかし、女性天皇は即位から崩御まで結婚を許されていなかったりとまだ指摘される部分も多い。

だが国民の大半からは現在の天皇家は好意と尊敬の眼差しで見られていることを考えれば21世紀後半に下した苦渋の決断は失うものはあれども結果的に良い方向に進んだと言える。現在の歴史家たちは結論した。

説明が長くなつてしまつたが、視点を現日本国内閣総理大臣である篠原政美に変えよう。

同所

「政美．．．これは彼らとの交渉が決裂してなおかつ彼らが武力行使を行うと布告した場合の最終手段という判断でいいですか？」

目の前の少女は悲しそうな顔を見ると手にしていた作戦案の書類を閉じた。

「はい。現在、星野外相を含め関係各所が各国と接触し彼らとの交渉の席を設ける準備や、最悪の場合を想定して宇宙基地『ルナ』に駐留している艦隊の強化が進んでいます。進捗は7割と言つた所です。」

現在、総理大臣として天皇陛下（自称：帝）に現在の各国の状況と時空管理局への対応を報告しに来ている篠原は目の前に座っている現天皇陛下の御姿を拝見しながら大変無礼であるが軽く嫉妬していた。

(私だつて後4〜5年若ければ帝と張り合える・・・はず。)

などと嫉妬しながらも現実に直面してしまい若干凹んだ篠原だったが目の前の少女が心配そうに声をかけてきたので正気に戻った。

「しかし交渉が決裂した時の防衛戦略とはいえ、仮にも専守防衛という事を基本的な柱としてたてている我が国にとっては些か矛盾点が多いように見受けられるのですが？」

「確かにわが国は旧日本国憲法施行以来、防衛の基本的な姿勢として専守防衛を貫いてきました。しかし話が通用しない相手が武力を行使してくるのであれば我々は自らの生命や財産を守るために最大限の努力を払わねばなりません。そのためには理想を捨てることなど大きな問題ではありません。」

「それはもつともです。しかし、目先のことだけにとらわれて大局を見誤ることの無いように・・・それだけはお願ひできますか？」

「御意。」

帝はそう聞くと今までの天皇の目から少女のそれに変わり、篠原に

近況などを聞いた。

「そういえば政美ちゃん。」

「はい？何でしょうか。」

「本堂さんとは上手くいつてるんですか？」

「なっ！！」

篠原は顔を真っ赤にして焦った。まさか帝にばれているとは思っても見なかった。篠原は確かに副総理の本堂に恋愛感情を抱いてはいるがまだ誰にも知られていないと“自分では”思っていたのだった。だから今まで園宮防衛相が「本堂さんともいちゃついでください」と言っていたのも自分達が幼馴染だと言うことからくる冗談だと思っていたのだった。

まさか、どこから？等と篠原の頭の中で様々な疑念が渦巻いている中、その疑問を帝は盛大にカミングアウトすることで解決した。

「この前、凜ちゃんと話したときに話してくれたんだけど。」

帝は事のいきさつを話し始めた。

〔数週間前・御所内〕

この時、国家公安委員長の銭形凧（27、女）は御所の警備などの打ち合わせに来ていたのだが、打ち合わせも終わり国家公安委員会が設置されている中央合同庁舎2号館に帰ろうとするときに公務の間の時間を使って一人さびしく娯楽スペースのゲームの筐体で遊んでいた帝に見つかってしまい、帝の暇をつぶす相手をさせられることになってしまったのだった。

「いや、凧ちゃんが居てくれて助かったよ。退屈死しそうだったんです。」

「あえて何も言わないでおきましょう。それにしても陛下「み・か・ど、です。」失礼いたしました帝様。して、私に何か御用がおりますでしょうか？」

帝が自分の事を帝と呼ぶようになったのは実は銭形が原因であった。帝が天皇として本来の名前で呼ばれていた時、「何かもつといい名前に生まれたかったな。」と呟いて、公務以外で名乗る名前を考

えていたのだった。そんな中、皇宮警察の長官と共に御所を訪れた銭形が幾つか案を出した中で一番お気に入りだったのが“帝”であったのだ。発案者本人は必死に前言撤回しようとしたのだが、結果として公務の時以外は身近な人間に自分の事を帝と呼ばせるように暗黙の了解が出来てしまったのだ。

話を戻そう。

なにはともあれ帝は“良くぞ聞いてくれました！”とでも言わんばかりに胸を張ると、銭形にその理由を説明した。帝曰く、公務が一段落ついて時間が空いたので息抜きがてら御所内に設けられた娯楽スペースを散策していたのだと言う。しかし、多数のゲームの筐体があるとはいえ一人で遊ぶことになんのだのしみがあるのか。そんな事を思いながら一人さびしくゲームをしていた時に来てくれた救世主、それが！凜ちゃんだったんだよ！と熱弁を振るっていた帝は此処で落ち着きを取り戻した。

「あ！・・・ご、御免なさい。」

我に返った帝は先ほどまでの醜態を恥らいながら小動物のように小さくなって銭形に謝罪すると、すぐに元気を取り戻した。

「そ、それでね凜ちゃん・・・時間があるんだったら・・・その。」

銭形は帝が何を言おうとしているのか察したので、双方のためにも先に自分から答えることにした。

「帝、私も時間は空いている身で御座います故、御遊戯の時間を一緒にさせていただけるのであればこれ以上のことはありません。私であれば喜んで・・・。」

「本当ですか！？わーいやったあ！じゃあじゃあまずあれからやりましょうー！！」

その後二人の時間は帝の公務が再開されるまで続いたのであった。

〈現在・御所〉

「とういうわけで二人でゲームで対戦したり、プリクラをとってみたいしてたんです。フフツツ、たのしかったな。」

「帝様？」

帝は友人である篠原の声が若干ではあるが低くなっていることに気

づいていない。それに加え室内の温度が心なしか低くなっている」とにも・・・。

「はい？何でしょう。」

何かに気づく様子も無く帝は何時もどおりのにこやかな笑顔で返答する。

「私の話は何処に消えたのですか？」

「……………」

「……………」

「……………あ。」

帝は数十秒考えて漸く自らの話がいつの間にか脱線していたことに気づいた。そしてそれに慌てて説明しようとした矢先に、

「天皇陛下!!」

邪魔は入るものなのである。

「うげっ。」

「何ですか今の声は!? 天皇陛下にあるまじきお言葉です! 次の公務も控えているのですからお急ぎください。」

そういつて嵐のごとく登場したのは帝に使える女官たちの長、女官長のハルである。彼女達は日ごろから帝の世話や警護、公務の管理などを最も近くで行う者達なのである。

帝に必要な要件を怒涛の勢いで伝えると篠原の方に礼儀正しく向き直り、これまた礼儀正しく篠原に帰宅を勧めた。

「そういうわけでありますから、篠原総理？陛下はこの後も公務が立て込んでいます故、今日の所はお帰りいただけますでしょうか。」

「え！？・・・そ、そのまだお話されていないのですが・・・。」

しかし、そんな篠原の願いもむなしく帝は女官長に連行されてしまった。

ひとり部屋に残された篠原は帰り支度を済ませながら銭形をどのようにして　　しようかを考えていた。

惑星『アルカディア』、4カ国共同管理が行われ数多くの国際機関が置かれている惑星である。その中でも一際目を引く建造物、各国の社会化の教科書にもその写真が貼られている『国際連合本部ビル』、ここでは日本国が主導で作成した対時空管理局戦争における防衛戦略について各国の外務担当大臣、防衛担当大臣らの戦略会議が行われていた。

「いずれにしる第一ゲートを第一防衛ラインに設定するのは戦力の問題上、不可能と言わざるを得ないと我々は考えます。」

「しかし、ISAFの存在目的は国際連合勢力下の領域の防衛であって侵略ではないと思うのですか？」

今白熱している議論は、今回の防衛戦略の策定に向けて日本が提案した『F計画』に盛り込まれていた宣戦布告と同時に第一ゲートに近い時空管理局の管理世界を攻撃、制圧、要塞化してISAFによる国際連合の防衛ラインを築くと言うことが侵略にあたるかどうかと言う話である。

「防衛上、外交が破綻し戦争状態に突入することが明白になった場合に敵勢力の重要拠点を早期に叩いておくことは重要な防衛行動です。あなたがたは『ルナ』を．．．いや、アルファ回廊をみすみす敵に明け渡すおつもりなのですか？」

「そんなことは言っていないし思ってもいない。ただ努力が足りていないのではないかと言っているだけだ。現状の戦力で奴らを追い返すことは出来ないのか？」

「狭い回廊内では行動が制限されてしまいますし、ゲートの外に出てゲートを防衛するように布陣したとしても結局の所敵に包囲されていることになってしまいます。たしかに、ゲートをあえて通らせず『ルナ』のもとまで誘い込めば『ルナ』の主砲で敵艦隊を一撃で葬り去ることも可能ですが。．．．もし失敗してしまった場合、我々は彼らの好きなタイミングで領域を侵されることになってしまうのですよ。」

会議室内の空気が段々と自分達に不利になっていくのに従い重くなつていくように感じたガイア社会主義共和国の外務大臣は、反論することが出来なくなつてしまったため観念したのかとうとう賛成に回つた。

「．．．．．分かつた。この案を我が国は認めることにする。」

「いいのですか？」

「カテーリン大統領からは私に全てを一任すると言われているしな。．．．もしもの時はあの人も責任は取るといつていたことだし。」

まあ、そんなことになったら私が全てを被るがな。」

彼らガイアが反対を表明していたのは、まだ国内の改革が完全ではないことに加え、国家主席のオリガ・カテーリン大統領が軍事に出来る限り予算を取りたくなかったからだった。

なにはともあれ全ての国が賛成を表明したため今回の議長国を務めるエイリス連合王国の担当者が最終確認を取る。

「分かりました。日本国、バレンタイン第三帝國、ガイア社会主義共和国、そして我が国、エイリス連合王国の賛成により本件における防衛戦略は日本国が提出した『F計画』で満場一致の決定となります。よろしいですか？」

「かまいません。」

「・・・うむ。」

「有難う御座います。」

「・・・分かりました、今の確認を持って正式に防衛戦略の決定とさせていただきます。皆様、長い時間お疲れ様でした。」

議長の解散の言葉と共に各国の大臣達が席を立ち、肩を叩いたり、飲み物を買に行ったりし始めた。そんな中、日本国の外務防衛コンビの二人に近寄る男がいた。先ほどのガイアの外務副大臣である。

「お久しぶりです、お二人とも。お元気でしたか？」

園宮は防衛を担当するため自らの元気の9割強を仕事の為に消費しなければならなかったため、残りの1割未満の元気は生命維持の為に使わざるを得ない。そのため彼は肩をすくめてこう返した。

「どうもこうも・・・仕事さえなければ元気だったでしょうね。」

気持ちが分からないでもないガイアの外務副大臣の男は園宮に深く同情すると、この話題を続けていると思いついたくないことまで思いついてさらに疲れてしまふのではと考えて話題を変えた。

「それはそれは、しかし今回の作戦案。失礼ながらそちらの国のあの天皇陛下が簡単に認めるものだったのですか？」

彼は直に帝の姿を見たことは無いのだが、テレビや話で聞く日本国の現国王である天皇陛下は10代の見目麗しい少女でありながら日本国の象徴として公務をこなしたり、時に国民を支える争いを嫌う心優しい御方であると聞かされていたため今回の作戦案に心から賛

成するとは考えにくかったのだ。

星野は人のいい何時もの笑顔を浮かべながら答えた。

「数十年前に憲法が改正され天皇家の政治的発言力が高まったとはいえ最終決定権は我々、政治家にあります。あの御方には報告さえすれば特に問題はありません。確かに帝は心優しい方ですので心を痛めてしまいかもしれませんが、あの御方は強い方ですし、なににより今の日本国の象徴と言う事を自覚なさっておられます。それに報告に行つたのは篠原総理ですから大丈夫でしょう。」

園宮はは報告に行つた上司の顔を思い浮かべると男に聞きたかつた事を聞いてみた。

「そつえば、ガイアの民主化は進んでいるのですか？」

「ええ、カテーリン大統領のおかげもあって後数年と言つた所でした。」

星野は男の言葉が過去形になっていることに気づくと状況を察し、園宮もまた目の前の男が苦労している事を理解した。

「．．．やはり今回の件で？」

「はい。遅れます。」

彼らが今回の軍事行動（交渉が決裂した場合に限る）に対してお金を取られたくない気持ちは二人にもよく分かる。なぜなら今回の時空管理局の件で位置関係的にも最も関係が無いのがガイアなのだ。ただでさえ国内の再開発に莫大な資金が必要だと言うのに管理局のせいで貴重な資金と防衛戦力を外に回さなければならなくなってしまうのだから国民からの反発も強いだろう。

「．．．大変ですね。」

実際は大変などと言う言葉では済まされない事を園宮も分かっていたが、何か言わずにいらなかった。

それを聞いたガイア人の男は先ほどの会議に疲れた顔から急に一変し、真面目な顔になると園宮の言葉を肯定しつつも仕事を続ける意志の強さを熱弁した。

「いえ、我々も自分たちの仕事に誇りを持って臨んでいます。投げ出すことなんて出来ませんよ。それに、カテーリン大統領やミーリヤ首相のような年端も行かない子供たちがあれだけの事をしているのです。我々が休んでいることなんて出来ません。」

「そうですね。我々もいざとなったら協力を惜しみません。これからもどうか頑張ってください。」

星野がそう言うと少しストレスも解消したのか、男は話しかけてきたときよりも生き生きとした表情で別れを告げた。

「はい。ありがとうございます。」

そう言うとガイア人の男は去って行った。

残された二人は男を見送ると向かい合い、これからの予定について話し始めた。

「さて、会議も終わったことだし．．．どこかに食べに行きませんか？」

「いいですね．．．割り勘は嫌ですよ？私と貴方では食べる量の桁が違うのですから。」

「そうですね。残念ですね．．．分かりました。では前回のお詫びもかねて今回は私のおごりです。」

(確実に私では元が取れない．．．orz)

前回割り勘にして大損して記憶が蘇りつつも園宮は星野につれられ国際連合本部ビル内のバレンタイン料理屋へと入っていった。

時空管理局・本局・第7ドック

管理局の大型次元航行艦用ドックの一つ、第7ドックに入っているのはXV級次元航行艦『クラウドディア』。

時空管理局最新鋭クラスの大型次元航行艦であり魔道砲アルカンシエルが標準装備として搭載されている主力艦である。火力、防御力、速力の全てにおいて従来の次元航行艦を凌駕している。

そんなXV級の一つ、次元航行艦『クラウドディア』の艦長を務め、部隊指揮官の肩書きを持つクロノ・ハラウン提督は艦橋で部下達と談笑をしていた。

「そういえば提督、知っていますか？第11次元方面の第79管理世界の近隣に反管理局組織が出没するようになったらしいですよ？それで支局の部隊が追いかけてた犯罪グループを匿われて、支局の部隊は逃げ帰ってきたらしいです。」

「ああ、聞いているよ。その件で僕の知り合いの提督の部隊から数隻程、増援を派遣するらしくてね。．．．何でも今回の組織は十数隻もの宇宙船を保有しているらしい。」

「でも、最新鋭のXV級に乗っていないながら犯人を確保せずに逃げ帰ってくるなんて．．．何を考えているんでしょう？」

これに対してクロノは支局の部隊を軽視する部下の意見を否定した。

「いや、状況から考えて現場の判断は正しかった。指揮官は手柄よりもクルーの安全を重視したんだ。」

「でも、提督なら両方向とかしてくれませんか？」

意地悪そうにそう言った女性局員の言葉に戸惑いながらもクロノは部下を守るといふ信念のもと答えた。

「あまり期待しすぎないでくれ。」

自分の部下達が面白そうに笑っているのを見てクロノは部下が自分を信頼してくれていることに感謝したが、それよりも新たに確認されたと言つ反管理局組織が気になっていた。

（新たに確認されたにしては規模が大きすぎるような・・・調べてみるか。）

なんともいえない不安が胸に残ったクロノは部下達に別れを告げ、同じく本局で勤務している古くからの友人のもとへ歩みを進めた。

第十五話 『動き出す世界』（後書き）

皇位継承問題。

この問題の解決法は一体何が最良なのか。ちなみに私は天皇家が断絶してしまうくらいならば女性天皇でも全然抵抗はありません。

そして帝様の性格が軽いのは大帝国の帝様をモデルに設定したためです。公務の時にはしっかりと天皇陛下として振舞っておられます。等といろいろな方から殺意をもたれそうな内容でしたが、これでも精一杯考えました。こんな内容でもお付き合いいただけたのであれば幸いです。

ところで今回初めて出てきた原作キャラのクロノ提督ですが、この作品ではまともな管理局員として書こうと思っております。クロノ君が嫌いな方には申し訳ありません。

今回もお読みいただき有難う御座いました。
ご意見感想、お待ちしております。

第十六話 『回廊防衛戦1』 (前書き)

夏休みなのですが、余りにも暇な時間が多く何をするか迷っています。とりあえず小説を書き進めることと何となくFF13をやり始めました。本音としてはAC? (発売前)、エスコンアサルトホライゾン (発売前) をプレイしたいのですが無理なお願いです。

そして話のほうは今回から噂の時空管理局部隊とISAFの回廊での話しに入ります。

第十六話 『回廊防衛戦1』

2160年11月2日・回廊・宇宙基地『ルナ』

国際連合共同管理の超巨大宇宙ステーション、回廊の中間宙域に存在し国連領域への侵入者を阻む宇宙要塞。

現在此処にはいずれ来るであろう時空管理局部隊に対抗するために周辺からISAF所属の戦闘艦が集結していた。その第一陣の陣容は以下の通りである。

エイリス王室海軍

『ヴァンガード』級宇宙戦艦×2、

『ドントレス』巡洋艦×3

『オーディシヤス』空母×1

『ジャベリン』駆逐艦×6

バレンタイン宇宙軍

『シユヴァルベ』級航空戦艦×1

『ブランデンブルク』級航空巡洋艦×2

『ケーニヒスベルク』級宇宙駆逐艦×5

日本国防宇宙軍

『霧島』級宇宙巡洋艦×1

『秋月』級宇宙駆逐艦×3

『葵』級索敵艦×2

ガイア共和国宇宙軍

『ヴァリヤーク』級ミサイル宇宙巡洋艦×1

『レーズヴィ』級ミサイル宇宙駆逐艦×3

このような陣容である。数が多いエイリス、バレンタイン両国の艦艇は一国の艦隊として編成され数が少ない日本、ガイア両国の艦艇は補助戦力の合同艦隊として行動することになった。もちろんこれは緊急措置であり、両国からの増援が到着しだい艦隊構成も変更されることになっている。

そのため現状ではエイリス艦隊12隻、バレンタイン艦隊8隻、日賀艦隊10隻の計30隻が 回廊の防衛を担っていた。

日本国防宇宙軍・宇宙巡洋艦『金剛』

かつての高速戦艦の名を冠した黒塗りの巡洋艦は、 回廊を出て第一ゲートから50000kmの宙域に部隊を二分した後、左翼に展開していた。その目的は哨戒行動であり、広範囲を索敵可能な索敵艦を2隻使用して第一ゲート監視基地のレーダーでは索敵が出来ない宙域を監視していた。

しかし、現在の彼らの任務は警戒監視任務であるが管理局部隊との接触時には新たな指令が出されていた。

“ 時空管理局新型艦の情報収集” それが彼ら日本国防軍に与えられた国際連合直々の任務であった。これは巡洋艦や駆逐艦にも潜水艦と同じ浅異層次元潜航能力を有し、アクティブステルス等の日本国防軍が最も適任だった。

彼らは時空管理局の部隊を発見しだい部隊から索敵艦を切り離し、巡洋艦を中心とした4隻の護衛隊で管理局部隊を包囲するように展開し追跡。その後、各国の艦隊と協力しながら管理局新型艦の戦闘能力等の情報を収集する予定であった。

そのため彼らは今、観察対象が来るのを今か今かと待ち伏せているのだ。

時空管理局次元航行艦隊旗艦・XV級次元航行艦『ノーチラス』
・艦橋

第一ゲートにおける管理局の失態を受けて本局から派遣されたXV級を中心とした総数6隻の艦隊は支局の部隊と合流し、その数を9隻に増強すると第一ゲートを目指し最大速度で航行していた。

その管理局部隊の旗艦を務める『ノーチラス』の艦長にして部隊指

揮官を任されたバルアス提督は艦橋に設けられた艦長席に座りながら自分をこのような辺境世界に送った上官を恨んだ。

「全く、支局の無能どものせいで俺がこんなとこにまで出張させられるとは．．．あのくそ上司め、覚えていろ．．．。」

などと不平不満を言いながらも上官から「犯罪者を確保する手段は問わん。」と言われていたため彼は日ごろのストレス発散も兼ねて犯罪組織が保有すると言う宇宙船にアルカンシエルを撃つのを今か今かと楽しみにしていた。

（ククク．．．卑しい犯罪者どもめ、精々俺の憂さ晴らしに付き合ってもらおうか。）

自分たちの行く先に待っているものたちがどれほど強大な勢力であることも知らずに彼らは管理局の誇りという名の自尊心を守るために次元の海を突き進んでいく。

日本国・防衛省・大臣執務室

「東郷毅、貴方を前原一将連合艦隊司令長官の後任として今日付け

で連合艦隊司令長官として任命します。よろしいですね？」

昼前の暖かな光が差し込む大臣室では宇宙軍の制服に身を包んだ男二人と、この部屋の主である園宮奏防衛相が次期連合艦隊司令長官の人事について話し合っていた。

その訪問者二人の内、片方は現連合艦隊司令長官の前原一将（96、男）でもう片方はその前原から推薦を受け既に次期連合艦隊司令長官の内定を受けた東郷毅（27、男）であった。

「謹んで司令長官の任、全うさせていただきます。」

仰々しく礼をした東郷は園宮から辞令を受け取った。

「はい。それでは現時刻を持って連合艦隊旗艦を戦艦『長門』に委譲、連合艦隊編成を戦時編成に変更後、連合艦隊旗艦及び連合艦隊直属戦隊旗艦とします。これ以降も貴方は御自分の艦で指揮をしてください。」

日本国はその保有する連合艦隊の編成を平時と有事で分けており、平時の際には4個機動艦隊、8個警備艦隊で構成されているが有事と判断された場合は運用を効率化するために機動艦隊は3個航空艦隊に、警備艦隊は4個戦闘艦隊に編成が変更されることになっていた。実質上、この有事の際に編成される艦隊が連合艦隊であるため

常設の艦隊に連合艦隊の名を使っているのは国防宇宙軍創設時の将校達が浪漫を追求したためだとも言われている。

そしてその連合艦隊の旗艦を務めることになった宇宙戦艦『長門』、太平洋戦争時唯一終戦まで生き残った超弩級戦艦の名を継いだ宇宙戦艦は、先代に恥じない戦闘能力を保持し、最先端技術の実験艦としての役目も持ち合わせていた『長門』は現在の最新鋭宇宙戦艦の『大和』級すら凌ぐ性能なのだが先の役目もあつて非常にコストが高くなつてしまい結局ワンオフ生産になつてしまつたのだ。そのせいもあつてか『長門』は就役以来、国防宇宙軍直属の特務艦、試験艦など様々な役職をこなし、広報関係にも多く使用されたため国民からの認知度は最も高い戦艦となっている。

「はい。有難う御座います。」

東郷も乗艦する艦が国防宇宙軍最強と謳われる戦艦になつたことを心なしか喜んでいようだ。

「．．．ところで、人事の方は問題ないですか？」

園宮は引継ぎが終了したので新体制について東郷について尋ねた。内定をしてから人事について検討しておくようにと前々から言っていたためだ。

「はい。人事部のほうから送られてきた提督たちのデータから“私”が優秀だと思つう人間を選出させていただきました。」

東郷が放つたこの言葉は一気に部屋の空気を不穏なものへと変えた。

「それはそれは．．．“貴方が”選出したのですか．．．。」

園宮も笑つて言ったが、目が笑っていない。実はこの男、妻子もちだと言つのに女性関係が非常に奔放で常に数十人と関係を持つているのだ。それに加えこの事が周知の事実だというのに皆が行為を認めているのだ。妻のスカートレットさえ「自分は年をとつてからでいいのでそれまではたくさんの女性を幸せにしてください」とさえ言う始末。一時、一部のマスコミが宇宙軍提督のスキャンダルとして報じたが、誰も害を感じていないとの理由で結局うやむやになつてしまつた。

園宮も人のプライベートにまでとやかく言いたいわけではないが、この男はそれを仕事にまで持つてくるから面倒なのだ。例えば女性ばかりを贖身するなどの行為を行つて問題になつたことがある。今では少し抑えられてきたと言つ話だが、何処まで本当なのか判らない。そのため今回の連合艦隊新体制における提督人事は園宮が現在最も心配している事案であつた。真面目にこの男の副官を務める秋山君に同情したいとこの時園宮は心から思つた。

しかし東郷はそんな園宮の心配をよそに東郷は表情も晴れやかに園宮に追い討ちをかける。

「ええ、“私が”選ばせていただきました。」

「．．．ここに彼が統幕のほうに提出した最終案があります。」

前原前連合艦隊司令長官が足元の鞆から封筒を取り出し、その中から東郷が選出した新たな提督たちの名簿が載っている書類を取り出した。東郷は不敵な笑みを浮かべていた。それほど自分の案に自信があるということなのだろう。

「．．．．．おや。」

と東郷は大して驚いた様子も無く呟いたのみだった。

「確認も兼ねて読み上げましょう。」

前原はそう言うに至って事務的に人事案を読み上げた。それは以外にも園宮の思ったような物ではなかった。その人事案は以下のよう
な内容である。

連合艦隊司令長官：東郷 毅（27、男）
連合艦隊参謀長：秋山 敬一郎（27、男）
連合艦隊参謀副長：草鹿 瑠（30、女）

連合艦隊直屬戦隊司令：東郷 毅

第一航空艦隊司令：佐藤 鉄次郎（56、男）

第二航空艦隊司令：南雲 圭子（28、女）

第三航空艦隊司令：小澤 祀梨（21、女）

第一戦闘艦隊司令：山本 無限（67、男）

第二戦闘艦隊司令：伊藤 裕子（26、女）

第三戦闘艦隊司令：田中 雷蔵（20、男）

第四戦闘艦隊司令：古賀 美幸（22、女）

「と、この様な人選のようですが・・・。」

前原が読み終わると部屋を静寂が支配した。数十秒ほどの重苦しい
雰囲気を取り払ったのはやはりこの男であった。

「皆優秀な軍人です。」

もちろん東郷であることは言わずもがなであるが、この人事案の内
容には心配そうだった園宮も意外さを隠せなかった。しかし、よく
データを見てみると何かおかしいことに気づく。

「男女比が割と普通だったのに驚きましたが．．．年齢差が激しすぎませんか？」

男女比5：5と言うのは今の国防軍では割と普通のことなので特におかしい所は無いのだが、如何せん若すぎる気がする提督が多いように見受けられた。

「．．．ああ！言われて見ればそうですね。ハッハッハ」

（わざとらしい．．．）などと心で思っても絶対に口に出さない園宮はこれでは実績のある提督である佐藤提督や山本提督などは問題ないとして、まだ若い小澤提督や田中提督、古賀提督の部隊では指揮に影響が出てしまうのではないかと危惧した。

「これでは指揮に影響するのではないですか？特に田中提督や小澤提督などは優秀なのは知っていますが若すぎる。まだ連合艦隊の主要艦隊を任せるのは荷が重いのでは？」

「それは問題ないでしょう。皆優秀な指揮官ですし宇宙軍艦艇の乗員年齢なんてまちまちです。それでも問題なくいままでやってこれました。」

確かに宇宙軍に限らず実力主義の国防軍では20代の指揮官が30代のベテラン達中心の部隊を指揮することもざらにあるが、今まで連合艦隊司令長官は若くて50代後半の人間が勤めてきたのだそれを前原閣下の推薦とはいえ20代の人間を連合艦隊司令長官に据えたのも初めてだというのにさらには20代の人間がここまで多い連合艦隊というのも前代未聞だろう。

しかし、この男は人を見る能力は誰にも負けないと言う。もちろん提督としての能力も同期と比べても郡を抜いている。それはシミュレートの結果を見たから判る。だからこそ前原閣下もこの男を推したのだろう。それに国防軍は実力主義だ、今まで年功序列というか暗黙了解的に年輩の提督方を司令長官に据えてきたこと自体がそもそも国防軍のあり方に反しているのではないか？それにこの案は人事部も了承しているのだし・・・。

とそこまで考えた園宮は決心したのか（汚染ではない）東郷の案を呑むことにした。

「・・・分かりました。貴方の人を見る目が大変優秀なのはよく耳に挟みますからね。・・・それでは今日の17時より統合幕僚長や私を含めて各軍の最高責任者会議がありますから、遅れないようにしてくださいね。」

「努力いたします。」

笑みを浮かべながら言う東郷を見て園宮は一人、（この人、絶対ギリギリに来るつもりだ．．．）と思いながら優秀だが変人が多い自国に於ける数少ない常識人（自称）としての立場を憂いた。

バレンタイン第三帝國・總統府

「『ルナ』の状況は？」

「今の所、特に状況に変化はありません。いたって平穩そのものです。」

今ここでは宇宙基地『ルナ』に派遣する第二次派遣部隊の編成について会議が開かれていた。議長はバレンタイン第三帝國總統レーテニア・ハーデルハイトである。

「分かった。では会議を始めよう。まず第二次派遣部隊についての報告を。」

これには宇宙軍總司令官のエアリツヒ・レーダーが答えた。

「では私から。．．．第二次『ルナ』派遣艦隊はマンシユタイン提督を指揮官に据え、旗艦『シャルンホルスト』以下、戦艦2、巡洋艦2、駆逐艦5の計10隻を考えています。」

「潜水艦は送らんでいいのか？」

「第三次派遣部隊に入れる事を検討中です。何分、デーニッツ提督の調査部隊に多く艦艇を割いてしまいましたし、日本の第二次派遣部隊には潜水艦部隊が含まれているようですので、そこまで急ぐ必要もないと考えた結果で御座います。」

これは予想していたので特に不満を持つものは出なかった。デーニッツ達の潜水艦隊を調査部隊として派遣したのは時空管理局についての情報収集もあつたがさらなる運用能力の向上も兼ねているのだ。この時のバレンティン上層部は自国の潜水艦はまだ艦隊戦を満足にこなせるかどうか疑問視していたのだった。それゆえ日本国がたびたび行っている管理世界への潜水艦による偵察任務を試験的に行つたのだ。

「把握した。それでエイリス、ガイアの部隊は？」

「エイリスは回廊に最も近いこともあり多数の艦艇を動員しています。第二次派遣部隊には第二機動艦隊が動くとも．．．。ガイアは

第二次派遣部隊が最後となります。内訳は『クロンシュタット』級宇宙戦艦1、『ヴァリヤーク』級宇宙巡洋艦1、『レーズヴィ』級宇宙駆逐艦4といったところです。ガイアとしてはこれ以上の増派は無理でしょう。」

「だろうな。その数でもよくやったと言えるほどだ。．．．指揮官は？」

「マロン・コンドラチェンコ提督です。」

「．．．あの酔っ払いか。」

「．．．はい。．．．ですが実力は確かです。」

「まあいい、．．．で、エイリスは？」

「ヴィクトリー・ネルソン提督を指揮官に旗艦『ヴィクトリー』以下、『ヴァンガード』級宇宙戦艦2、『オーディシヤス』宇宙空母1、旧式の『グローリアス』級宇宙空母1、『ドーントレス』級宇宙巡洋艦3、『ジャベリン』級宇宙駆逐艦6の計14隻を派遣する予定です。」

「大きいな。」

「はい。騎士提督のネルソン閣下を派遣するあたりエイリスの本気が伺えます。」

エイリスには騎士提督のトップに君臨する親衛隊騎士提督ジョン・ロレンス、第2機動艦隊騎士提督ヴィクトリー・ネルソン、第7機動艦隊騎士提督クルード・モントゴメリーの3人の提督がおり、エイリス軍人の憧れとなっているのに加え優秀な軍人として各国からの評価も高い。その一角を『ルナ』に派遣すると言うのだから今回の件に於けるエイリス本国の本気が窺い知れるというものだろう。

「まあエイリスについては十分分かった。．．．それで、日本は？」

レーティアを含め各国上層部が気になる所はここであった。基本的に日本は平時の際には大規模な軍事行動を行う事を避ける傾向があるため、今回の派遣についても消極的なのではないかと考えられていたのだ。

「はい。日本国防宇宙軍の第二次派遣部隊ですが、先ほどお伝えしたとおり潜水艦を中心に情報収集能力、哨戒任務に特化した編成でして。『黒潮』級潜水艦9、『瑞穂』級潜水母艦1の計10隻を派遣する予定です。」

「潜水艦隊か．．．指揮官は？」

「入江一馬大佐が指揮を執るそうです。」

「わが軍に潜宙艦の運用のイロハを教えてくれた名提督か．．．さぞかし優秀な部隊なのだろうな。」

レーティアは若干羨ましそうに言った。レーダーも同じ考えなのか国防宇宙軍の潜宙艦やその運用能力を評価し始めた。彼らにとって日本とは自分達に潜宙艦を使用した新しい戦術を教えてくれた師に値する国家なのだ。

「はい、日本国の潜宙艦隊、及び潜宙母艦の性能、運用実績はISAFでも群を抜いていますからね。早く我々も追いつきたいものです。」

「全くだ。．．あの国の技術力は異常だ。ガイアはともかく我が国やエイリスが全く追隨することができないなんて．．努力はしていると言っのに。」

レーティアは自分は天才であると自負していたし、他人もそれを認めていた。なぜならバレンタインは国際連合の中では日本に次ぐ技術先進国であり、その主要な技術の殆どは総統であるレーティアが推進、開発してきたものだったからだ。しかし、バレンタインのそうした最先端技術もエイリスの技術開発を担う研究所や4大財閥と

言われる巨大企業がその財力をもってして開発した技術さえ日本では当たり前のような物に過ぎないのだ。

「それに日本は『コクーン』で開発している各種技術情報の開示にも中々応じませんしね。技術力の不均衡は同盟関係にも悪影響を与える可能性があるというのに、あの国は何を考えているのでしょうか。」

だからこの様に不平不満が出るのも日常茶飯事であった。

「さあな、私にも詳しいことまでは分からない。だが、段々と日本も態度を軟化させてきている。潜宙艦の技術供与などがいい例だ。ともかく我々は今すべきことは目の前の問題に対処することだ。管理局の件が落ち着けば日本からの技術供与に向けた交渉を行う機械も増えるだろう。」

事実、世界が安定期に入ると日本は『コクーン』への外国人の留学などを認めるようになり、技術供与も段階的に行われるようになった。

第十六話 『回廊防衛戦1』 (後書き)

このたび、歌詞を無断転載するとIDが強制的に消去されることになったそうで．．．私は大丈夫かななどと勝手に思っておりますが、いきなりのこの動きには驚きを隠せません。一体どうしたと言うのでしょうか。

その話は置いておいて皆様、今回もお読みいただき有難う御座います。次話からはISAFと時空管理局の衝突のお話で御座います。それが終わったら少し国内の話と少し管理局の話をお話します。要するに準備期間です。(何の為かはあえて言いません。)

それではまた次回、最後となりましたが何時ものごくご意見ご感想お待ちしております。

第十七話 『回廊防衛戦2』 (前書き)

前話に引き続き 回廊での戦闘が中心です。

第十七話 『回廊防衛戦2』

2160年11月3日・第一ゲート周辺宙域・日本国防宇宙軍
巡洋艦『金剛』CIC

「索敵艦『菊』より通達！ポイント4-1-7にて大型艦9隻を確認、第一ゲートに向け速度25で航行中。恐らく時空管理局部隊と思われませぬ。如何いたしますか？」

「『ルナ』及び味方艦隊に報告。その後、両索敵艦は現宙域において潜航し待機、『菊』、『菱』の護衛隊を本戦隊と合流させる。」

「了解！」

防衛ラインの最も外周で警戒任務にあたっている日本国防宇宙軍の艦艇、彼らは索敵艦『菊』の高性能パッシブ・レーダーによってようやく待ち望んでいた客人を見つけ、『ルナ』に報告、管理局を出迎える用意に取り掛かった。

「駆逐艦『文月』、『葉月』、本戦隊と合流しました。」

「国籍不明船団の現在宙域はポイント3-2-7、針路、速度共に変わりありません。」

「エイリス艦隊、バレンタイン艦隊、ガイア艦隊展開完了。」

「宇宙基地『ルナ』、戦闘態勢に移行完了。」

「第一ゲート電磁パルスフィールドの減耗率83%、艦船通過可能まで後39秒です。」

CICにつめている各員から様々な報告があがってくる。それに従い室内にある多数の空間ディスプレイに映し出された画像が切り替わり状況の変化が見て取れる。

「よし、それでは本戦隊は本来任務である情報収集を開始する為、管理局艦隊に浅異層次元潜航状態で接近、敵新鋭艦の性能等を調査する。全艦浅異層次元潜行用意！潜航しだい最大戦速にて管理局艦隊に接近、追跡する。」

「了解！」「」

同日・回廊・宇宙基地『ルナ』・指揮司令センター

「そうか・・・もう来たのか、もう少し待ってもらいたいものだったな。」

『ルナ』基地司令、サイモンはよほど管理局の来るタイミングが気に喰わなかったのか、心底嫌そうな顔をして言った。彼としては第二次派遣部隊が到着し、ある程度まとまった戦力が整ってから管理局が来てくれた方が戦わずにすんだ可能性もあったので好ましかったのだ。

「言っても始まりませんよ、各艦隊の展開は既に完了しています。」

副官によって現実の非情さを改めて認識した『ルナ』基地司令のサイモンは服を正して手元のコンソールを操作し第一ゲート外の防衛ラインの配置図を展開すると部下に指示を飛ばした。

「よし、当初の作戦通りに進めよう。日本艦隊は不明船の情報収集、戦闘データの収集に努め、他の艦隊は所定の防衛線にて待機せよ。」

「了解。」

情報収集に関しては、これから管理局と武力衝突することが予想される為、適切な対処法を整える必要が出てきた。そのため今回の防

衛戦では管理局部隊の新鋭艦XV級の性能を管理局部隊に様々な状況、障害を用意しそれに対する対処などから艦の性能を判断させてもらうことになっていた。もちろん拿捕すればいいのではという意見も出されたが、情報不足で不明な点が多く危険な為、却下されたのだ。

「さて、管理局の皆様？ 私たちの曲で踊っていただきましょう。」

ここに 回廊防衛作戦の幕が切って落とされた。

時空管理局次元航行艦隊旗艦・XV級次元航行艦『ノーチラス』

・艦橋

「提督！ まもなく該当宙域に到達します。」

「レーダーに反応は？」

「確認しておりません。」

（）・・・逃げられたか？・・・いや、何処かに隠れている可能性もある。（）

管理局部隊提督セドリック・ランスはあくまでも慎重であった。これが居場所のわからない敵に対する恐怖や不安なのか、いたぶる相手がもう居ない可能性から来る焦燥感なのかは判らなかつた。

「警戒を厳にしておけ、何処から出てくるか判らんからな。」

「了解しました。」

(隠れているとしたら、支局の奴らが行っていたエネルギーシールドの向こう側か・・・だがそんな物、アルカンシエルがあればどうと言つことは無い。空間ごと消し去ってやる。)

彼らは既に自分達が日本国防軍所属の戦闘艦艇に囲まれているのに気付かずに意気揚々と獲物を探していた。そして彼らの待ち望んでいたものがとうとう現れた。

「提督！レーダーに反応がありました！数10、距離30000、方位18、鶴翼陣形で我が部隊の進路上に布陣しています。」

「ほう・・・逃げなかつたのか。その無謀さだけは認めてやる。」

「提督、前方の船団から通信が入っています。」

「? . . . 繋げ。」

「了解しました。」

その数十秒後、セドリック達の目の前に大型の空間ディスプレイが展開し、そこには第一防衛ラインの防衛を担当しているガイア艦隊の司令、ヴェチエスラフ・ロバノフの姿が映し出されていた。

『初めまして、私はISAF所属エイリス宇宙軍「ルナ」派遣部隊司令ヴェチエスラフ・ロバノフであります。あなた方時空管理局との犯人引渡しについての再交渉に関しましては我々の本国からの回答として“不法入国罪、公務執行妨害等の罪状が御座います故、これらについての裁判と平行してあなた方と我々の間で犯人引渡し条約についての「何を言っている?」 . . . ??』

セドリックは元々、最後まで犯罪者の言う言葉など耳に入れるつもりも無かったのだが、目の前の男が発する言葉が余りにも意味不明であり時空管理局提督、ましてや本局の提督である自分に対する敬意なども感じられなかった為、相手の話を途中で遮ることとなってしまった。しかし、彼は大して意にも介していないのか名乗りもせず高圧的に要求を述べた。

「貴様ら犯罪者は大人しく身柄を拘束されればいいのだよ。君達がああ海賊グループを匿っているのはもう判っている。ならば君達も同罪だ。無駄な抵抗をやめ直ちに武装解除しろ、さもなければ実力を行使するぞ。」

『我々は主権ある独立国家として当然の権利を行使したに過ぎません。私は軍人なので政治のことはよくわからないのですが、自分たちの庭に無断で入ってきたならず者を無力化することの何処に罪と言われる点が在るのでしょうか？』

ロバノフは平静を装ってはいるが、怒りを隠すことは難しそうだ。言われも無い罪の追及、自国に対する暴言、同じ国家に使えるものとしてロバノフは目の前の男を認めるわけにはいかなかった。

「なにが国家だ、今までそんなものは存在しなかった。確かにこんな辺境とはいえっても新しい世界の調査は無能な支局の連中には荷が重いかもしれんが、かといって君達が独立を勝手にほざく理由にはならない。もう一度だけ言うぞ犯罪者。直ちに武装を解除しろ、君達も田舎者とはいえXV級にアルカンシエルが標準装備されている事ぐらい知っているだろう？」

(・・・XV級というのか、機密ではないのか?)

ロバノフは目の前の男が余りにも口が軽いことに驚き、もしかすると口だけで情報を得ることが出来るのではないかとさえ考えたが、

直ぐに立ち直ると冷静に、紳士的に答えた、

『全く存じ上げておりませんな。しかし、そうですねか．．．武力行使を行うと言っているのであれば、こちらもお相手せねばなりませんまい。』

この答えが更にセドリツクの逆鱗に触れたのかセドリツクは不機嫌そうに顔をしかめると艦隊の全艦に交戦許可を与えた。

(フツ．．．犯罪者ごときが生意気な、大人しく命令に従っていればよいものを．．．怨むのならその自分の浅慮さを怨むのだな。)

「アルカンシエル発射用意！」

「了解しました！」

その様子を見てロバノフは残念そうにセドリツクを見ると独り言を呟くかのように武人らしい答えを返した。

『話を通じる相手ではありませんでしたか、非常に残念です。こうなれば最後の一兵まで戦い抜くしかありません。それでは。』

そう言ってロバノフは軽く別れの挨拶を口にするると通信を切った。

ISAF・第一防衛ライン・第一防衛ライン防衛艦隊（以後、
ガイア艦隊）

先の管理局部隊の補足によって管理局の艦船に搭載されているレー
ダーの索敵範囲を大まかに把握する事ができた為に、次はこの艦船
の防空能力についての情報を収集することになった。

今回の情報収集の項目は具体的には以下のようになっている

- 1：正式名称
- 2：レーダー性能
- 3：電子戦能力
- 4：防空能力
- 5：速力
- 6：アルカンシエルの性能
- 7：ソナーの有無
- 8：搭載されているであろう武装の詳細

今の所完了している項目は1、2、7、の三つのみであり後の5項
目はこれからであった。そしてガイア艦隊はその保有するミサイル
戦闘艦の能力が管理局艦艇の防空能力を測るには適任だとして第4
項目を割り当てられたのだった。まさか第6項目まで一気に収集で

きるとは思っても見なかったが。もちろん間接的、部分的に第3、第8項目の調査も出来るのでミサイルの速力の低さという短所が寧ろ長所になった瞬間であった。撃たれる方はたまったものではないが。。。

ともかくガイアの将兵達はISAFの中では最初に管理局との交戦を任されたということで士気は非常に高かった。普段、国民達から国内の開発に資金が必要だと言うのに無駄に金を喰う“旧体制の悪しき遺産”等と陰口を叩かれ苦杯を飲まされている彼らだったが、ここである程度の活躍を示せば予算の増額は無理だろうが、国民感情は少し改善してくれるだろうという希望を持っていたのだ。

「しかし、相手に必要以上の情報を与えない為とはいえまさかエイリス人の演技をさせられるとは思っても見なかったな。全く．．．私は英国紳士の立ち振る舞いなど知らんぞ？」

「いえいえ、中々さまになっていましたよ。私が女だったらダンスに誘いたいくらいです。」

「冗談はよせ。」

ロバノフとガイア艦隊旗艦『ラーヴァ』艦長のマルク・ミハイロフは仲良く談笑しながら艦隊の戦闘準備が整うのを今か今かと待っていた。そして二人の話が先程よりもさらにくだらなくなりそうな時になってようやく準備が完了した。

「司令！全艦戦闘体制整いました！」

「いつでもいけます！」

「『ルナ』より攻撃許可確認しました。」

「よし、では始めよう。日本軍の心配はせんでいい、彼らは浅異層次元潜航状態だからな。ミサイルが当たるわけが無い。そして我が艦隊の獲物だが、我々は管理局艦隊の先頭3隻を集中的に狙う。ミサイルの飛翔コースは打ち合わせどおりだ。」

「了解。」

「緒元入力完了、ターゲット01、02、03、ミサイルロック完了了。」

「飛翔コース最終確認完了。安全装置解除。」

「日本艦隊、飛翔コースからの退避完了、コースクリアです。」

「VLS開放、発射準備完了しました。」

全ての準備が完了したのを確認するとロボノフは周囲の部下達を見回して指示を下した。

「・・・よし、全艦に通達、各艦は目標に向け対艦ミサイル「グラニート」発射！誘導及びデータの収集が済み次第、防衛ラインから撤退、大きく迂回しながら敵部隊の後背に回る。」

「了解！」

「グラニート・・・ファイア！」

『SSM、発射完了。順調に飛翔中です。目標到達まで約120秒』
「！」

（・・・当たってくれよ！）

それは全ガイヤ将兵の魂の叫びであった。

少し時を遡って・時空管理局次元航行艦隊旗艦・XV級次元航行艦『ノーチラス』・艦橋

「アルカンシエル、発射準備完了しました！」

「バレル展開！目標、敵艦隊！」

その声に呼応するかのように『ノーチラス』の前方に3つの巨大な環状魔方陣が発生し、その中心に光り輝く魔力の塊が形成されていた。

「ふむ、もつとゆっくりでも全く問題は無かったのだがな．．．まあいい、その汚い船と共に逝くがいい．．．ファイアリングロックシステムオープン．．．．アルカンシエル発射！」

セドリックはそう言うつと自身の目に前に浮かんでいた箱状の鍵穴にトリガーとなるキーを差し込んだ。

発射の合図と共にトリガーは赤く変色すると前方の環状魔方陣の前に更に巨大なレンズ状の魔法陣が出現、環状魔方陣の中心で形成された膨大な魔法エネルギーが一条の細い矢となってそのレンズを通ると、その大きさを倍以上にまで巨大化させ、アルカンシエルは

一直線に前方に展開する艦隊へと向かった。

そして破壊を目的とした膨大なエネルギーの矢は、その消し去るべき艦隊に着弾すると目もくらむような閃光を発したかと思えば周囲の空間を歪曲させ、管理局部隊の進路を封鎖していた艦隊を周囲の数百キロの範囲ごと対消滅反応によって完全にこの世界から消し去った。レーダーにも先ほどまで映っていた艦影は見当たらず、完全に消滅させたと確信することが出来た。

セドリツクはその光景を満足そうに眺めると先ほど自分に対して不遜な態度をとった男を罵倒した。しかし、その時彼はまだ自分達が何の戦果も上げていないことに気づいていなかった。その報いはレーダー員の悲鳴と共に知らされる。

「だから言っちゃったのに、直ちに武装解除しろと、全く犯罪者の思考と言つのは何時になっても理解できん。「提督!!」・・・なんだ騒々しい。」

「本艦隊の右舷、左舷、両方向より高速で接近する物体多数!!距離57000、速度・・・約1500宇宙ノット!?・・・そ、その数48発です。」

「な、何だって!?!」

ISAF・第一防衛ライン・ガイア艦隊

「敵さん、まんまと一人芝居してくれましたが、やっとこちらの攻撃に気付いたようです。」

「遅すぎるな、戦場でこれでは指揮官の能力が疑われる。いや、先ほどの通信で人となりはよくわかってはいた。それにしても沈めていいのが3隻だけとは物足りんな。」

このとおり先ほどアルカンシエルによって消滅させられた艦隊は艦隊などではなく、小惑星群から艦船サイズの物を適当に見繕ってきた、その上に通信装置を設置し立体映像でエイリス艦に見立てるという何ともせこい手を使ったダミー艦隊であったのだ。勿論、これには武装は皆無であるし、立体映像も近寄ってよく見るとばれてしまったため時間稼ぎにもならないのだが、これは敵にアルカンシエルを撃たせ、そのデータを収集する為であり、勿論ここで失敗しても二重三重と艦隊の進路を邪魔するようにダミーの標的が配置されていた。

尤も、管理局がここでアルカンシエルを撃った為、そのデータは即座に日本艦隊が収集、『ルナ』へと伝送されてしまい、他の標的の役目は無くなってしまう、『ルナ』の小型艦達がせつせと移動させた訳であるが……。

ちなみにミサイル攻撃担当のガイア艦隊4隻は手近な小惑星群に身を隠しながら行動をしている。

「任務ですから仕方が無いでしょう。最悪、データさえ取れば敵が無傷でも構わないのですから。．．．しかし、確かに敵将の男は酷かった。あれでよく社会に出れたものです。」

「そうだな、と、グラニートの目標到達まであとどれくらいだ？」

「約40秒です。」

「敵部隊、迎撃を開始！」

「ふむ。データの収集は日本の役目だからな。さて艦長、管理局が何割落とせるか賭けようか？」

先ほどの通信で敵の力量がある程度判った為か若干の余裕が出てきていた。

「武装がわかっていないから何ともいえませんな。」

「じゃあ私は3割落とすに賭けます」

「おいおい砲術長、君まで何w」では私は2割に賭けよう。「・・・
・・・4割で。」

「司令、目標到達まで20秒です。あと私は3割で。」

「敵部隊、なおも迎撃中。それと、私は水割りで。」

「よし、到達を確認しだい本艦隊は戦域を撤退。後は先ほど言った
とおりだ。それと最後の、参加していないくせに勝った気ているな。」

「了解!!」「」

司令たちが少し緩い空気を作ってくれた為か、その後は皆リラックスした状態で任務に臨むことが出来、普段よりも仕事が捗ったと言
う。

・艦橋

「ミサイル到達まで60秒です！」

「迎撃しろ！」

「了解！」

対して此方には余裕という文字は欠片も感じることは出来なかった。それもそのはずで、先ほど敵を殲滅することが出来たと思つた矢先に右から左から計48発もの対艦ミサイルに狙われているのだ。余裕で居られるはずも無い。

「対空魔導砲展開完了、魔導誘導弾発射用意完了いたしました。」

「発射しろ！全弾打ち落とすのだ！」

「魔法障壁展開用意！」

「ジャミング、効果ありません！」

(クソツ・・・生意気な。)

基本的に管理局が保有する次元航行艦は宇宙空間での艦隊戦を想定した設計をなされてはいない。なぜならば管理局の任務とは例えて言えば警察と同じようなものであるからだ。勿論、管理局も対ロストロギア、大規模な犯罪グループの撃退、治安維持の名目で武装を施してある。しかし、それは常に自分達が優勢であった時に開発され運用されてきた。しかもそれが比較的長い年月そうした状況が続いていれば人間の心には慢心と言う悪魔が潜む。

結果的に管理局次元航行艦は魔導師の地上投射能力、魔導師との指揮能力、転送ポートを使った高い輸送能力など、地上任務に当たる魔導師のサポートに特化した性格を持つようになってしまったのだ。時折現れる海賊に対処する為に中口径の魔導砲や誘導タイプの魔導砲が搭載されているが、勿論、大規模な艦隊戦など考慮されていない。今までにその様な状況が無かったからだ。アルカンシエルは艦首にしか装備されていない半固定砲の為、艦の前方にしか放つことは出来ない。つまり死角が多いのだ。

以上のように宇宙空間での大規模戦闘をほぼ想定していないと言っても過言ではない管理局次元航行艦はガイア艦隊からの対艦ミサイル攻撃に対処することが出来なかったのだ。

「何発落とした！」

「5発の迎撃を確認！到達まで30秒！！」

「敵の狙いは本艦隊前衛の3隻、『ユミル』『リントヴルム』『ウベルリ』だと思われませう。」

「退避しろ！！」

しかし、司令の叫びもむなしくガイア艦隊からのミサイルは正確に管理局部隊の前衛に向け殺到した。

まずL級次元航行艦『ウベルリ』は艦尾に2発、動力機関である魔導炉に1発が命中し爆発、艦の右舷に3発、左舷に1発の命中弾をくらい、その艦形を大きくゆがませて爆砕した。

そしてXV級次元航行艦『ユミル』は艦首に2発、右舷に4発、左舷に2発、艦尾に1発が命中し、被弾した艦の中では最も命中弾が少なかったのだがダメージコントロールが間に合わず艦内の酸素を外に奪われ、多くの乗員が被弾箇所から艦外へと放り出されてしまった。

最後に、部隊の先頭を務めていたXV級次元航行艦『リントヴルム』は艦首に2発、右舷に3発、左舷に5発、艦尾に2発、そして不運なことに艦の中枢である艦橋に1発が命中してしまったのだ。それによって艦の指揮系統は麻痺、加えて艦尾装甲を貫いたミサイルは

そのまま魔導炉を粉碎、コントロールを失った膨大な魔力がエネルギーの渦となって周囲の空間を飲み込んだ。これによって回避しようとしていた後続の艦の一隻が小破するほどだった。

「XV級『リントヴルム』 『ユミル』 L級『ウベルリ』 大破！ L級『レラジエ』 小破！」

「残骸が障害物になって航行に支障が出ています！！」

艦内、いや艦隊全体が大混乱に陥っている中、司令のセドリツクのみが虚ろな目で既に残骸と成り果てた3隻の次元航行艦だったものを見つめていた。

「．．．．そんな馬鹿な．．．．。」

その嘆きは誰にも聞こえることなく虚空に消えていった。

艦体への直撃弾29発

魔法障壁のみへの直撃弾5発

迎撃によって損失したミサイル9発
故障によって動作不良が発生したミサイル5発

有効弾29発

敵部隊迎撃率約2割

賭けはガイア艦隊司令の勝利であった。

この戦闘は全て日本国防宇宙軍艦艇によって撮影、データの収集が行われており、戦闘終了の後すぐさま「ルナ」に伝送されると解析にかけられた。この時点で調査項目の6つが調査完了しており、残りの2つについても更に細かいデータをとるために国防軍は浅異層次元潜航状態で静かに管理局部隊を包囲しながら追跡していくのだった。

そして管理局部隊の行くてには第一防衛ラインを守護していた駆逐艦中心の小規模部隊とは比較にならない程の更なる脅威が立ち塞がっていた。その名も、

第二防衛ライン防衛艦隊

バレンタイン宇宙艦隊の“戦艦部隊”である。

第十七話 『回廊防衛戦2』（後書き）

作者の力不足で皆様に分かりづらい点などがありましたら、ご意見等お寄せいただければ幸いです。

特に「この世界で宇宙空間でのソナーって何？」という質問が来る様な気がいたしますので先にお答えしておきます。簡単に言えば宇宙空間で浅異層次元潜航状態の艦に対する索敵手段がソナーです。もちろん通信手段にもなります。

海中の潜水艦を見つけるソナーをそのまま宇宙空間でも原理は違えど同じ名前で使っていると解釈していただけると幸いです。

こんなことを後書きで書く事しか出来ない自分を恥じています。本来ならば本文に書き込むべき事なのですが・・・。

今回の話の途中で不審に思われた方々を含めた読者の皆様に、この場を借りて謝罪させていただきます。本当に申し訳ありませんでした。以後、この様なことの無い様に努めます。

それでは。

第十八話 『回廊防衛戦3』（前書き）

と言うわけで前回から引き続き、回廊とその周辺宙域に於けるI S A Fと管理局艦隊の戦闘になります。

それと個人的には一週間に一話の頻度で投稿できるように努力していきたいと思っております。あくまで努力目標なのは申し訳ないと思いますが・・・。

第十八話 『回廊防衛戦3』

2160年11月3日・时空管理局次元航行艦隊所属・XV級
次元航行艦『チエレスタ』艦橋

「まさか、ここまでとは……………」

「ええ、我々は彼らを見誤っていたのかもしれませんが。」

XV級次元航行艦『チエレスタ』を預かる二人は自分たちの予想を遥かに上回る戦力を保有していた敵に対して恐怖すると共に自らの読みの甘さを恥じていた。

「それもあの馬鹿があんな態度で一方的に要求するからだ。何を考えているんだあいつは。」

やはり温厚な彼としてはいきなり相手に対して高圧的に要求を行った本局の提督に憤りを隠せないようだ。副官も同調しているがアデルよりは静かに問題を指摘した。

「セドリック提督の犯罪組織に対する強硬な手段の行使や、部下に対する高圧的な態度など問題視されている点は数えればきりがありません。」

「しかし今はあの馬鹿の事を話している場合ではないな。全く、一体彼らは何隻の船を保有しているのだ？ 確実に後ろから支援している組織がいるに違いない。．．．いや、彼らが言つとおり本当に正規軍なのかもしれないな。」

「確かにこの周辺には無人世界しかありませんし、調査しようとも思いませんでしたからね。」

「ああ、我々は次元空間を航行することが出来、数多の世界を観測しているが通常空間の調査はあまり行われていないからな。もしかすると、我々が見ている世界は実はとても小さいものかも知れんぞ。」

「実際管理局で同じような考えを持っている人間は多かつた。確かに次元航行技術の確立によって世界間の移動は簡単なものとなつたが、一つの世界の全てを調査した例は存在しない。そもそも世界と世界の境目すらまだ曖昧な物なのだ。自分達が気付いていないだけで実は近くに敵が潜んでいることもあり得るのだ。」

「．．．我々は、敵に回してはいけない相手に手を出してしまったのでしょうか。」

「まだ判らない。だが仮にそうだとしても我々は時空管理局の局員

だ。管理世界の秩序を守る、そのことは変わらない。」

「はい。」

管理局の中では比較的まとまな部類に入る二人は、管理局の先行きを不安に思いながらも、今しなければいけないことに向き直った。

同日・第二防衛ライン・バレンタイン艦隊旗艦・『ヴェストフアーレン』CIC

「閣下、レーダーに反応有、ポイント2 - 6 - 5、数6、速力27、本艦隊に向け進行中です。」

「うむ分かった。総員！！戦闘配置に付け！」

「了解！！！！」

指揮官の命令に呼応するようにバレンタイン宇宙艦隊を構成するインディゴカラーの戦闘艦艇群は保有する武装の具合を確かめながら着々と戦いに備え始めた。

『駆逐艦ヘッセン、戦闘準備完了。』

『巡洋艦シャルンホルスト、戦闘準備完了。』

『駆逐艦ブリッツ、戦闘準備完了。』

「閣下、本艦ヴェストファーレン、戦闘準備完了。乗員の士気もすこぶる良好です。」

これがバレンタイン艦隊は戦闘準備を完了し、これから招かれざる客人を向かい入れる用意が整ったことを意味していた。将兵達も始めての艦隊決戦に興奮しているのか落ち着かない様子だった。

その為、司令は全ての準備が完了した事を確認すると興奮の余り暴走しそうな部下達を静めた。

「そうか、それは結構だ。しかし、もう少し落ち着きなさい。お客さんは待っていていればそのうち見られる。急いで事は仕損じるとも言うだろうか？」

「ソナーに感有、管理局部隊を追跡中の日本艦隊と思われませぬ。」

「よし、観客もご到着されたことだ。．．．始めよう。」

「了解。」

バレンタイン艦隊が担当する第二防衛ラインは第一ゲートを出たすぐ傍にある。と言うよりも第一ゲートを背に配置されていると言っても過言ではない。そして今回バレンタイン艦隊が第5調査項目であるXV級の最大速度の調査を担当する為、ゲートの電磁パルスシールドは展開されていない。

基本的な作戦行動は敵を挑発して最大速度まで加速させることにあるため、積極的な攻撃は行わない。そのため挑発を繰り返しながら前進と後退を繰り返し、相手が誘いに乗った所で回廊内部へ後退、加速し敵の加速を狙うというものである。

「全艦、輪形陣のまま微速前進、管理局部隊を捕捉後は威嚇射撃の後、後退する。」

「了解、微速前進。」

同日少し時が進んで・回廊・宇宙基地『ルナ』指揮司令セン

ター

「日本艦隊から新たなデータが伝送されました。解析班に回します。」

「

「ああ。」

現在ここ、宇宙基地『ルナ』では防衛戦の指揮を執ると共に時空管理局艦隊を追跡、観測している日本国防宇宙軍から伝送された性能データ、戦闘データを解析していた。基地司令のサイモンは送られてくるデータに関しては部下に一任して戦闘状況のみを注視していた。

「副長、奴さんの動きは？」

「現在バレンタイン艦隊が戦闘中。威嚇、直接射撃を続けつつ後退し、第一ゲートへと接近しています。しかし、先のガイア艦隊の攻撃によって3隻の喪失艦を出してしまったのが原因か少々、慎重になっっていますね。」

「艦隊の3分の1を短時間で失えば否が応にもそうなるさ。これが防衛戦だったら違ったかもしれないが……。それで、バレンタイン艦隊の損害は？」

「今の所、駆逐艦『ケルン』、『ミヒエル』が小破したとの報告があります。」

「作戦に支障なし、だな。」

その目は確実に、大人にいたずらを仕掛けようとする子供の目をしてきた。

同日・時空管理局次元航行艦隊旗艦・XV級次元航行艦『ノーチラス』艦橋

「忌々しい……。あれが先ほど攻撃してきた艦隊なのか？」

彼らは今、艦隊行動中に遭遇した暗い青色の重厚な戦闘艦艇群からの苛烈な砲撃を受け、少なくない損害を出してしまい、敵の攻撃が小休止に入った段階で一時後退している最中であった。

「その可能性はありますが……。支局から派遣されたアデル提督の話では、彼らが先日確認した艦艇の色は白であり、艦体もあのような重厚なものではなかったようです。」

その副官の言葉にセドリックは最悪の事態が頭に過ぎった。

「．．．つまり、まだ出てくるかもしれない？」

「はい、その可能性が高いです。」

自分達が置かれた状況がいかに苦しいものであるかを再認識させられたセドリックは今にも泣きそうに顔を歪めながら自らの失態を嘆いた。

「俺たちはまんまと敵に誘い込まれてしまったわけか．．．。」

「それでは後退しましょうか？ 3隻もの喪失艦を出してしまったのです。撤退するには十分な理由になります。」

「そんな事出来る訳が無い！俺は本局から部隊を預かって派遣されている身だぞ！？そんなことしたら降格ものだ！！」

そう叫ぶ頼りない上官を副官は冷ややかな眼差しとともに見つめていた。

(そのていどで済むならいいじゃない。)

しかし、いつまでも上官を愚弄しても事態は好転しない。現に今まで止んでいた敵の砲撃が再開された。バレンタイン艦隊の主砲は大口径のレールキャノン。光速の40%という驚異的なスピードで大質量の徹甲弾が放たれ、光の矢となって次元航行艦の魔法障壁をいとも容易く貫いていく。

「提督！敵艦隊からの砲撃が再開されました！」

「回避しろ！！」

「魔法障壁、減耗率48%！艦内電源の一部を障壁に回します！」

「右舷対空魔導砲1番、3番、4番、損傷！使用不能です！」

「回避行動中のXV級『ノーム』がL級『ノウェイン』と衝突、『ノウェイン』左舷損傷！身動きが取れません！！」

僚艦、艦内各所から悲惨な状況を伝える声が旗艦『ノーチラス』の艦橋に響き渡る。もちろん被害の甚大さは報告されずとも、敵の砲撃時に艦橋に伝わる衝撃から判っていた。艦の前面に魔法障壁を集中展開しているというのにこの衝撃である。敵の弾が貫徹するのも

時間の問題だろう。セドリックは艦隊の惨状を見て自身の不運と指揮能力の無さを後悔していた。

「・・・何てぞまだ。」

項垂れているセドリックを見つめていた副官は、一度だけ艦長席の目の前に広がる空間ディスプレイに映し出された管理局艦隊の損害状況と混乱していることが一目で判るほどに乱れた陣形を見遣ると何かを決心したのか、周りに暗いムードを撒き散らしている上官に進言した。

「提督。」

「何だ。」

セドリックは副官の方に目もくれずに項垂れたままだ。しかし、副官はそのような些事は意にも介さず続けた。

「この部隊に責任を持つもの一人として進言させていただきます。」

副官は一呼吸置いて言った。

「撤退すべきです。」

セドリックも同じ考えでいたのか、大して反感を示す事も無く発言の真意を尋ねた。

「……理由は？」

言わずとも分かるだろうとは思っても言わない。今はその時間すら惜しいのだ。現に魔法障壁を貫徹された味方艦の損害が段々と甚大になっていた。

「部隊の損害が徐々に甚大なものとなってきています。撤退が出来なくなる状況にまで追い詰められることは拙い。ならば今の内に支局に戻るべきです。犯人逮捕はなりませんでしたが、相手の規模の認識を見誤っていたのです。提督に全ての責任があるわけではありません。」

「そ、そうか。そうだな……ハハハッ。」

セドリックは自身に責任の全てが科せられる可能性を危惧していたが、事前情報と実際の情報との誤差からそれは無いと思えるようになり少し顔が明るくなってきた。副官はこれを好機と見たのかさらに言葉を続ける。

「それに今の所、此方が最初9隻だった状況で相手の保有する艦を10隻撃沈、そしてさらに10隻の艦隊と交戦して喪失艦3隻で済んでいるのです。映像も撮ってありますから確かな証拠になるでしょう。寧ろ提督は善戦されたと思いますよ。」

最後に自身を褒められたことが効いたのかセドリックは一先ず精神だけは回復し、艦隊を撤退させるように指示を下した。

「よし、分かった。撤退しよう。全艦に陣形を整え後退、敵の射程外に出て180度回頭した後、最大速度にて撤退する！次元転移準備を始める！」

「了解！」

同日・回廊・宇宙基地『ルナ』・指揮司令センター

「そうか、敵は撤退しようとする。」

ここは宇宙基地『ルナ』の指揮司令センター。暗い室内で映し出される空間ディスプレイには当初の予想を外れ、撤退を開始しようとする

している管理局艦隊があつた。

「はい、如何いたしますか？このままでは 回廊内にバレンタイン艦隊を最大速度で追つてきた所で管理局新鋭艦の速力を割り出すというシナリオが崩れてしましますが。」

心配そうな副司令を他所に、基地司令のサイモンは淡々と作戦の変更を告げた。

「ん？特に問題は無いさ。．．通信士、ガイア艦隊に道を退く様に伝えてくれ。日本艦隊には引き続き管理局のストーキングを続けるように言い、バレンタイン艦隊には加速しつつ追撃するように伝える。」

「了解」

室内に詰めている人員が続々とそれぞれの作業に取り掛かり始めているのを身ながら、副指令はサイモンに変更された作戦の意図を確認する。

「追え、と言うわけですか．．。」

「シンプルでいいだろう？」

上官の飄々とした雰囲気に戸惑いながらも副司令はもう一つの疑問を口にした。

「ええ、まあ。ところでエイリス艦隊にはどのような役目を与えるのですか？」

「ああ、英国紳士諸君には幕引き役を務めてもらうことにした。データさえ入手できればお客さんには退場していただくからな。」

“退場” 副司令はこの言葉に顔を顰めながらも、これも任務だと割り切り自身のコンソールを操作して映し出された管理局艦隊を見つめながら一人呟いた。

「同情はしたくありませんが、・・・憐れですね。」

第二防衛ライン・バレンタイン艦隊旗艦・『ヴェストファーレン』

「閣下、宇宙基地『ルナ』より作戦変更命令です。」

「読み上げる。」

「はっ！」「当初の目論見がはずれ、時空管理局部隊が撤退の兆候を見せている。その為、貴艦隊に充てられていた敵新鋭艦の速力調査について、当初の 回廊内に誘い込ませる作戦内容を変更、敵艦隊の追撃を持ってこれを達成せよ。」とのことです。」

バレンティン艦隊司令はこうなることをある程度予想していたのか、特に驚いた様子も無く命令に従った。

「・・・分かった。寧ろやりやすくなったな。敵に感謝するとしよう。」

「ええ、回廊に誘い出す為にあえて危険を冒す必要がなくなりましたからね。」

「うむ。・・・通信参謀！全艦に通告、『本艦隊はこれより敵艦隊の追撃を行う。敵の退却ルートはこの小惑星群の中で限定されている。その為、艦隊を単縦陣に再編し最大速力にて敵艦隊を追跡、並行追撃を行うものとす。並びに今回の戦闘に於いて小惑星群で行動が制限される艦載機の出撃は搭乗員、及び艦載機の安全を重視し許可しないことを重ねて厳命する。』とな。」

「了解です。」

「それと主席参謀、この戦闘のトリは日本軍からの情報を得て先回りする予定のエイリス海軍が務めるらしいのだが、敵艦についての調査項目の全てが達成されていれば我々が先に仕留めてもいいらしい。」

この言葉にCICにいた将兵達が反応した。彼らは当初、誇り高きバレンタインの軍人として防衛戦の先陣は自分達が務めると主張していたのだった。しかしその役はガイア艦隊に奪われ、しかも幕引きすらエイリス海軍艦隊に奪われてしまったという。軍人としてそのような考えを持つのは戒めるべきなのだが、どうにも納得しがたいものであった。

しかし、この作戦変更によって自分達が敵将を討ち取れる可能性が現れたのだ。これはもう本当に敵に感謝したくなる程だった。

「それはそれは、では張り切るとしましょうか。」

嬉しそうな主席参謀に同調しながら司令は本作戦において終始、日陰者に徹していたものたちの事を頭に思い浮かべ感謝した。

「ああ、しかし今回の作戦で日本軍はあまり目立った活躍が出来なかったな。尤も彼らのおかげでこれからの戦局が有利なものになる

やもしれんのだから感謝せねばならないのだが。」

「閣下、敵艦隊との距離、徐々に小さくなっております。恐らくこれが敵艦の最大速力なのではないかと・・・。」

レーダー員の報告を受け、主席参謀が楽観的過ぎると注意した。彼曰く、敵が別々の艦級で構成される艦隊として行動をしている以上、艦隊の最大航行速度が敵最新鋭艦の最大速力とは言えないということであった。

「断定は出来ません。敵艦隊には先ほどのガイア艦隊の攻撃に加え、我々から受けた損害によって速力が低下している損傷艦がいます。それらをつれた状況では艦隊行動も鈍ってくるのではないのでしょうか。」

主席参謀の発言を受け艦隊司令は嬉しそうレーダー画面を眺めた。彼は決して弱いものいじめが好きなのではないのだが、かわいい部下の命を少しでも危険から遠ざけることが出来るのならば手負いの艦などいくらかでも撃沈する気でいた。

「仮にそうだとしたら好都合だな。速力調査のために足の遅い艦から先に沈めるとしよう。先ほどの小惑星群を抜けた宙域にエイリス・ガイア両国艦隊の展開が完了したと報告があった。ならば我々は任務が早急に達成し、彼らの負担を0にする事を目標にする。」

「了解です。」

彼らの笑みには余裕の色が見て取れた。

時空管理局次元航行艦隊旗艦・XV級次元航行艦『ノーチラス』
艦橋

対してこちらは笑う余裕さえなかった。

「次元転移準備はまだ終わらないのか!！」

「も、申し訳ありません!座標計算に使用するコンピュータの一部機能を障壁展開に割いているので通常よりも時間がかかるのです!」

「提督!後方から敵艦隊が接近中!このままでは追いつかれてしまいます!」

「もっと速度は出せんのか!」

「先ほどの攻撃で『レラジエ』、『ノウェイン』両艦が機関部を損傷、速力が低下してしまい、艦隊もその速力に合わせて撤退しているので．．．。」

（いつそのこと撃沈されてしまえば良かったものを．．．。）

「提督、敵艦隊は本艦隊の左舷に並ぶように接近してきます。おそらく小惑星群で動きが制限されるのをいいことに並行追撃を行うのではないかと思われます。」

「何かいい案は無いのか？」

「全艦が最大速力をだせる状況であればこのまま逃げることも可能かもしれませんが、今回は足手纏いとなる艦がいます。ならば敵が左舷に侵入する前にアルカンシエルを発射し空間歪曲を発生させることによって敵の進攻を遅らせることが最善かと。」

「．．．撃つ前にやられるかも知れんぞ？敵前回頭は危険すぎる。」

「しかしこのまま逃げても撃沈されて終わります。」

「．．．分かった．．．全艦に通達！一斉回頭したのち敵艦隊に向けアルカンシエルを発射せよ！当てなくてもかまわん。時間が稼げればいい！！」

『了解！！』』

バレンタイン艦隊旗艦・『ヴェストファーレン』

「閣下、敵艦隊が回頭を始め方陣を構築しています。同時に高工ネルギー反応を確認。アルカンシエルの斉射を行うものと思われま

す。」

「．．．戦うつもりか？殿をのこして逃げればいいものを．．．。」

「なにはともあれ敵がここで戦う意志を見せたと言っことはすなわち死兵となつても戦うと言っことです。追い詰められた鼠はなにをするかわかりません。気をつけなければ。」

「分かっている。艦隊を鶴翼陣形に再編したのち敵艦隊を再攻撃する。」

「了解しました。」

「閣下、敵艦隊から更なる高エネルギー反応を確認。アルカンシエ
ルを斉射したものと思われまます。」

「．．．随分と遠くから撃ってきたな。先ほどの攻撃ではそこまで
射程が大きいとも思わなかったが．．。」

「ええ、．．．やはり我が艦隊の遙か前方で炸裂しています。
．．．いえ、少し待ってください．．．閣下！
我が艦隊の前方にて強力な空間歪曲が発生しています。これでは艦
の航行に支障が出てくるかと。」

「．．．時間稼ぎか．．．全く、これでは彼らに詳しい所をと
られてしまうな．．．こちらCICより艦橋、航海参謀！空間歪
曲が発生していない隙間を通り抜けるぞ。ペースが遅れても構わん。
安全を第一につうかしろ。」

『了解しました。閣下。』

(魔法による空間歪曲か、中々おもしろい物を見せてもらった。)

時空管理局次元航行艦隊旗艦・XV級次元航行艦『ノーチラス』
艦橋

「敵艦隊、完全に停止しています。今の内かと。」

「ああ、全艦に通達、早急にこの宙域を脱出する。」

「了解です。」

アルカンシエルの斉射によって発生した空間歪曲に進路を塞がれ敵艦隊が停止したため、管理局艦隊の局員たちはひとまず安堵の息を漏らしていた。旗艦『ノーチラス』の艦橋でもそれは同じで、艦隊の撤退を迅速に行うと共に次元転移準備にとりかかっていた。

「・・・次元転移準備には後どれくらいかかる？」

「15分程度で完了します。」

「しかし提督、非常時の際には座標計算をせずに次元転移することとなりますから覚悟しておいてくださいませ。」

副官は嫌味でもなんでもなく本心から上官たるセドリックに進言した。それに対してセドリックは現実から目を逸らしたいのか副官の言葉を否定した。

「まさか。」

しかし副官はセドリックの楽観的な意見を否定した。

『「チエレスタ」艦長のアデル提督が遭遇した艦は白い塗装が施された流線型の艦体だったそうです。その数、8隻。この艦隊がまだ我々の前に姿を現していない以上、警戒しておくに越したことはありません。」

「ああ、そうだな。．．．とにかく今の内にあの艦隊から逃げられるだけ逃げよう。次元転移準備が終われば我々の勝ちだ。」

セドリックが自分達がまだ安全だとは全くいえない状況に置かれている事を改めて認識して気持ちも新たに全艦で帰還する事を決心した時、レーダー員が青ざめた顔でセドリックに緊急事態を伝えた。

「て、提督。」

「何だ？声が震えているぞ？」

「もう小惑星群から抜けるのですが・・・。」

「そうか！これで自由に動くことが出来るな！」

「い、いえ・・・その・・・。」

「どうした、報告は正確に行え！」

「・・・ね、レーダーに反応有、数16隻、我々の進路を塞ぐように展開しています！」

艦橋に詰めていたメンバーは目の前が真っ暗になった気がした。一言で表せばこうである。

「・・・そんな・・・やっとここまできたのに・・・。」と

しかし、このセドリックの嘆きを気にしながらも副官は乗員と上官を励まし、士気を鼓舞しようとしていたが内心では他の局員と同じ気持ちであった。

「提督！時間を稼ぎましょう。次元転移準備さえ完了すれば逃げられるのです。・・・準備完了まであとどれくらい？」

「10分です。」

「急ぎなさい！！」

「は、はい！！」

「通信士、彼らと交信することはできるか？」

「いや、強力なジャミングがかけられている様で全く通信機能が使用できません！！」

セドリックは目の前の艦隊の司令と話し合うことによって次元転移準備を整えようと画策したが、通信士からの答えは彼の望みを意図も容易く打ち砕いた。実はこの時点で日本国防軍艦隊は周辺宙域に強力なジャミングを掛けていた。これは既に管理局艦隊の調査の大半を終えたことを意味し、そして戦闘が最終局面を迎えている事を意味していた。

「くそっ!!!」

この状況はそんな言葉で表すにはまだ足りない。

彼らの前に立ちふさがる艦隊こそ、戦いの時をいまかいまかと待っていた連合艦隊、

片方は本防衛作戦に於いて先陣を任され、管理局次元航行艦隊所属艦3隻を撃沈という華々しい戦果を残した赤き戦闘艦艇群。

ガイア宇宙艦隊

そして連合艦隊の中核を成すは、

エイリス海軍艦隊

宇宙戦艦2隻、航空母艦1隻を含む大艦隊。

純白を基調として所々に金と優しいエメラルドグリーンをあしらった鎧を身に纏う美しき戦姫達。

彼女らの使命は管理局艦隊の逃走を阻止すること。

つまるとうさ、
“殲滅戦”である。

第十八話 『回廊防衛戦3』（後書き）

今回も読んでいただき有難う御座います。ちなみに戦闘自体は次で終えられるように予定しておりますので、それ以降はしばらく管理局内部での反応や国連各国（日本がメイン）の反応や大臣達の日常、戦争に向けた準備などを書いてみようかと思っております。・尤も、戦争が始まるのがかなり後になりそうなのですよね。その間をどうやって埋めましょうか・・・。

後、この戦闘が終わって落ち着いた頃にはには原作キャラも出してみたいと思っはいますが、やはり暫くはオリキャラがメインになるでしょうね。・・・いつかは旧6課のメンバーも出そうとは思っています。（と言うか、戦争が始まらないと惑星上での戦闘が起らない為、なのはさんを始めとした魔導師さん達の出番が無いのですよ。基本、艦隊戦なので。）

もう一つ戦争が始まるのが遅れそうな理由がありまして、戦時中になってもいいから新型艦とか新型戦闘機とか新兵器を投入できるように開発を進めておきたいと言うことと、既存の艦を魔改、改修しておきたいのですよ。他にも合同演習もしていですし。

等等、多くの理由に付き戦争が始まって旧6課の皆さんが登場、管理局との艦隊戦が起きるのは暫く先になりそうです。

以上、戦争が始まる事を前提に話を進めてしまいました。というかここまでの話の流れとして衝突が避けられそうに無いのは明白なのですがね。

後書きが長くなってしまい申し訳ありませんでした。ここまでこれ

からの予定を書いておいて任務中のデーニッツの事をすっかり忘れていたことは秘密です。

ご意見ご感想お待ちしております。

第十九話 『回廊防衛戦4』 (前書き)

今回は戦闘描写が少なめです。

中盤くらいから戦闘後の話に移ります。

第十九話 『回廊防衛戦4』

2160年11月3日・エイリス海軍艦隊旗艦・『ヴァンガード』級宇宙戦艦『レパルス』CIC

「全艦に通達、戦闘開始。敵艦隊を殲滅する。空母『イラストリアス』は艦載機を発艦させ、敵艦隊を挟撃、本艦隊は横陣のまま敵艦隊を迎撃、徐々に左翼を突出させ包囲する。」

本防衛作戦は 回廊への侵入を試みる管理局部隊の侵入阻止と管理局新鋭艦についての情報収集が主たる目的としているが、侵入阻止に次いで優先されるものとしてISAF艦艇の性能情報を管理局部隊に極力渡さないと言うものがあつた。故に国際連合、ISAFは魔導師の能力の情報が少ない中で魔導師を国内に入れるのは拙いと判断しあえて殲滅する事を指示したのだった。

エイリス将兵たちは誇り高き騎士として手負いの敵に止めを刺すことに目を顰めはしたが、これも国のためと割り切り、覚悟を決め眼前の管理局艦隊を消滅せしめんと宇宙空間を進んでいた。

「『了解です。』」

エイリス艦隊旗艦『レパルス』のCICに詰める将兵たちも、目の前に誘い出された傷だらけの敵艦隊に同情の念を禁じえないようだ

が任務は躊躇い無くこなしていく。司令もそれを体で感じながらも部下の士気を鼓舞し、自身も感情を捨てて任務を果たさねばならない。故に彼は言う。

「我らが王室海軍に敗北は許されぬ。全力を持って事に挑んで欲しい。」

ここに彼ら英国騎士達の戦闘が始まった。

时空管理局次元航行艦隊旗艦・XV級次元航行艦「ノーチラス」艦橋

追い詰められたと言う言葉が艦隊の中に充滿している中、艦隊の最高責任者であるセドリックはこの状況を打破する為に先ほどの手を使って次元転移までの時間が稼げないかと提案した。

「アルカンシエルを斉射して先ほどのように時間は稼げないのか！？」

「申し訳ありませんが提督、それをした場合、アルカンシエルのチャージが間に合わないのに加えそちらにエネルギーを回すと次元転移が出来ません！！！」

部下はそう説明したが、実際にはもつと酷い状況であった。何と魔法障壁に回さなければいけないエネルギーまで節約しなければ次元転移さえ不可能になりそうだったのだ。迎撃さえ困難になりつつあると言いつのにアルカンシエルなどチャージすることも考えられなかった。

しかし、このまま手を拱いていても全滅するのは明白。何か手を打たなければ詰んでしまう事はセドリックでなくとも分かっていたのだが、どうしようもなかった。

「何てことだ、一時後退するか？小惑星で動きが制限されるようになれば一矢報いることもできるかも・・・いや、まずは時間を稼がないと・・・でもどうやって?・・・」

追い詰められ思考の迷路に陥ってしまったセドリックだったが、幸か不幸か彼を救ったのは非情な現実であった。

「提督！本艦隊両舷より多数のレーダー反応あり、距離50000、数40機、速力約800宇宙ノット！急速に接近中です！」

「またミサイルか!？」

「いえ、これは……………」

レーダー員はもう一度だけ確認して言った。

「これは……………航空機です！」

この言葉に驚いたのはセドリックだけではない。副官も通信員も含めて『ノーチラス』の艦橋に詰めていたスタッフの全てが理解することが出来なかった。

“通常空間で高速航行可能な戦闘機” そんな物は管理局の歴史上存在しなかったし、必要性の無さから開発が促進されることも無かった。故に彼らは困惑する。今まで戦ったことも無い敵と戦わなければいけないことに……………。宇宙空間に於いて航空戦力と言う存在との戦いが無かった管理局特有の弱点と言えたかもしれない。

「こいつ航空機だと！？……………いや、今はそんなことよりも迎撃を優先する！次元転移まで時間を稼げ！」

「了解しました！」

いち早く混乱から抜け出したのは以外にも艦隊司令のセドリックだった。彼は混乱の余りフリーズしている部下達を叱責し新たな指示を下した。艦橋スタッフ達もセドリックの指示に従い自らの役割をこなそうと努力していた。

否、そうすることによって現実から目を背けたかっただけというのが適当かもしれなかった。

「敵航空機からミサイル多数！数144発、速力約1300宇宙ノット、距離45000から急速接近中！」

「射程に入り次第、迎撃を開始しろ！」

「了解しました！」

彼らの動きは遅かったと言っしかない。それはレーダー性能の低さ、航空機の不保持、通信性能の低さからくる索敵能力の低さが原因と言え、これはセドリック達だけの責任とはいえないものであった。しかし、ISAFにとってそんな事は戦闘に於いて何の関係も無い。寧ろ好都合である。

これは管理局の今までの歴史が作り上げてきた魔導師中心の艦船設計思想に基づいて建造された“船”が、ISAFの通常空間に於ける艦隊戦を主眼に置いた設計思想に基づいて建造された“艦”に粉砕された瞬間であった。

「L級『レラジエ』被弾！艦首アルカンシエル使用不能！」

「ブロック2-1-Sに火災発生！隔壁を閉鎖します！」

「L級『ノウエイン』艦橋に直撃弾！．．．艦長以下、司令要員は殉職した模様．．．。」

通信員が伝える艦隊の惨状、それは艦隊が艦隊としての運用が既に不可能となりつつある事を告げていた。

ジャミングによる僚艦との通信不能、相次ぐ被弾による魔法障壁の限界、これらを考慮すれば今の所、被害が軽微な『ノーチラス』も撃沈は時間の問題と言ったことが分かる。

「このままでは．．．まずい。」

誰が見てもそう言うに決まっている様な状況であった。これでは副官が言うような撤退も出来たものではない。しかもう打つ手は無

かった。

「提督！本艦隊天頂方向から敵航空機隊接近中！．．．ああ、ミサイルが発射されました。」

ああ、この報告にも慣れたな。等と思い始めたセドリックは自分が疲れてきたのかと錯覚しながらも先ほどと同じ指示を下す。

やれることは限られているのだから、それを全力を持って遂行するしかない。セドリックはこの戦闘の中で少しずつではあるが成長しているようだった。

「迎撃は間に合わん！回避しろ！」

艦の操艦をまかされる男が指示に従い全力で『ノーチラス』を退避行動へと移す。それによって働く慣性がセドリック達を大きく揺さぶった。しかし、敵の攻撃に対して退避行動が取れたのは『ノーチラス』を入れても数隻程度であった。

「XV級『ノーム』艦橋、魔導炉に直撃弾！魔導炉が暴走状態に陥りました！」

「『ノーム』の近くにいる艦を直ぐにはなれさせなさい！！！」

「りよつ了解!!」

しかし通信が通じるはずもなく、『ノーム』の魔導炉は暴走、炉のコントロールから開放されたエネルギーの本流は船体を切り刻み、果ては周りの空間ごと『ノーム』を切り取ってしまった。それによって生まれた次元断層からの衝撃波は破壊の波となって管理局艦隊に襲い掛かる。

「『ノーム』の爆発の影響でL級『レラジエ』の左舷武装が全損！」

「L級『レラジエ』の火災が収まりません!どうやら退艦命令がだされたようです！」

『レラジエ』の艦長の判断は賢明だといったかったが、この状況では捕虜に当然、否、無事に退艦出来るかどうかも怪しい。ともかく自分達に出来ることは健闘を祈ることばかりだった。

「この状況で退艦したところで回収はできんが・・・無事を祈る！」

「副長!損害状況と次元転移準備の経過は？」

「艦隊6隻中、大破3隻、中破1隻、小破2隻です。次元転移可能まで残り4分です。」

「その前に全滅しそうな勢いだ。」

「確かにまずいですね。」

遅い。その一言に尽きる。艦のコンピュータを一部、迎撃や効率的な魔法障壁の展開の為に使用している為、次元転移の際の座標計算にいつも以上に時間がかかってしまうのは仕方が無いことだと言う事は分かっているが、それでも納得しがたいものがあった。

セドリックは最悪の事態に備える覚悟が出来たのか、現状取りうる最善の策と思しき案を口にした。

「状況がこれ以上酷くなる様だったら乱数設定で次元転移するぞ。」

これは先に副官が唱えた案であったが、まさか副官も自らが冗談半分で口にした案が採用されるまで事態が悪化するとは思ってもいなかったが、目の前の惨状を目にすればそれも納得であった。

「本艦だけで逃走すると言う事ですか？」

しかし、一応の確認はしなければいけない。発案者だからこそ分かる。この状況でその策を採ると言う事が以下に残酷なものであるか。

しかし、セドリックは言う。

「逃走になればいいな。最悪、あの敵艦隊のど真ん中に転移したり、虚数空間に放り出されるかもしれんのだからな。」

「・・・そうならない事を祈るばかりです。」

分かった。この人は本気だ。

副官は覚悟を決めた。

「提督！敵艦隊からの砲撃です！」

「この距離でか、すさまじい射程だ。」

「ええ、アルカンシエルの射程を優に超えています。」

自身の艦の射程を大きく超えていても対して驚いた様子を見せない二人は、眼前の敵よりも安全に転移が出来る状況を作ることに躍起になっていた。乱数設定での次元転移の最終決定はセドリックがするため、判断が下されていない今は座標計算を続けるしかないのだ。しかし、ただ単に計算を続けていては危険極まりない。そこで二人は味方艦の残骸を盾にする事によって少しでも敵の攻撃から身を守る事を思いついたのだった。

「とりあえずは被害を抑えねばな、操舵手、艦隊を後退させる。味方艦の残骸を盾にしつつ後退せよ。無理だと思いが通信で味方艦にも知らせておくように。」

「わかりました。」

しかし次元転移可能まで残り2分に届くかと言うところで状況は一変した。レーダーが後方から高速で接近する多数の影を捉えたのである。

「提督！後方から接近する飛翔体多数、数24、速力約800宇宙ノット！！」

「天頂方向、天蓋方向より多数の飛翔体を確認、数40、先ほどの艦隊の第3波攻撃と思われませす。速力約800宇宙ノット！」

「・・・詰んだな。」

彼らには分かっていた。この画面に映る影が何なのか。

「恐らく後方の航空機隊は先ほど進路を封鎖して時間稼ぎをした艦隊から飛んできたものでしょう。とすると、艦隊もしばらくたてば到着してしまうと言うことですね。」

その通り、新たな艦影は先ほど管理局艦隊のアルカンシエル斉射による空間歪曲に進路を一時塞がれたバレンタイン艦隊であった。これで前方の艦隊16隻に加え、後方のバレンタイン艦隊8隻で計24隻となった

「彼我の戦力差3：24か、どうしようもないな。」

「・・・では提督。」

「残り1分と少しだがそれより前にミサイルが到達するだろう。ならば、・・・総員に通告！これより本艦は乱数設定での次元転移を行う。どこにでるかには運しただが責任は私が取る。どうか自分の命まで諦めないでくれ！！」

セドリックは緊迫した面持ちでそう言ったが、この段階に於いて

『ノーチラス』のスタッフの中でなおも敵艦隊に抗戦しようとしているスタッフは存在してはいなかった。寧ろセドリックがそう言わなければ如何し様か考えあぐねていたのだった。

「味方艦への通達は不要！本艦の離脱のみを最優先とせよ！！」

副官も司令の言葉を補足するように続く。彼女もこの期に及んで味方のことなど考えている余裕は無かった。

「次元転移開始！」

「次元転移開始します！！」

（すまない、みんな・・・。）

橋
時空管理局次元航行部隊・XV級次元航行艦『チエレスタ』艦

「『ノーチラス』が次元転移を始めました!!」

通信機器が使えないと入っても僚艦の動きくらいは見ていれば分かる。明らかに旗艦の『ノーチラス』は次元転移している。しかし座標計算にはそれなりの時間がかかるはず、つまり彼らはそれを無視して乱数設定で次元転移をしたと言うことだ。ならば、

「連中、乱数設定で新世界にダイブか．．．なら我々も上司に倣うとしよう。魔導炉最大出力！乱数設定でこの世界から脱出する!!」

自分達も同じ事をしても言いと言うことだ。指揮官不在の状況ならば各艦自由行動であり、その場合の指揮官は各艦の艦長が就くことになる。つまり『チエスタ』艦長であるアデルがこの場の最高責任者となるのだ。故にスタッフは彼に従わなければならない。

「了解しました提督、どこまでも一緒にさせていただきます!!」

「提督！『デユランダル』が．．．!!」

「無視しろ！もう手遅れだ!!」

今まで座標計算を続けていたコンピュータが乱数設定を完了し、次元転移の準備を開始する。その時、艦橋中央に投影されている空間

ディスプレイに眩い閃光が走った。この宙域に残っていた2隻の内の一隻、XV級『デュランダル』の爆沈した瞬間である。これでこの宙域に残る管理局の次元航行艦は『チェレスタ』のみとなってしまうのだ。

アデルを始めとしたスタッフ達がこれ以上ないというほど焦り始めた頃に艦のコンピュータが『チェレスタ』が次元転移可能な状態になった事を告げる。アデルはすぐさま次元転移を指示する。

「次元転移、開始します!!!」

この言葉と共に最後のXV級次元航行艦『チェレスタ』は行き先を失った迷子となって次元空間に吸い込まれていく。アデルは目の前の光景を不安に思いながらもひたすら祈った。

(お願いだから虚数空間なんかには出るなよ!!!)

「消えた、か。」

ここは宇宙基地『ルナ』、戦闘に参加していた艦隊からの報告を受けて管理局艦隊の壊滅と2隻の敵艦を逃したことを知ることになった。ISAFの戦力をごく一部とはいえ相手に渡してしまうのは痛い所ではあったが、中々の戦果である。

『ルナ』の司令と副司令の二人は逃げたと思われる管理局の2隻について話し合っていた。

「はい、かなり高度なワープを行った模様です。日本艦隊が強力なジャミングを周辺宙域一帯に発生させていた為、恐らく転移した敵艦2隻は別々の場所に転移したのではないかと。」

「だろうな。追い詰められてどうしようもなくなったから生き残れる可能性があるほうに賭けたと言った所か。降伏を勧告できればよかつたんだがな。」

サイモンの予想はまさにその通りであった。

「国連総長、ISAF長官直々に殲滅の命令が下りていましたからね。魔導師の情報がまだそろっていない段階で彼らに我々の情報を必要以上に渡すのを避けたかつたんでしょう。」

副司令の言葉も事実であり、国連各国（特に日本）は自分たちの国家規模や各種情報が魔導師に知られる事を恐れていた。仮に何重ものシステムで魔導師を拘束しても転移魔法とやらで逃げられてはたまったものではない。それで最終的に管理局艦隊は殲滅するよう指示が出ていたのだった。

サイモンは笑いながらこう言った。

「その下らん判断のおかげで我らの敵はこうして逃げ延びることが出来たわけか。全く、我々の上官はお優しいな。」

「ええ、そうですね。」

「・・・・・・・・・・。」

こいつ、俺の話し聞く気なくね？とサイモンが思い始めた時、レーダーに艦影が現れた。IFFの照合も終わり、全艦が味方艦を表す青で示されている。

「・・・・と、司令、各国の艦隊が続々と戻ってきていますよ。労を労っては如何ですか？」

「戻ってきたと言っても一番の功労者である日本艦隊は戻ってきていないしな。それにエイリス今回特に出番が無かっただろう。労を労うのならばそれは日本艦隊とガイア艦隊に対してじゃないか？」

サイモンはかなり不服そうに言った。実際はバレンタイン艦隊にも小破した艦が少数ではあるが存在していたり、エイリス艦隊も艦載機の一部が損傷状態になりつつも管理局部隊の残敵の大半を撃沈していてそれなりに貢献しているのだが……。

「まあまあ、そう仰らずに」

そう副司令にしつこく迫られたサイモンはセンター内の通信員に各艦隊に電文を送るよう指示した。

「面倒な事この上ないが、仕方が無い。適当に書くか……。」

ちなみにこの時点で疲れきっているサイモンの頭の中にはこれから待つ国連への詳細報告や、大量の業務の事などこれっぽっちも入ってはいなかった。

日本国防宇宙軍・『ルナ』派遣部隊旗艦・巡洋艦『金剛』CI

C

『司令、宇宙基地『ルナ』司令のサイモン氏から感謝の言葉が寄せられています。』

「そうか、．．．返答はいらん。先方もそんなもの望んでいないだろうしね。」

暗いCICに若い男女が二人、男の方は今回の防衛戦での情報収集任務部隊の旗艦『金剛』の艦長であった。

『かしこまりました。それでは引き続き私は哨戒任務を続行します。司令もお体には気をつけてください。』

そして上司を労わる優しい彼女は、

「分かった、もう暫くしたら私も休憩を入れるよ。それでいいかな？ “金剛”。」

『はい。』

そう、日本国防軍特有の装備、管制用自律AIの一人、金剛であった。

日本におけるAIの歴史はとても長い。それは転移前まで遡る物であった。そして日本におけるAI技術は転移後に急速に拡大する勢力圏と、それに対応できない人口の問題を解決する為に急成長したのである。ロボットの性能向上、艦の運用の効率化、それ以外にも様々な恩恵を齎した。

特に軍におけるAI技術の活用は目覚ましいものがあり、国防4軍の保有するほぼ全てのユニットにはレベルの差はあれどAIが搭載されている。

技術者の夢だったのかロマンだったのかは分からないが、国防陸軍の司令ユニットや国防海軍や国防宇宙軍に配備されている艦に搭載されている高度管制用AIはガイノイド形体で設計されており、学

習機能や、それによって成長する感情なども装備されている。加えて定期的なメンテナンスさえ行えば通常の間並みの130年程の耐用年数を誇る。これは管制用AIが単なる装備ではなく艦の将兵の一人として考えられるようになってきたからであった。

実際、開発者達や軍人達がAIに人間としての姿をとらせるよう希望したのもコミュニケーション能力の向上であった。それまでの管制用AIはコンピュータそのものであり、擬似的な感情もなく、耐用年数¹¹AIを搭載しているユニットの耐用年数だったのだ。もちろんこれは艦のAIであれば30〜50年でAIも廃棄処分される事を意味している。これが現場の熱い要望によって義体の開発、擬似的な感情表現能力の開発が進んで実用化してくるようになる管制用AIを廃棄する事が社会問題化し、結局は擬似的であるとはいえ感情を持たせた管制用AIには国家が生み出した責任を取るということで人権まで与えられるようになった。

〈閑話休題〉

「ところで、国連ではなく本国の方に報告するデータは揃っているか？」

『はい。ISAF各国艦艇の戦闘データですね。既にまとめています。』

「おつかれさま。」

そうなのだ、彼ら国防軍の任務は管理局新鋭艦の情報収集だけではなかった。防衛戦を通して各国艦艇の性能の詳細を調査することを日本政府から命令されていたのだ。もちろん各国ともに艦艇の性能を公表しているが、それは“公称”にすぎない。実際の戦闘能力を知る為にはやはり戦闘に居合わせて情報を収集することが一番なのだ。この点だけ見れば日本国首脳部は同盟国が開示した情報をあまり信用していないように見えるが実際はそんなことは無い。それは長年にわたって築き上げてきた友好関係の賜物であったといえるだろう。ただ単に信頼していないというだけの事なのだ。

尤も国連の中で最も軍事情報が信用されていないのが何を隠そう日本である事は篠原以下の閣僚達も認めている所である。

『ありがとうございます。しかしこれは私の存在意義ですから。．．．それに私に疲れるという事はありません。この体も義体ですし。』

「それでも君は日本政府によって人権も認められているし、何より僕らの仲間だ。心配ぐらいさせてくれ。．．．もうこんな時間が。一緒にお茶でもどうだい？金剛。」

宇宙に於いて時間と言うものは酷く分かりづらいものである。司令は腕時計で時間を確認すると席を立ち、金剛をお茶に誘った。（尤も、お茶といってもペットボトル、又は紙コップのお茶を談笑しながら立ち飲みするだけなのだ。．．．。）

『はい。一緒に一緒にさせていただきます。』

そう笑って司令の言葉に答える姿は人間と変わらない、可愛い女性そのものだった。

2160年11月4日・日本国・防衛省・大臣執務室

「以上が今回の防衛戦の流れになります。」

「・・・ご苦労様でした。下がっていいですよ。」

「失礼します。」

執務室から報告に来た職員が退室すると、今まで部屋を覆っていた堅い雰囲気が一掃され、一気に緩くなった感が否めない。

今部屋の中にいるのは3人の男女。一人はこの部屋の主である日本国防衛大臣の園宮 奏、そして後の二人は、

「．．．しかし大臣、これは逃げられたと見るべきでしょうか。」

現防衛副大臣、神代 雨音（26、女）と

「十中八九そう見るべきじゃね？」

現防衛大臣政務官、榊 武人（25、男）である。

「断定するのはまだ早いとは思いますが、統幕もその様に結論付けるようですね。かくいう私もその意見に賛成票を投じさせていただきます。」

今彼らが話しているのは派遣した部隊からの報告にあつた、逃走した2隻の敵艦についてであつた。

「しかし園宮大臣、これはまずいのでは？我々の戦力をごく一部とはいえ収集されてしまいましたよ？これで管理局の艦船の戦闘能力が向上したりしたら今後の戦略を練り直さねばなくなるのでは

「？」

「その可能性はありますが、開戦序盤で積極的に侵攻し防衛ラインを築くことに変わりはありません。どのみち第一ゲートだけで防衛することには無理があります。」

「それでも、このアルカンシエルとやらの威力は無視できんだろ。敵が数をそろえてこいつを斉射してきて空間歪曲を起こされたら幾ら俺らの艦船でも耐えられるかわからんぜ？それにこのデータの通りの攻撃力を持つんだったら、『ルナ』に直撃したらやばいだろ。」

榊はバレンタイン艦隊がアルカンシエルの斉射によって発生した空間歪曲のせいで、せまい小惑星群の中とはいえ一時行動不能になっていることを危惧して言った。中々に慎重な性格のようだが、副大臣の神代は正反対であった。

「しかしそれは炸裂するまで弾体そのものはただのエネルギーと言ふことですし、炸裂前に弾ごと消滅、または浅異層次元潜航すればいいんじゃないですか？映像を見た限り、ゲームの貯め撃ちよろしく撃つタイミングが丸わかりですし。」

例え方になにか引つ掛かるものがあるが、これも一つの意見である。どうやら彼女は榊と違って管理局の戦力を楽観的に見ているようだ。

「ついでに電子戦能力は絶望的に低く、艦底部の対空火器は皆無に等しく、さらには防護フィールドも装甲も紙つて・・・酷いなーこりゃ。」

言っている事は全て正しいのだが、段々と管理局を軽視し始めた二人を見て、園宮は諭すように言った。

「二人とも、敵を過小評価するのは禁物です。彼らも慣れない土地、慣れない敵に翻弄され本来の実力が発揮できなかっただけかもしれないかもしれません。」

「そう言って予算を確保するんですか？」

まさか突っ込まれるとは思っていなかったのか、園宮は神代を驚いた様子で見ると慌てて反論した。

「人聞きの悪い事を言うものではありません。私はこのデータだけで敵を判断するにはまだ早いと言っているだけです。けして圧倒的な勝利を得てしまったから財務の三國に予算をケチられるのではないかと等とは思ってもいません。」

「・・・私そこまで言っていないんですけど。」

後半はほぼ本音になっているような気がしなくもなかったが、神代は真剣な面持ちで反論された為、少し引いてしまっているようだ。

「ともかく私は閣僚懇で総理たちへの報告を済ませたら統幕長を始めとした関係者を集めて緊急会議を開きます。榊は政務官としての業務を続けてください。神代は会議の用意をしておいてください。統幕長やその他の方々には私から伝えておきます。任せましたよ。」

そう言うと園宮は書類を整えて出かける準備を始めた。当然、部下である二人も同じである。

「任せました。」

「俺いつもどおりじゃ〜ん。」

どうやら榊は自分にだけ特別な仕事が与えられなかった事が不服なようで、口を膨らませながら抗議してきた。園宮は少し困ったように溜息をつくと精一杯の笑顔で返す。

「榊さん！頑張ってください 私応援してますからね！」

「全く、園宮大臣にそこまで言われちゃ仕方がない。不肖この榊武人、全力を持って職務に当たらせていただく。」

榊は勤労意欲が刺激されたのか、いきなり元気になっている。初見であれば確実にドン引きするであろう不思議反応と言えるかもしれない。副大臣の神代はそんな光景を眺めて榊の煩さに辟易しながらも、その榊に毎度毎度のことながら親切に対応する上司を尊敬していた。

(うえー榊キモツ。渡橋お姉さまがいればこいつを抑えてくれるのに、ていうか何時もの事だけど園宮大臣、苦勞してるな。ああ、私が奏ちゃんの疲れを癒せたら……。そうか！榊を消せば奏ちゃん心の心勞も減るのか！！)

「よし！」

「……大臣、後ろから殺気を感じるんですけど……。」

「大丈夫ですか？……って雨音さん！？すごい満面の笑みなのになんか怖いですよ！？」

黒いオーラを全身から発しているように見える(園宮、榊視点)神代に若干引きながら、男二人は少しずつ距離をとりつつ説明を求めたが、彼女の返答は何の解決にもならなかった。

「大丈夫です！大臣に手は出しません！」

「俺仕事あるんで失礼します！」

「チツ、．．．あ！園宮大臣。私も準備を始めますのでこれで失礼します。」

「え？あ、はい。」

二人の部下がゲリラ豪雨のように部屋を退室して先ほどとは打って変わって静かになった執務室で一人、園宮は神代に追われているであろう榊に合掌しつつ疲れたように呟く。

「．．．渡橋さんがいればもう少し静かなんですがね．．．。今日はあの人視察に出かけていますし．．．連絡しておきますか。」

今日は仕事で不在のもう一人の部下を思い浮かべると久しぶりに、いなくなって初めて分かる大切さと言うものを身にしみて実感していた。

渡橋 織姫（29、女） もう一人の防衛政務官であると共に、先ほどのカオス空間に於けるブレイキ役。いわばお姉さんのポジションの人間であった。もちろん園宮も同じ役どころなのだがいかなせ

ん一人では対処できないのが神代と榊の恐ろしさと言つべきである。

「・・・悲鳴が聞こえた気がする。気のせいにしてしましようか。」

そんなこんなで国際連合加盟国中、最強を誇る日本国防軍の軍政を預かる4人は、今日も仲良く(?) 仕事に励むのだった。

第十九話 『回廊防衛戦4』（後書き）

後半の何だかよく分からない部分や途中にあつたAIの説明に関しては完全に作者の趣味や息抜きです。ご了承ください。

今回は防衛戦が終わつての各国の反応や管理局の反応、前に少し登場したクロノ君なども出るかもしれません。デーニツツさんの管理世界偵察任務はもう少し後にしようと考えています。

今回も読んでくださった方には本当に感謝しております。先日ひさしぶりにアクセス数を見てみたらPVが10万を超えておりまして、本当に吃惊しました。これも皆様のおかげでございます。今後ともよろしくお願いいたします。

ご意見ご感想、誤字報告などありましたらよろしくお願いいたします。

第二十話 『暗雲到来』（前書き）

さて、誰にとつての暗雲でしょうか？未だに夏季休業の課題が終了していない私にとつての暗雲でしょうか。ええ、恐らくその通りです。

そんな事はさておき、最近は定期的に更新する事が出来て個人的には満足なのですが、しばらく家の事情で更新が滞ります。ご了承ください。

第二十話 『暗雲到来』

2160年11月4日・日本国・首相官邸

「つまり今の所、我々の予想に無かった事案は無いという事ね。」

「まあ、大方予想通りつてとこだな。」

総理大臣以下全ての閣僚が集められ、国家や国際情勢の現状を話し合う閣僚懇談会。現在ここではマスコミに洩れれば確実に野党等から叩かれそうな力オス空間が出来ていた。

「でもでも、管理局も私たちの当初の予測よりは善戦してるよね（笑）。最初は情報収集がすんだら一分もたないって言ってたじゃない。」

「全く、皆さん楽観的すぎやしませんか？少ないとはいえ我々の同盟国艦隊にも被害は出ているのですよ？それに対外的には情報収集任務を完璧に達成したとして評価されていますが、国内世論からはその・・・国防軍の・・・任務内容がですね・・・」

「冬杜総務相、まさか国防軍が活躍しなかったとでもいいたいのですか？今回は浅異層次元潜航状態での情報収集という裏方に徹する

ことが出来たからこそ、秘密裏に同盟各国の艦艇性能の実際値を収集することが出来たのです。寧ろ感謝するべきです。そもそも我が国は自衛隊の時代から地味仕事中心だったんですから。」

「哀愁漂つセリフだな。」

「まあまあ皆さん、少しは自重してください。これでは何時までたつても閣僚懇が終わりませんよ？ほら総理も面白がつて煽らないで。副総理も傍観してないで止めて下さい。ああ、三國君、君も年長者として彼らを抑えなさい。」

（星野外相、心中お察ししますよ。もちろん私はこんなカオス空間に介入はしません。）

そんなこんなで閣僚懇に参加する人間達（主に若手）のテンションがおかしな方向に向かおうとしているのを見て、この場に於ける最高権力者の篠原はそろそろ頃合とでも思ったのか皆に自制を求める。

「さて、そろそろ話しを進めないと収拾が付かなくなってくるわね。じゃあ。」

「後30分で終わらせましょう。」

一瞬にして会議室の空気が変わる。

何故か？

何故ならこの場にいた閣僚達は良くも悪くも職務に忠実だった。彼らは国益を最優先として自らの職責を全うし、部下にもそれに倣わせる。そして何より“上”の指示に忠実だった。理由は基本的に日本国の総理大臣は政治の体系が変わってからは優秀な人間が就くようになってきている点にあるだろう。

それによって政権は長期政権となる事が増え、現内閣も12年ほど続いた政権を継いでいる。これは長である内閣総理大臣の優秀さが国民の支持を集める事もそうだが、最大の理由は内閣に於ける意見の一致である。総理大臣はその人事権を持って自らに近く優秀な者の中から適材適所で選抜する。

そうすることで総理は大臣のコントローラーが容易になり、大臣達も総理の指示に従って国家の為、好きな職務に尽力すればいい。技術の異常は発達によって知識の差が無くなり、才能、知能、人間性等で人を量るようになった特殊な国家、日本。その様な国に於いて“カリスマ性”という特徴を持ったリーダーの存在は、良くも悪くも優秀な部下たちの統制を執るのに非常に適していたのだ。

「．．．．．よし。では皆さん。議題を次に移しましょう。本堂、勧めて。」

篠原は室内が静けさを取り戻したのを確認すると、副総理である本堂に話を進めさせた。

「かしこまりました。次の議題ですが、簡単に言えば今後の予定です。この度の防衛戦によって我々国際連合と時空管理局との前面衝突はほぼ確実となることが予想されます。つまり戦争状態に移行することが予想されるわけですが、これに伴い経済成長の減速や戦況によっては物資の戦時徴用なども想定されています。今日おこしの閣僚の皆様には各省の対応の進捗率などを報告していただきます。」

第一に答えたのは赤髪で髭を伸ばした清潔感が欠けているような男、財務大臣、三國 壮一（37、男）であった。今の日本国の驚異的な経済成長は彼がいたからこそとも言われるほど経済界や金融界への介入や手回しが巧みなことで知られている。

「では私から．．．財務相の三國です。戦争状態に突入した場合に政府としての支出はどうしても軍需の方に偏ってしまいます。防衛相の交渉もあって涼月や三菱その他の企業は非常時には利益を無

視して生産体制を構築すると言ってくれてはいますし、歳出に関してはかなり抑えられると思います。しかし、開発中の惑星の公共インフラ整備に予算をつけるのは難しくなっていくそうです。まあこれは他の省庁にも言える事なのですがね……。」

言っている事は正論なのだが、あたりまえというか一部の大臣達がざわめいた。彼らとしては有事とはいえ自分たちの予算が削られる事は面白くない。しかし、例外もいるにはいた。

「国交の神宮寺です。惑星開発の方は有事に備えて速いペースで進めていましたので、一時的に予算が削減されても計画通りに進めることが出来ると思います。もちろん時間制限はありますがね。」

「……どれくらいもちますか？」

「……自信満々で言っておいてなんですが、もって2年というところですか。それ以上は計画に支障が出てきます。」

国交省が進めてきた惑星開発、それは経済のみならず防衛にも関わる事から国交省のみならず経産省、防衛省、総務省など様々な省庁が開発に携わり、開発が計画よりも順調に進んでいた。そのため少々の予算削減でも短期間ならば計画通りに進める事が出来る。

しかし、全ての事業が余裕を持って進められている筈も無い。

「三國財務相？有事の際の予算削減は私たち文部科学省が推し進めている研究開発にも及ぶのかしら？」

「研究開発に関しては継続させなければ予算も時間も無駄となってしまうので引き続き継続させていきます。」

「となると、一番予算縮減の煽りを受けるのは国交、経産、農水に加え、私たち厚労省といったところかしら？」

「いえ、社会保障に関しては今までどおり継続できるよう予算を組みます、税収も大きくなっていきますからね。それに緊急時の為に色々と名前を変えて余剰しておいた金がかなり大量にありますからね。尤も、長期戦になれば直ぐに使いつぶしそうですけど・・・。」

ケチな性格をしている三國は普段であれば防衛予算などを削減させて国内への投資を行うのが好きなのだ、戦争と言つ非常事態にまでそれを続けるつもりは無かった。しかし、社会保障は別である。保障を疎かにする余り後に取り返しのつかない問題に発生して無駄に予算を取られるのを恐れたのである。

この時点で現内閣は着実に戦争準備を整えてはいたが、軍事予算を国民生活を圧迫させるまでに増額させようとは微塵も考えていなかった。そのため国民生活に直接関わる物にはしっかりと予算が配分

されていた。

加えて言えばタイミングも良かったのであろう。

「経産省としても問題は無い。ちょうどエネルギー計画の第3段階が完了間近で次の方針を検討していたところだからな。今のフェーズが完了すればこちらとしては長期間、次期エネルギー計画を検討できて寧ろありがたいだ。」

各大臣達が報告を行っているのを見て、今回の戦争準備に最も係わりの深い二人は自身の重責を再認識していた。

「この話を聞いていると、我々の役目がかなり日本経済に大きな影響を与えることを再認識してしまいますね。」

「それは我々外務省も同じですよ。最終的に戦争を終了させるのは我々なんですから。．．いや、本来ならばこの様な事態にならないうちに最善を尽くせればよかったですね。」

顔を曇らせながら言うこの二人、いつのまにか大臣たちの報告も終わっていた。

自嘲気味に呟く星野の言葉を聞いた篠原は、二人の言葉に理解を示

しつづ日本国総理大臣としてこの戦争への意気込みを語った。

「そうね、園宮防衛相の言う通り、この戦鬪に勝たなければ私たち日本人が転移以降必死に築きあげてきた経済圏、技術が脅かされてしまう。だからこそ我々は勝たなければならない。これが最初から侵略戦争ならば勝利に固執しなくてもいいのだけれども、これは明らかに防衛戦争。故に我々に負けは許されない。仮に戦いの中で相手の惑星を消し去ることになったとしても我々はこの国の為に決断しなければならぬのよ。」

“消し去る” それは自分達がとれる最後の手段。人道、倫理、全てを無視した最悪の手段。それすら否定しない篠原を見て園宮、星野の二人は気持ちも新たに戦争の早期終結を誓う。

「分かっております。我々防衛省、国防軍の総力を挙げて国家防衛の任、果たさせていただきます。」

「我々外務省も出来る限り早期に戦争を終結させられるよう尽力いたします。」

全閣僚たちが、来るべき戦争を不安に思う。自らの国家の為、国民の為の防衛戦争とはいえ国民への負担も大きくなってしまふ。

それに申し訳なさを感じつつ、日本国の存続と繁栄の為に力を尽く

す。

そんな闘志を目に光らせながら静寂を保つ閣僚達を見てこの場の進行役である本堂は議題をまとめる。

「・・・戦時体制への移行については特に問題は無いことが分かりました。とりあえずは本格的に戦争状態に移行する前に戦時体制の構築を完了させることが最優先となりますね。」

「ええ、まずは時間稼ぎね。星野外相、パイプがない管理局とは交渉が出来ないけれども同盟各国が暴走しないように呼びかけを行ってくれますか？」

「かしこまりました。直ぐにその様にいたします。」

「・・・では次の議題に移りましょう。次の議題ですが

30分後・同所

「それではこれにて本日の閣僚懇を終了させていただきます。」

その言葉を合図に会議室内の閣僚達が続々と部屋を出て行く。しかしそんな中で憂鬱そうに天井を見上げる男がいた。

財務大臣、三國 壮一である。

「．．．戦争か。」

「お疲れみたいだね三國財務相？」

そう言うて彼に近づくのは現法務大臣、阿万音 調（24、女）。
検察改革や司法行政の改善などにその手腕を発揮している彼女は今回の予算縮減の煽りをあまり受けない立場である為、今回の閣僚懇も気楽に過ごしていた。

「疲れているに決まっている。余剰金があるといつても本来それは研究開発が上手くいかなかったときや経済の挺入れの際に消費する予定だった。いわば保険だったんだ。それを戦争なんて下らない理由で消費するなんて散財以外の何物でもない。全く管理局とやらはいい迷惑だよ。」

「ははは、君がそこまで苛付いているのも中々お目にかかれないね。」

「貴方だつてこの戦争でいい思ひはしないでしようよ。阿万音法務相。」

「いい思ひも何も私はいつもいやな仕事をこなしてるんだよ？合法的に人を殺してるんだから。．．．考えてみれば国防軍も同じか。」

三國の言葉は阿万音が法務相としてではなく一人の人間としていい思ひはしないという意味であつたが、どうやら彼女は誤解してしまつたようである。

三國が自分たちの会話が噛み合っていないような気がし始めた時、会話に新たに参加する人間が現れた。

「こらこら阿万音法務相、物騒な事を言わないでもらえますか？」

「おや、奏じゃないか。お前も大変だな。」

お前も、と言つた所に若干の皮肉が籠められているような気がしなくも無かつたが、園宮は気にせず返す。

「確かに仕事量は格段に増えていますね。しかし、あなたもでしよっ？」

「その通り、まあ書類仕事なんて何時もうるさいマスコミ連中を相手にしなけりやならない篠原総理、松下幹事長や綾瀬官房長官たちにくらべればまだ仕事に集中できる分、幸せじゃないか。」

「ああ〜同感だね〜。」

「それには同意しますね。今回の防衛戦の公表に伴って一部マスコミや野党、市民団体が騒ぎ出してます。私の防衛省の前にもたむろして意味不明な要求を突きつけて来る位です。全く、なぜあの手の輩は何時までたっても絶滅しないのか不思議で仕方ないです。」

彼らが言っている事は事実で、今回のISAFと管理局との間に起こった戦闘は日本国民には良くも悪くも衝撃的に認識されてしまった。ISAF艦隊のワンサイドゲーム、それは未だに国内に存在する左翼団体や野党、人権保護を謳う団体からの非難の的となっていたのだ。

「そういうDNAを受け継いでしまったんだ、しょうがないだろう。親も子供を産む時にまともな大人になるよう遺伝子を弄くれればいいんだがな。」

彼は冗談のつもりで物騒な事を口にする。

しかし、世の中には冗談が伝わりにくい人間もいる事を彼は失念していた。

「ちょっと、そんなこと認めないわよ！」

いきなり怒鳴り込んできたのは現厚生労働大臣、椎名 瞳（15、女）。現内閣最年少の大臣である。医療改革や社会保障制度改革などでその手腕を発揮しており国民からの支持も厚い。

「あ！椎名厚生労働大臣だ。いたんですか。」

「ちっちゃいゆーな！」

「言ってますん。」

「しかし瞳厚労相、倫理に反することなど我々は昔からやってきているようなものではありませんか？今更という感が否めないのです。」

言うてはいけない事のように聞こえるが、オフレコの場合に於いては基本的に彼らは言いたい事を言っている。先の篠原の「惑星を消し去る」発言からもそれが理解できるだろう。彼らは内閣で意見が不

一致する事は嫌うが、個人の考えには比較的寛容なのだ。

しかし人体の健康や構造に精通した椎名にとって三國の発言は聞き逃せるものではなかった。

「確かに私たちは倫理は多少軽視している面が少なからずあることは否定しないけれども人間の脳そのものを改造するなんて危険が大きすぎる！やるとしても超長期計画でなければ安全は保障できないわ！」

椎名の強い主張に圧されたのか阿万音と園宮も考えを改める。

「．．．確かに、容姿に関しては人間の外殻や細胞の老化速度を弄るだけなのでそこまでその人がその人でなくなるといふ事はありませんでしたが、中身を弄るとなると各所から反対意見が来そうですね。三國さん、私もその意見には反対させていただきます。」

「私も反対かな。高度管制用AIに人権を持たせるのも苦勞したのに、今度は人を弄るなんて．．．それって人って言えるのかな？」

何時の間にやら自分が不利な状況にたたされていることに気付いた三國は、自分よりも年下の同僚達に言い訳をしようと思案するが、墓穴を掘ってしまう。

「．．．俺は冗談半分で言っただけなのに何でお前達は真剣に議論しているのが俺にはわからん。」

「冗談でも言っていていい事と言って悪い事があります!！」

椎名の剣幕に圧されたのか、三國はいきなりしおらしくなって謝罪した。

「はい、申し訳ありませんでした。」

「分かればいいのです。全く．．．。」

傍目からは少女が不良中年を説教していると言つまことに不思議な状況であるのだが、当人達は至って真面目に振舞っている。彼らにとって年齢などは些細な問題であり、見るべきはその人間の人格と能力のみなのである。

椎名は三國が前言を撤回したことに満足げな反応を示すと園宮に別れを言つて立ち去った。それを追うかのように阿万音も部屋を出て行く。彼女らとて何時までも談笑する事が出来る身ではない。

その場に残された男二人は退室する二人を見送ると、二人きりで話

し始める。

「．．．行ってしまわれましたね。」

「そういえば、奏？お前この後お仲間と会議があるとか言ってなかったか？」

「問題ありません。閣僚懇が予想よりも早く終わりましたので。」

「その言葉だけで俺達が如何の普段の閣僚懇での墮落っぷりが分かるってもんだ．．．ところで、お前この戦争どうやって運ぶつもりだ？」

財務大臣としては気になる所であろう。この戦争の経過如何によって日本国の未来が決まるのだ。

園宮は困ったように答える。

「私は軍政の長です。基本的には統幕や関係各所の優秀な方々がこなししてくれるでしょう。私は彼らが万全の状態で戦えるように備えをするだけです。後は、戦局を見守りつつ、と言った所ですかね？高みの見物を決め込んで給料だけでもらういいご身分と言っ奴です。」

「……………そうか。」

そう三國は納得したような様子を見せたが、何か引っかかっているようにもみえる。それが園宮には不審に思えた。

「？、何やら言いたい事があるようにお見受けいたしますが？」

園宮の問いに三國は少し考えると周りに人がいないのを確認して話し始める。

「ああ、俺が聞いたのと違うと思ってな。」

「それは興味深いですね。して、どのように聞いているのですか？」

三國は一呼吸置いて自分が聞いた噂を口にし始めた。

「今、優秀な方々といった現統幕に入れられた新人達、国防宇宙軍の新連合艦隊長官や若い提督たち、国防軍全体の世代交代やその他の改革を進めているのは表向きには人事部やベテラン将兵たちの意向といわれているが、実際は現防衛大臣であるおまえを筆頭とした政務3役が推し進めている、とな。」

「フフフツ、買い被り過ぎです。私にそんな力はありません。それは報道の通りベテランの将兵の皆さんが軍全体の若返りを望んでいる。それでいいではありませんか。」

園宮もやんわりと否定するが、三國にはそれが演技に思えて仕方が無い。．．．否、この時点で三國には園宮が嘘を言っている事を確信していた。

その為彼は園宮を少々追求してみることにした。

「．．．そんなに今の防衛省の上が嫌いか？」

園宮の表情が僅かではあるが硬いものへと変わっていく。

「．．．どういう意味でしょう？」

「言葉どおりだ。官僚組織なんてものは基本的に腐敗するもんだ。前内閣までの大臣達が進めてきた改革のおかげで組織としての膿を取り除く事に成功した省もあるにはあるが、防衛省はまだそこまですすんでいないだろう？中堅以下はまともだが、まだ老害達の排除はすすんではない。内憂外患つてところか？」

やれやれ、とでも言うように肩をすくめた園宮は、三國に自らの思惑をばらした。尤も、彼も三國が自分の事を追及し始めた時点で、目の前の男が全てではないにしる自分たちの思惑を知りえていると判断していたので、今更説明した所で支障は無いと思っていたが、。

「．．．今の事務次官はまともな方を就けることが出来たのです。後は残敵の掃討だけ。個人的な希望として管理局には後半年ほど攻めてくるのを待つて欲しい所です。そうすれば全ての備えが終わるのですから。」

「戦争のごたごたに乗じて職権を使い役立たずを切り捨てるか、．．．困った時には何時でも相談に乗ってやる。お前みたいな人間は馬鹿に狙われる事も多そうだな。」

「ありがとうございます。．．．あと、三國さんも人から恨まれる事は多々あるでしょう？困った時には何時でも相談してください。」

そう嫌味を言い合いながら二人は数分ほど自らの近況について話し合っていた。

「．．．そろそろ私は行かなければなりません。それでは失礼いたします。」

「おう！頑張ってきて。」

時空管理局本局・無限書庫

「どうしたんだい？クロノ。顔が真っ青だ。」

ここは時空管理局本局にある巨大データベース、通称『無限書庫』。その司書長を務めるユーノ・スクライアに管理局提督であり友人でもあるクロノ・ハラオウンは暗いムードを漂わせながら訪問していた。

彼は数十分前に同僚から聞いた衝撃の事実を伝えに来たのである。

「ああ、ユーノ聞いてくれ。実はな・・・」

クロノは先刻、同僚から聞いた話を事細かく、そして自身の予測なども織り交ぜつつ説明した。

数分ほどで説明は終わる。それを聞いたユーノは信じられないといった顔で、説明したクロノも彼にある意味予想通りの反応をされたのでそのまま話は進んだ。

「・・・派遣部隊全艦が消失!？」

「上層部は事故と言う事で済ますらしい。大方、最新鋭のXV級5隻が犯罪グループに屠られた等と公表したくないんだろう。」

「クロノは今回の件にその犯罪グループが関わっていると見てるのかい？」

その問いをクロノは周りに漂わせる憂鬱そうな雰囲気さらに強くさせながら否定する。

「・・・いや、もつと深刻に考えている。」

「・・・詳しく聞かせてもらおうか。場所を変えよう。」

ユーノもある程度は予想していたのか特に大きな反応を示す事は無かったが、周りに人がこないとも限らない為、人気の無い場所に移って話をするよう提案する。

その後二人は本局のバースに係留されているクロノの乗艦であるXV級次元航行艦『クラウディア』の艦長室まで移動し先ほどの話を

続けた。

ユーノは前に『チエレスタ』が第一ゲートに接近した時の件をクロノから聞いているためその部分の説明は省きつつ意見を交換する。

「エイリスとISAF、この二つの言葉が意味するのは何だろうね。彼らの所属する国家がエイリスと言う国と言う事は分かったけれども、ISAFというのはその国の軍隊なのかな。」

「・・・ユーノ、僕が第97管理外世界『地球』に実家があるのは知っているだろうか？」

「ああ、もちろん。そういうえば最近帰ってないんだって？」

そうこの男クロノ・ハラオウンは最近、この正体不明の艦隊やその後ろにあるであろう勢力の事を調べるのに熱中すぎて滅多に家に帰っていないと言うのだ。尤も、このていどで夫婦仲が悪くなるともおもえないが・・・。

等とユーノの思考が脱線しかけていたのだがクロノはスルーして続ける。

「あ、まあそれはともかくとして僕が実家にいる時はニユースやネ

ットであちらの国際情勢なども知る事があるんだ。」

「うんうん、それで？」

「地球にもISAFという組織があるんだ。尤もこちらは国際治安支援部隊の頭文字をとったものだけれどもね。これは簡単に言えば治安が悪い国に多国籍軍が常駐し、治安維持に努めると共に現地の治安維持部隊の能力向上を目的としているんだが。」

もちろんこの二つの同名組織が同じ目的で存在しているとは限らないけどね。とクロノは注釈を入れた。ユーノもそれを理解しつつもクロノの言いたい事を理解したようだ。

「要するに、彼らが言っているISAFと言う組織は国際組織であり、エイリス以外の国家も所属しているということかい？」

「仮説に過ぎないけどな。しかし、彼らが接触した時には8隻の艦隊。今回派遣した部隊は最新鋭のXV級を5隻もいれた9隻の艦隊、早々簡単に負けるとは思えない。」

楽観的な意見ではあったが情報が少ない今では当然の考えとも言えた。しかし、ユーノはそれを否定的に考えていたようで、現実的な意見を口にする。

「クロノの仮説を正しいとするんだったら『チエレスタ』がその艦隊に接触した時点で本国、又は同盟国からの増援が来るんじゃないかな。」

「それもそうだね。考えたくはないが恐らく派遣した部隊は万全の体制の艦隊に迎え撃たれて全滅したと考えるのが妥当だろう。」

二人の話も終わりに近づき、二人は話をやめてテーブルに置かれたお茶に口にする。

時間が経ちすぎて冷めてしまったお茶に顔を顰めつつも、冷静にこれからの事を予測する。

「もう一度派遣するのかい？」

ユーノが心配そうに言う。派遣した部隊がどのような事態に陥って行方が分からなくなってしまうのか、情報を集めなければならぬだろう。しかし、早々簡単に出来るわけではない。少なくともクロノはそう考えていた。

「今は無理だろう。本局の艦艇は治安維持で出払っているしXV級次元航行艦も大半は艦装中だったり公試の段階だ。そもそも万年人手不足の本局に動かせる船は無いよ。」

事実、管理局に所属する艦船のスケジュールはかなり立て込んでいた。それは管理局が管理する世界の広さや魔導師の不足などが挙げられるが、よくよく考えてみれば自業自得と言えるかもしれない。そもそも管理世界の管理や非常事態への対応を第一に考えれば魔法一辺倒の装備にするはずが無いのだが、それで長らく続いてきた管理局を批判するのも酷だろう。今回の派遣はたまたまスケジュールが合ったただけなのだ。

ユーノもクロノの苦労を理解しつつ、段々と暗いムードになるのを避けるため話題を変える。

「この前クロノに言われてエイリスって世界について調べただけで、全く資料が無かったよ。多分、今まで確認した事が無いんだと思う。」

はつきり言って事後報告で、内容は無いに等しかったがそれでもクロノにとってはありがたい。

「すまないな。手間をかけさせて。これからも新しい情報を得たら逐一報告に来るよ。ユーノにも調査を依頼していいかい？」

「お安い御用だよ。」

その後二人はお茶をしながら談笑し、それぞれの職場へと戻っていた。

第一管理世界『ミッドチルダ』・聖王教会

聖王教会― それは太古の昔、永き戦乱の世にあつたベル力を治め、神託を受けて民にそれを広めたことから始まつた聖王教の総本山。今では多くの使途を抱え管理世界最大の宗教組織である。

そんな現在では管理局への発言権も大きい聖王教会を率いる女性、カリム・グラシアは通常通りの職務に勤めていた。彼女は管理局にも籍を置き、その階級も少将と高待遇である。それに加えJS事件に於ける彼女の能力の有効性も相俟つて彼女の影響力も大きいものとなっている。

『プロフィール・シュリフテン 預言者の著書』、それが彼女の稀少能力。俗に言う未来予測に似たものである。これは『ミッドチルダ』の二つの月の位置関係から来る魔力作用によって発動するものであり、年に一回しか発動されない。しかも内容は古代ベルカ語で解釈によって様々な意味にとることが出来るため、本人曰くよく当たる占い程度の物らしい。

新暦76年も4分の1が過ぎ、彼女が設立に協力したJS事件に於

ける英雄的部隊である機動六課の解散も近い、事件への貢献もあつて教会の発言力を大きくする事にも繋がりますに順風満帆と言つた所であつた。

しかし彼女の能力はそれに水を注すかのように新たな預言を齎した。

「っえ！？一体これは何を意味して・・・と、とにかく書き写さないと！」

カリムは急いでペンを執ると預言をメモに走り書きする。

発動が終わるとカリムは走り書きで見づらいメモをもつ一度見やすいように書き写す。

清書を終えた彼女は心を落ち着ける為、深呼吸すると今書き写した預言を一読する。

『自らの正義を謳い誇りを掲げ、

新たな星海へと漕ぎ出さんとする法を守りし民達よ、

自浄無き進歩は破滅への歩みと相成る事を知るだろう。

歩みを止めねば法の世界は先駆者の手により虚無に帰す。

歩みを止めれば法の世界は安寧を迎える。

法を守りし民達よ、

自らの正義を問う事を知れ、

己が正義は真か偽りかを知れ

無知なる者達は漆黒の戦舟によって法の世界と共に永久の夜を迎えるだろう。』

「……ここまでか。」

彼女は考える。今までの経験としては預言の内容は吉凶が交互に、といった感がある。しかし近年は凶報続きに思えるのはどうしてだろうか。これはもう完全に管理局の体制そのものが呪われている様にすら思えてくる。

「法を守りし民達というのは私たちのこととして、自浄なき進歩？これは何を意味するのかしら。そして、」

「歩みを止めねば法の世界は虚無に帰す。そしてそれは先駆者の手によって。これは先駆者と言う存在によって管理世界が終わりを迎える事を意味している？それにこの漆黒の戦舟というのも気になる。．．．．．まずは提督やクロノ君に伝えないと。」

カリム・グラシア、その能力ゆえの受難はまだまだ終わりそうに無い。

第二十話 『暗雲到来』（後書き）

新たな原作キャラを出す事に成功しました。これから話が進むにつれて原作キャラの登場回数も増えていくと予想されます。なのはさんたちが出てくるのはまだ先になりそうですが……。

ちなみに開戦はかなり後になりそうです。ご了承ください、いろいろと準備も必要ですので……。

ご意見ご感想お待ちしております。

第二十一話 『会議・会談・観測』（前書き）

この作品は不定期更新です。．．．．．と前置きはしていましたがここまで遅れるとは思っていませんでした。この場を借りて謝罪させていただきます。本当に申し訳ありません。

家の都合で少々パソコン環境に恵まれなかった事と、学校があつて時間が取れなかったためです。．．．．．言い訳です。

これからはもう少し速いペースで更新できるように努力したいと思います。この度はお待たせしてしまい申し訳ありませんでした。

第二十一話 『会議・会談・観測』

2160年11月4日・日本国・防衛省

扉には鍵がかけられ、カーテンは閉め切られ、卓上の空間ディスプレイの明かりに照らされた会議室。

この場にいるのは10人の男女。

防衛省より防衛大臣園宮奏、同副大臣神代雨音の二人

統合幕僚監部より伊藤博孝、同副長永野佳澄

国防宇宙軍より宇宙軍司令長官兼連合艦隊司令長官東郷毅、同参謀長秋山敬一郎

国防陸軍より陸軍司令長官山下利古理、同参謀長今村斉

国家諜報局より局長イリーナ・明石・ラビナ、同副局長鈴原利光

日本国の防衛に携わる主要なメンバーの大半が集められていたと言

つていいだろう。軍政、軍令、情報のトップ達が一同に集められたこの会議の目的は一つ。

“対時空管理局戦争の基本初期戦略の確認”である。

細かく言えば先日が発生した第一ゲート周辺宙域での防衛戦、これの詳細報告や、各国艦艇の性能詳細、そして管理局新鋭艦『XV級』なる艦艇の情報。最後に、何時になるかは分からないが開戦時に於いて最優先課題とされる惑星『SS01（管理局名「第82管理世界クルミア」』と『SS02管理局名「第40無人世界アレサ」』の制圧作戦の最終確認である。

これは管理局本星との距離が大きいとは言っても相手が重点的に開発をした惑星であり、緻密な情報収集の基、陸宙両軍が一体となって行動する事が重要になる。そのためこの面々となった。

「それでは、我が国と管理局との武力衝突が本格的になると断定された場合の初期作戦について我々、諜報局と統幕よりご説明させていただきます。」

国家諜報局の局長である明石は卓上の空間ディスプレイに移る惑星『SS01』をポインターで指示しながら局が入手した情報を基に敵戦力の予測を説明していく。

「これが国防宇宙軍や我々国家諜報局所属艦が収集した惑星『SSO1』にある管理局の組織の位置と予想規模です。偵察機によると軌道上に偵察衛星と思われるものが8つ、常駐している管理局艦船はL級が2隻だけです。」

そう言うと彼女はコンソールを操作し惑星の立体像を消し、メルカトル図法の地図をテーブルに映し出した。無論これも立体になっており山脈などの形も判別する事が出来る。」

「そして、この赤い点で示された地点にあるのが管理局の地上施設です。『SSO1』には大規模な市街地などは存在せず地上施設の大半も観測基地、そこに勤める職員用の寮?などです。そして．．．

彼女はそう言った瞬間、地図上の赤い点の地点の一部に星のマークが映し出された。

「これらが統幕との協議の後、『SSO1』にある施設の中でも重要と思われる施設となります。」

- 1、次元航行艦ドック施設
- 2、『SSO1』観測司令基地
- 3、A～Gまでの通信基地

彼女はこれら3種の施設を可及的速やかに叩く事で『SSO1』に常駐する管理局部隊の無力化を提案する。しかし、ここで秋山が疑問を呈する。

「明石局長、その軌道にある警戒衛星に捉えられてしまったら相手に迎撃、又は撤退する時間を与えてしまう事になってしまうのでは？」

「あら、ありがとうございます秋山提督。あなたが質問しなければどう切り出したものか考えあぐねていましたの。ええ、もちろん対応策はあります。」

そう言うと彼女は地図を消して最初に出していた惑星立体図に戻す。しかし、そこには先ほどと違い警戒衛星の軌道と思われる線が描かれていた。この周期性を持って軌道を周回する衛星が何だと言うのだろうか。

「この警戒衛星による索敵体制には致命的な弱点があります。」

これはこれは、中々に衝撃的だ。

「彼らは観測基地が少ない森林部や大洋部に重点的に衛星による濃

密な警戒監視網を敷いています。これら警戒衛星は軌道を周回しつつ、自身のリーダーに捉えた不審な影を司令中枢である司令観測基地に伝えます。そしてこの基地が衛星のマザーであるとともにコントロールをになっており、各基地への通達もこの基地を通して行う事もわかっています。」

「そこからは私が説明します。」

統幕の永野佳澄が代わる。恐らくここからは具体的な作戦内容を説明するのだろう。明石も彼女と入れ替わるように席へ戻っていく。

「まず分かって欲しいのは今回の作戦は純粋な強襲揚陸作戦にして掃討戦であると言う事。これに情報収集や状態の保全是全く考慮する必要はありません。どのみち基地ごと輸送するのですから。」

「そして今回動員する部隊の規模は皆さんご存知かと思いますが、制圧用の強襲揚陸艦2隻、地上掃討用の戦艦4隻の大規模な打撃艦艇群です。容赦する必要も無ければすることもできません。思う存分に敵施設を粉碎してください。」

聞く人間によっては発狂しそうな発言であるが、この場にいる人間にそのような感覚の持ち主はいない。“敵を命令に従い排除する”それを実行するまでの事。いかに表現が過激であってもそんなことは些事と言つにもおこがましいほどどうでもいい事なのである

「この作戦に於いて優先的に攻撃しなければならない対象施設は先ほど諜報局の方から説明をしていただきました。それを踏まえて我々はこの様な作戦案を提案させていただきます。」

「まず第一段階として陸軍の普通科部隊が安全に降下できる状況にすることを目標とします。そのためには敵部隊の過半が常駐している二つの観測司令基地を艦砲射撃によって制圧し、敵の警戒衛星の機能を喪失していただきます。」

画面上で管理局の観測基地をあらわしていたものに次々に×がついていく。どうやら制圧のしるしらしい。

「その後、戦艦部隊を二つに分け一つは惑星上の各通信基地を破壊して各基地を孤立させ、もう一つは強襲揚陸艦からの惑星降下を支援していただきます。」

軌道上に浮かぶ艦隊を示す表示が動き出し、惑星に点在する基地へと次々に降下していく。

その後、数秒経つと制圧された基地には日章旗が立っていく。どうやらこれで任務は完了らしい。

「護衛担当の戦艦はそのまま警戒待機を続け、通信基地の破壊担当

の戦艦は軌道上に上がって警戒任務に就いてください。この間に巡洋艦、駆逐艦で構成された小規模部隊が敵の各観測基地を地上部隊を用いて各個撃破していただきます。」

室内が静寂に包まれる。

皆一様にこの作戦案に疑いの目を隠せない。

「・・・楽観的すぎやしませんか？」

「管理局の戦力予想は過去に回収した『エステリア』のデータを基にしています。」

「“時を翔ける船”か・・・。」

時を翔ける船、『エステリア』がそう呼ばれる事には理由がある。

日本が『エステリア』を回収したのは2060年、そして管理局を監視するようになってL級が登場するようになったのは2140年。とても大きすぎるタイムラグだ。もちろん同型艦を80年も建造し続けるなど聞いたことが無い。つまり『エステリア』は何らかの作用によって2100年代中期から2060年に飛ばされてきたと予想する事が出来る。

このことから「級次元航行艦『エステリア』は専ら関係者の間では“時を翔ける船”などと呼ばれるようになっていた。

閑話休題

「しかし興味深いですな。やってみる価値はあるかと。」

「陸軍としても艦砲射撃の後に降下するのであれば異論はありません。」

「弾薬費による財政的な負担は大きくなりますが、もともと惑星制圧戦は被害が大きくなるものです。そんな中で諜報局が、最大の利益を得ると共に出来る限り此方の損害を抑えようと考案してくれたのです。反故にするわけにもならないでしょう。」

「将兵の損耗が少なければ今後の作戦も立てやすくなりますからね。」

「どうやら反対意見は無い様である。尤も、これ以外に特に策があったわけでも無かったが・・・。」

「……………では本作戦案でよろしい方は挙手していただけますかな？」

「宇宙軍は賛成です。」

「陸軍も賛成です。」

「防衛省は皆様の判断にお任せします。」

満場一致といったところであろうか。

「では、賛成2、棄権1ということでしょうか？……………では我々日本国防軍が担当する惑星『SSO1』制圧は統幕より提出された作戦案で決定させていただきます。……………では、大臣？」

関係各所すべてが賛成と言つのは何やら出来レースじみたものを感じてしまうが、これは真正銘多数決の法則に則って決められた事なのである。

そして大臣であり閣僚の一人である園宮は、この実務者協議の結果を総理大臣に伝えるという責務を負っている。ある意味、最大の仕事かもしれない。

「はい。すぐに総理の承認を取り付けてきます。任せてください。」

「では本会議の議題が終了しましたのでこれにて解散とさせていただきます。ありがとうございます。」

続々と部屋を去るメンバー、彼らはいつになるか分からないが、そう遠くない時期に始まる戦争に身が引きしまる思いをしつつも活躍の場を与えられて表情はにこやかなものとなっている。

総理へ今日の決定をどう伝えようか悩みながら一人部屋に残っている、時の防衛大臣を除いて……。

「それで、これがその預言の内容なのだけれど……。」

「ああ、拝見させてもらおう。」

ここは『ミッドチルダ』の郊外にある聖王教会。

教会の騎士であり管理局にも籍を置くカリム・グラシアは、先日齎された預言を知人であり友人でもあるクロノ・ハラウンに伝えていた。

クロノはその内容に驚き憂鬱しながらも現状を確認する。

「これは……。カリム、三提督たちにはもう？」

「ええ、伝えたわ。御三方とも由々しき事態と捉えているみたい。」

「伝説の三提督」とは管理局を黎明期より支え続けてきた法務顧問相談役レオーネ・ファイルス、武装隊荣誉元帥ラルゴ・キール、本局統幕議長ミゼット・クローベルの三人。彼らは本局への影響力も強く最高評議会無き今では管理局の意志と言っても差支えなかった。

「内容が内容だけにな。これは機動六課を解散させるべきではないのかもしれないな。」

クロノは避けられない決定事項とはいえ若干の後悔の色が隠せない。

「今更過ぎるわ。彼女たちの今後の配属先も決まってしまったし、隊舎の引渡しも決まってる。この預言のような事がいつ起こるのかも分からない今、彼女達を引き止めるわけには行かないわ。」

「そうか．．．そうだな。それでカリム、君に伝えておきたい事があるんだ。」

「？」

クロノは沈痛な面持ちで先日ユーノに伝えた派遣調査の結果を説明した。

「　　と言つ訳なんだ。」

「先の調査部隊が正体不明国家の艦隊に全滅させられた!？」

「　　という可能性があるということだ。」

そうは言いつつもクロノも同じ考えであった。状況から見てそれ以外に無いだろうと。

そんな憂鬱そうなクロノを尻目にカリムはクロノから伝えられた内容を自らの預言と照らし合わせていた。

「そのエイリスという国家が先駆者？．．．でも白い艦だったということは漆黒の戦舟という預言には合致しない。けど、」

思考の迷路に入ってしまったが、情報が少なすぎて明確な答えは得られない。クロノはそんな彼女を見遣ると自らがユーノとで纏めた考えを述べた。

「カリム、ここからは僕の推測となってしまうんだが聞いてくれるかい？」

「え？ええ、いいわ。」

それから数分かそれ以上か、クロノの話はカリムの知識欲をかなり満たしたと言っていていいだろう。

未発見の回廊、正体不明の艦隊、管理局の技術を持ってしても可能か分からないシールド、それらはカリムにとって好奇心からくる探求欲を満たすに不足は無かった。

その中でも一つ、クロノが彼女に強調して伝えたものがある。

「多国籍軍？」

「管理世界に住んでいる人間には理解しがたいと思うが僕の実家がある『地球』には複数の国家が同じ目的の為に正規軍同士を協同させることがあるんだ。恐らく彼らが言うISAFというのも同じような組織なんじゃないかと僕達は考えている。」

「クロノが言うとおりだとするとその中に預言が示す戦舟を持つ組織がいる。．．．とはいえ情報が足り無すぎるわ。」

「ああ、現状では何も分かっていないに等しい。しかしそうは言っても調べられる状況にも無い。打つ手なしだ。せめて消えた部隊の一隻でもいいから帰還してくれればな．．．。」

それが叶わぬ望みであったとしてもクロノはそう言わずにいられたかった。

2160年12月前半・第一次時空管理局調査船団旗艦『ファルケナーゼ』・CIC

「デーニッツ提督、まもなく時空管理局本局です。」

「対水上・対空警戒を厳に、このまま低速航行で接近します。僚艦にも音通で知らせてください。その後、偵察行動が終了するまで無線を封止します。」

「了解です。」

暗い室内、ここはバレンタイン宇宙軍潜水艦隊旗艦『ファルケナー

ゼ』のCIC。

彼らは各管理世界や支局を偵察しつつ、ミッドチルダを観測し、遂に時空管理局本局へとたどり着いたのであった。

(もうすぐ、彼らの本拠地に・・・)

自然と高まる緊張感。ここでしくじるわけにはいかない、と彼女は自らの高ぶる胸に言い聞かせる。周りを見るとCICにつめている参謀を始めとしたクルー達も心なしか落ち着きが無い。

「航海参謀、干涉率を高め潜望鏡使用可能深度まで浮上してください。」

「了解しました。」

航海参謀は指示通りに艦を操る。

『ファルケナーゼ』が今いる世界と時空管理局『本局』のある世界。それらの世界の間にある壁を少しずつ少しずつ薄くしていく。

何の音も発する事はないが、代わりに未知の勢力の本拠地に対する

好奇心と不安が段々と増幅されていく。

航海参謀が作業の完了を伝える。それと共に『ファルケナーゼ』から潜望鏡が伸びて、今いる世界と向こうの世界とを繋ぐ。潜望鏡が捉える全周の視界はすぐさまコンピュータに記憶されると同時にCICのディスプレイに映し出される。

周りを航行する多数の次元航行艦、それらを取り巻く作業船、宇宙空間のような漆黒の世界ではなく若干のグラデーションを持つ異色の世界。

そんな中でも一際彼らの注意を引くものがあつた。

「・・・これが時空管理局『本局』、ですか・・・。」

「巨大だ・・・。」

「エイリスの『ハボクツク』や『ルナ』よりも大きいなんて・・・。」

「

「さすがにガイアの移民星よりは小さいですがね．．．。」

「あれは規模が違いすぎます。」

室内の各所から呟きが聞こえる。かく言う彼女も目の前の施設の巨大さには驚きを隠せない。技術畑出身の彼女としては是非とも詳細を知りたい所だろう。しかし、そう悠長に過ごしているわけにもいかない。

「映像は撮り終わりました。座標特定も完了。我々の任務は終了です。」

「ついでに通信を傍受して出来る限りの情報を集めたいところですが、引き際も肝心ですからね。帰還しましょう。僚艦にもそう伝えてください。」

「了解です。」

そう。引き際と言うものは重要だ。欲に駆られて行動をする事は指揮官として慎まなければならない。身を引き締めたデーニッツは艦隊に撤退を指示する。しかし、クルーの一言によって場の空気は再び緊迫したものへと一転する。

「提督、管理局中型艦1、速力20にて本艦隊に接近中。」

「．．．潜望鏡を見られたのでしょうか。まあ撃沈するわけにもいきませんしね。全艦停船、無音状態にて現宙域に待機。管理局艦が離れ次第第一分隊はAルート、第二分隊はBルートを使用して現宙域より離脱してください。」

「了解しました。．．．しかし司令、先の戦闘にて管理局艦がソナーを保有していない事は明らかになったのでは？」

「念のためです。」

「了解しました。お時間をとらせてしまい申し訳ありません。」

そうこうしている間にも管理局艦は刻々と『ファルケナーゼ』へと迫ってきている。

CICに再び漂う不安。ソナーマンの報告だけがいやに響いている。

一秒、一秒と過ぎていく時間。

デーニッツの頬にも汗が滴る。それを見た作戦参謀がタオルを差し出す。彼女は礼を言いつつも受け取らない。潜水艦乗りにとって敵の通過を潜航してただ待つというのはそれほどまでに緊張する時間なのだ。

何分経つただろうか、感覚が麻痺し始めた時、待ち望んでいた報告が来る。

「敵し級、本艦至近を航行中。 今通過しました。」

どうやら心配は杞憂だったようである。彼らは安堵すると同時にとてもない疲労感に襲われる。しかし彼らはそれらを振り払いながら任務に当たる。それはデーニッツとて同じであった。

「気付かれてはいなかったようですね．．．。警戒しつつ離脱してください。」

（これで私たちの任務は完了。今回集めた情報はバレンタイン、ひいてはISAF全体に役に立つ。これで我が国の発言力も増すと言った所でしょうか．．．。）

その様な考えにいたるあたり、彼女が目先の功績にとらわれずに大局を見通せる眼を持っている証かもしれない。

ともかく今回の調査は無事成功し、今後のISAFの戦略に大きく寄与するものとなる。

第二十一話 『会議・会談・観測』（後書き）

はい。時が進むのは早いものです。冒頭で11月の始めだったと言
うのに最後には12月に入っています。

クリスマス．．．東郷さんのお宅ぐらいしか祝う事は無いんじゃない
でしょうか。ええ、大臣達は年も変わると言うのに仕事の量が変
わるだけです（増える）。

今回は新兵器の開発状況や国連各国の状況を書きたいと思っております。
ます。

今回もお読みいただき有難う御座いました。ご意見ご感想お待ちしております。
ております。

第二十二話 『国務大臣達の日常1』（前書き）

投稿致しました。

今回も完全にインターバルなお話になります。

管理局の方々は出ません。

さて、なのはさん達はいつ登場させられるのか。不安になってまいりました。

第二十二話 『国務大臣達の日常1』

2160年12月15日・日本領・研究開発惑星「コクーン」・
第2兵器試験場

科学技術先進国日本の科学技術のフロントランナー、研究開発惑星「コクーン」。その中でも各軍需企業や防衛省所管の研究所が開発した航空機等の試験を行う第二兵器試験場、その巨大な敷地の一つを占有する研究室に防衛大臣園宮奏は訪れた。

「……………出来はどうですか？」

「……………。」

部屋の中でも最上位であろう少女に声をかける。しかし返事は無い。

聞こえてはいるはずなので無視しているようだ。

しかし園宮は動じない。

「いや、渡橋さんからの報告であらかた出来上がっているとお話でしたので。．．．今日が視察の日だって事は知ってますよね？」

「ああ、知っている。」

返事があったのが余程嬉しかったのか園宮の顔が晴れやかなものになっている。調子に乗ったのか口調も軽くなる。

「それは良かった。てっきり連絡が届いていないのかと思いましたよ。」

「それはともかく研究室の中では静かにしろ、と津波様は仰っております。」

「．．．っ！これは失礼しました。少々浮かれていたようです。」

園宮の話し相手、それは日本国の宇宙戦闘艦から航空機までなんでもござれの天才博士、平賀津波。．．．の猫、久重。

平賀は基本的に人と話す事は無く、会話は久重を通して行う。そのため人間が猫と話すと言う見る人によってはかなり力オスな光景が繰り広げられる。

尤もこの日本国ではそれほど不思議がられないのが不思議と言っべきなのかもしれないが。

「次から気をつけることだ、とのことです。」

「了承いたしました。肝に銘じておきます。．．．それで．．．」

園宮は困り顔で承諾すると平賀に自らの目的を伝える。

尤も平賀も園宮がアポをとってきた時点で何故彼がここに来たのかは知っているので特に必要も無いのだが。

「ああ、ついてこい。大体は仕上がっている。」

やけに自信ありげな様子で園宮を案内する平賀。

二人は部屋の奥にある専用扉から隣の部屋へと移る。

出迎えてくれた研究員に挨拶を済ませ、さらに部屋の奥へと進む二人。

そこに園宮の目的の物が鎮座していた。

「これが……。」

「ああ、次期主力艦上宇宙戦闘機『烈風』だ。」

二人の前に鎮座する大型戦闘機、『烈風』の試作機。それは国防宇宙軍主力戦闘機『疾風』の正式な後継機。

従来型よりも大型になってしまった代わりに新型高性能融合炉を搭載、武装量の向上、通信性能向上、索敵性能向上、ステルス性向上、運動性能向上、価格も高騰という何とも素晴らしいスペックを誇る。

それゆえ開発にも長い年月が費やされているのだが・・・。

「ここまで来るのに何年かかったでしょう。実際のところ疾風は旧式機から烈風までの繋ぎとして配備されましたからね。」

「性能目標が当時では高すぎたと言う所か。これで生産性を取り入れるのは困難を通り越して無謀と言うものだ。」

「新型エンジンの採用による速力向上目標が従来機の1.5倍、ステルス性を維持した状態での武器搭載能力が対艦ミサイル4発、短距離対空ミサイル4発、翼下ハードポイント分も加えると最大搭載量が対艦ミサイル6発、対空ミサイル12発ですからね。」

「それに加え戦闘機用のシールドシステムにハイレーザー二門だぞ。電力が足りるか何度不安に思った事か・・・と津波様は仰っております。」

平賀の表情に変わりはないが若干、不機嫌そうに見える。

園宮も最初は要求の高さに呆れたものだった。尤も当時は大臣などしてはいなかったが。

「研究中の相転移炉が実用化されたらその心配もしなくていいのかもしれないね。」

「ああ、あれが戦闘機につめるまでになるには最低でも4半世紀は必要だろう。なんせ研究が始まったばかりだからな。」

「4半世紀ですか、長いのか短いのか分かりませんね。」

「平均で1.5世紀を生きる我々にとってはそこまで長い時間ではないのかもしれないな。」

年寄りくさいですね。とは思っても言えない園宮だったが概ねその意見には同調する。

「かもしれません。．．．して？初飛行まではどれだけかかりますか？」

「初飛行だけなら年明けにできるだろう。尤もそれから実用化までどれだけかかるか分からんがな。」

「・・・戦争には間に合いそうにありませんか・・・。」

園宮は一人呟く。

もちろん平賀にも聞こえてはいるが、彼女も開戦のことが気にはなるが技術畑の自分には関係ないとも言いたげに聞こえない振りをする。

「ん？どうした。」

「いえいえ、しかし平賀博士、戦時になったら開発は急いでいただきますよ。疾風改が配備されつつあるとはいえ何時までも疾風で航空戦力を賄うのも無理があります。」

園宮が言う疾風改とはその名の通り疾風の改良型のことである。エンジン出力の向上により高速性、運動性の向上やレーダーの更新などが行われていた。尤も基本は疾風なのに変わりないが・・・。

「・・・・・・・・（ボソッ）」

「はい？」

「あ、ええと博士はこう仰っております。『誰に対して言っているんだ』と。．．．全く、上から目線で言うんだったら私を介してではなく御自分で仰ればいいのに．．．ほら、顔も少し真っ赤になってギャアアアアアア津波様！痛い痛い！そこを抓らないでー！」

「．．．大変ですね久重さん。」

そう言うと園宮は室内の数人に挨拶を済ませて部屋を出て行った。

数時間後・第一先進技術開発センター

「さてと、今日は彼女もここにいるはずでしたが．．．。」

『コクーン』臨海部にある巨大な施設、先進技術開発センター。ここは官民学問わず多数の研究所が軒を連ねていて、開発されるものも車両から工業用機械など機械系が多い。

ちなみに第二センターは医学や植物や食物の研究開発、動物の生態

研究、繁殖実験等、第三センターはプログラムやコンピュータ関連、その他のセンターも住み分けが行われており中にはオカルト的なものを扱っている所もあるとか。

その内の一つ、第一先進技術開発センターに園宮は二つ目の用事を済ませるために足を運んでいた。本来ならば護衛が居るのだが不思議な事にフラフラと歩いているうちに消えてしまったようだ。尤も、目的地は伝えているからいずれ合流するだろうが．．．不思議だ。

しかし、センターは園宮にとっては初めての場所であった為、目的の部屋の場所が分からなかった。そこで人に聞こうと試みたのだが。少々厄介な事になってしまった。

「あーこれは、園宮大臣！何かお困りですか？」

「え？あ、ああ、一条教授のいる所に行きたいのですが．．．。」

「私のご案内します！」

と道案内の人間を確保する事が出来たのはいいでしょう。しかしこの女性、どう見ても受付嬢である。仕事はいいのだろうかと疑問を禁じえない園宮であったが彼が気付かぬうちに周りに人が集まってくる。

「ちょ、ちょっと貴女ばかりずるいわよ。大臣！私のご案内いたしますから！」

「待ちなさい二人とも！貴女達には仕事があるでしょう？ここは私が行くわ！」

「あ、あの〜」

思わぬアプローチに困惑気味の園宮、あまり仕事以外で人との付き合いが無い彼だが現内閣の男性閣僚の中では5本の指に入る人気を持っている。

そんなことは露にも知らない彼としては今の状況は理解不能であり対処も不可能であった。しかし、救世主と言うものは遅れてやってくるものだった。

園宮にとっての救世主は女性陣の騒ぎを聞いて駆けつけてきた現場主任の男性、彼も状況に困惑しつつも人に揉まれそうになっている園宮を救出する。

「大臣、私でよろしければご案内させていただきますが・・・。」

「あ、宜しくお願いします。」

そう言うと男二人はもう手のつけられ無さそうになっている女性陣を尻目に足早にその場を後にした。

数分後。

「ここになります。」

「有難う御座います。」

数分後、目的の場所へ到達する事が出来た二人は扉の前で別れを告げた。

落ち着いたのある大人の雰囲気醸し出している受付主任を遠目で見遣りながら園宮は自らの周囲に居る大人たちと比較してしまう。

（私の周りに居る大人っぽい大人は………星野外相、神宮寺

国交相に・・・片手におさまってしまうのですか・・・。）

扉の前で一人空しそうな空気を形成している園宮は、しばらく通路を通りがかつた職員達の酒の肴となったそうな。

園宮は現実に戻ると意を決したのか扉の横にあるコンソールに専用コードを打ち込み眼球認証及び指紋認証を済ませる。

第一の扉を抜けた瞬間に閉まる第一の扉と目の前に現れる第二の扉こちらでも専用のコードを打ち込むとようやく部屋へと入る事が出来る。

部屋に入った瞬間に流れ出てくる冷氣と異臭、それはこの部屋の原因でもあるが主な理由はこの部屋の主にあった。

「失礼します。」

「あれ?・・・来たんだ。」

「お久しぶりと言うほどでもありませんがね。お疲れ様です一文

部科学大臣。」

「．．．ここでは博士と呼ぶように。」

「失礼しました一条博士。」

彼女の名前は一条次葉、日本国文部科学大臣にして日本のロボット工学の権威。といつても普段は大臣としての公務をこなしている為研究室に来ることは殆ど無いのだが．．．時折、この研究室に来て最低24時間以上は研究に没頭していた。

仕事自体は終わらせてあり、何かあっても副大臣である九条が対応し一条もすぐに戻れる．．．はずである為、特に問題は無いように聞こえる。しかし、彼女の健康状態、見栄えに対するマイナス要素は大きく。研究室に言って戻るたびに別人のような風貌になって帰ってくると言うのが常であった。

「それで？何の用？」

「篠原総理からの言伝を預かっております。「根を詰めすぎないよ」に。「とのことです。」

「心配するほどじゃない。」

「九条さんも心配されております。通常業務自体は終わっているので問題ありませんが、私から見ても今の貴女の健康状態は健康だとはとても言えない。最近では連絡すらまともに取っていないそうではありませんか。そろそろ帰ってもいいのではありませんか？」

「仕事は問題なくこなしてる。特に問題はないし健康状態だって悪くない。自分の事は自分が一番知ってる。そもそも貴方に言われる筋合いは無い。」

全く、頑固な人だと思いつつも園宮は上司からいざとなった時に使えといわれた切り札を切る。

「召還命令です。篠原総理からの。バレンタインのデーニッツ提督がお戻りになられましたから調査報告の確認と今後の予定を決定するそうです。．．．閣議で。」

「．．．．．。」

無言。それは了承とるのが最適だろう。特にこんな状況であれば。

しかし園宮はさらに追い討ちをかける。

「あと九条さんからもクリスマスには帰ってくるようにと嘆願されました。ここまでされて貴女を連れて帰れないとなると私の責任が問われてしまいます。」

身内の中でも最も近いポジションにたっている九条さんが寂しがっているという誇張を織り交ぜながら伝えれば。さすがに強情な彼女でも折れるだろうという彼の判断は正しかったと言えるだろう。

渋々ながらも一条は命令に従う事を承認した。

「・・・分かった、帰り支度は進めておく。」

「はい、総理からの追加の指示はここに置いておきますから後でお読みください。」

これさえ済めばもうこの星に用は無い。後は帰るだけとなる。

しかし園宮はさきほど「貴方に言われる筋合いは無い」と言われたのが癢に障ったのか少々彼女に復讐を試みってみることにした。

「では私は失礼させていただきます。．．あと、女性に対して失礼に当たると思わないでしょうかと思ったのですが一応伝えておきます。」

「．．．．．？」

「鏡を見れば寝不足が分かります。あと、若干ですが臭いますのでシャワーは浴びておいた方が宜しいかと．．周りの研究員の方々も気にしていますし、何より九条さんがこの場に居たら泣いてしまいますからね。」

「．．．な、な!？」

「それでは」

自分では気付いていなかったらしい、見ると周りの研究員達もクスクスと笑っている。

（自業自得ですよ。一条さん）

部屋を出た園宮は満足そうにセンターを歩いていく。思い人に素直になれない同僚達にやきもきしながらも、そんな文科省コンビの關係を楽しんでいる彼は存外Sなのかもしれない。

同日・ガイア社会主義共和国・人民会議場・第一会議室

「……やはりおかしい。」

「ん？どうしたゲーペ長官。」

上層部の人間だけで占められた予算編成などを議論する会議が終わり、会議室から続々と人が出て行く中、一人の女が書類を手に唸っていた。彼女の名はミール・ゲーペ警察庁長官である。

そんな彼女の呟きを聞き、歩みを止めたのはガイア社会主義共和国元帥のジュザン・ジューコフ。ガイアが完全な社会主義国家であったところから評価の高い軍人である。

「ジューコフ元帥、少々お時間をとらせてしまいますが構いませんか？」

「構わん。」

二人は場所を人気の無い所に変えると書類を広げて相談を始めた。

「先月期の決算報告ですが、当初予想していたものと合計額は変わっていないのですが異常に機材の補充や修理の要請が来ているらしいのです。それも特に先々月と比べて機材の破損が多かったわけでもないのに。これは本来ならば修繕しているはずの機材が修繕されていない事を意味しているのです。」

確かに書類に記載されている総経費に変わりはないが、先々月よりも機材の破損報告が格段に多くなっている。適切に予算が配分されているのならばこのようなことにはならないはずだ。

「．．．つまり、誰かが本来ならば修繕費にあてる予算を不正に使用している？」

「その可能性が高いと見ています。それに加えて高齢の公務員の中で前から黒い噂が耐えなかった人間が続々と退職させられているか

左遷されていて、本来ならば人件費が減るはずなのに総経費は変わっていないんです。」

確かに不自然である。ガイアは現在、改革の真つ最中であり旧体制時に黒い噂が耐えなかつた政治家や軍人、財界人なども肅清、もとい特権を剥奪されている。結果として一時的とはいえ国家中枢の人間が減っている今、人件費が小さくならないのはおかしいと言えないのである。

「．．．分かつた。私からも探りを入れてみる。私は軍内部の動きを探るとしよう。」

「私はまずカテーリン様にご報告しておきます。その後は．．．市場の動きでしょうか。予算を使って不正な取引を行っている場合もありますから。」

「．．．お互い大変だな。」

「もつづんざりです。」

国際連合加盟国中最も職務が過酷と言われるガイア社会主義共和国。その国の警察と軍のトップを務める二人に休みが訪れるのは当分先になりそうだ。

第二十二話 『国務大臣達の日常1』（後書き）

烈風、零戦の後継機として開発されながらも結局、日の目を見る事が出来なかった機体。

この世界に零戦はありませんが、何時か日本の次期主力戦闘機として登場していただく事になります。

最後のガイアのお二人の怪しいお話はまだ続けるつもりです。一体消えたお金は何処に行ったのか？

それは何時か明らかにしようと思います。

次回ですが、タイトルに1と書いてある事からお気づきの方も居ると思いますがまたまたインターバルのお話です。恐らくデーニッツさんの持ち帰ってきた情報を検証する事になるでしょうね。

ご意見ご感想お待ちしております。

第二十三話 『国務大臣達の日常2』（前書き）

お久しぶりです。

リアルの方で再試やら発表やら何やらで忙しかったもので執筆が遅くなりまして・・・本当に申し訳ありません。

ちなみに今回、タイトル詐欺です。大臣なんて冒頭にしか出ません。強引に2とかつけただけです。多分3もあります。

第二十三話 『國務大臣達の日常2』

2160年12月21日・エイリス連合王国・首都惑星「アルピオン」・首相官邸

ここは国際連合加盟国の一つエイリス連合王国の首都惑星中心部にある首相官邸の会議室。今日此処では閣僚達が集まって管理局に対する対策と国家の現状や世論を議論しあっていた。

「日本国政府からは出来る限り開戦を遅らせて欲しいとの要請が来ております。」

そう言うのはエイリスの外務大臣を務めるカニンガム卿。既に彼は日本国外相の星野から対管理局戦争の開戦時期を出来る限り遅らせて欲しいとの旨を受けており、加えてそれがなされない場合は日本からエイリスへの技術供与が滞る可能性があるとは半ば脅しじみた要請であった為になんとかして国防大臣を説得しなければならなかった。

しかし説得しなければいけないのは国防大臣だけではない。国内世論の変化を常に考えながら政策を行う閣僚たちにとっては自らのポストは技術供与よりも重要であった。

「そういうわけにはなりません。此方の国民感情だって日に日に悪

くなつていく一方なのです。現に管理局に対して防戦一方で何ら対策をとることが出来ていない政府に対する批判は増える一方なのですよ！」

「しかし各国との調整もある。ガイアなどは開戦そのものに消極的だし、国連で我が国に全面的に同調しているのはバレンタインのみだ。一応日本もISAFとしての派遣には賛成しているが如何せん開戦の理由が不十分ということだ。」

白熱する議論。一方は国内世論を重視し、もう一方は同盟国との関係を重視する。

カニングラムが言うように戦争を始めるにあたって分かりやすい大義名分を必要とする日本国や、国内事情もあつて積極的に参戦する事が出来ないガイアの二国は今回エイリスが示した開戦理由が理由として弱いと考えていた。

尤も国内事情を理由に参戦に消極的なガイアに対して日本が考えている事はある意味で国連加盟国中最も異常といえたかもしれない。

「なにを馬鹿な！？ISAFの重要拠点である『ルナ』の第一ゲートに対する攻撃、ISAF所属艦艇に対する攻撃！どれも相手から仕掛けてきています。どこが開戦理由に不十分なのですか！」

「落ち着きたまえ。彼らが言っているのはそれらの攻撃に対して此方が受けた被害が余りにも少なすぎて大した脅威として認識出来ないと言う事なのだ。…………我々は勝ちすぎたのだよ。」

これに閣僚達は驚きを隠せない。撃たれたら撃ち返す、そんなことは当たり前のことなのだ。それとも日本は殺されても生き返る事が出来るとでも言うのだろうか？

しかしそんな事を考えている余裕は無い。

「しかし、日本の国内報道は？」

「…………至って冷静に受け止めているらしい。いやそれどころか直接時空管理局と接触できた事で魔法技術への関心が高まったり、日本が過去に回収している『エステリア』の見学や並行世界論への関心も高まっていたりと若干のお祭り気分のような。」

もはや呆れて言葉も出ない。

沈黙が部屋を支配する中、どうにかして出た言葉は日本が転移前からよく言われた評価。

「・・・変態どもが・・・。」

である。

「フツ・・・今更何を。」

エイリス連合王国、国連加盟国の中でも政治力や外交力、諜報力に秀でた伝統ある王国は明日の戦のために今日の友と戦う。

ある意味で今の国際連合は内憂外患と言えなくもない状況であった。

同日・日本領・カタリナ星系宙域ポイントA - 16473

「第一航空艦隊、第一次攻撃隊全機発艦完了。敵艦隊に到達するま

で20分です。」

FICに響くオペレーターの報告

「第二戦闘艦隊、損害率13%。作戦に支障ありません。現在の予定行動を引き続き継続します。」

空間モニターに映る光点はIFFの指示通りに色分けしていく。

黒のキャンバスに描かれる青と赤の光点たちの軌跡、白い線となつて突き進むミサイルの嵐、艦隊と艦隊を、艦と艦を、艦と戦闘機を、戦闘機を戦闘機で結ぶ指揮通信ネットワークの繋がりはまるで魔方阵を思わせるほどに複雑なものとなっている。

「第一駆逐戦隊所属『百合』より敵後衛艦隊発見の報告。ポイントA-15220にて第一航空艦隊に向け速力30宇宙ノットにて航行中。規模、大型空母1、戦艦2、中型空母2、巡洋艦4、駆逐艦6の計15隻です。」

モニターに新たな光点が映し出される。それらは見事な輪形陣を描きつつ真つ直ぐに第一航空艦隊へと向かっているようだ。

「第三駆逐戦隊所属『蘭』との通信途絶。撃沈されたものと思われる

ます。」

報告とともに青の光点の一つが消え×がつく。ミサイルの痕跡が無かったようなので潜宙艦からの雷撃だろうか？

しかしこれだけの情報を一度に把握し管制を行うAIのスペックの高さには舌を巻くしかない。

「まもなく本艦隊は敵前衛艦隊との交戦領域に入ります。敵艦隊、速力、針路ともに変わらず。規模戦艦3、中型空母2、巡洋艦6、駆逐艦9、潜宙艦6の計26隻です。」

FICの緊張感も自然と高まっていく。これから『長門』を旗艦とした連合艦隊直属戦隊に加え山本率いる第一艦隊が敵前衛と交戦するのだ。興奮を抑え冷静にならなければいけない。

「・・・東郷長官、聞いての通りです。指示を。」

そう言うのは参謀長の秋山。長官である東郷の女房役とも言える彼は破天荒な性格の上司に振り回されつつも付き従う苦勞人として知られている。

そしてその部下に指示を促された上司はというと・・・

「分かった。．．．旗艦『長門』より全艦に通達。これより本艦隊は敵前衛艦隊と交戦状態に入る。規模もそこまで大きくは無い、それに加え敵攻撃機隊は第一航艦の航空機隊が受け持つ事になっている。思う存分戦ってくれ。」

戦闘が開始されてからというものの連合艦隊司令長官としての雰囲気醸し出しつつ威厳と風格を兼ね備えた正真正銘の総司令官としてそこに居た。

彼はその才能と能力を存分に揮いつつ艦隊を手足のように動かしていく。

「『千代田』『千歳』は直援機隊を出撃させる。艦隊はこのまま輪形陣で航行する。全艦戦闘準備開始。」

「総員配置につけ！」

「戦艦『長門』、機関出力上昇中。戦闘出力まで20秒。」

「全砲門、発射準備完了。」

「管制AI『長門』、これより艦隊ネットワークとの同期を始めます。」

管制AI『長門』は自身を中心とした指揮下の僚艦と情報を共有し、索敵、火器管制、航空機管制、電子支援、艦隊運動、通信等を一括して運用する。

通常では確実に出来ない様な事も管制AIを支援する量子コンピュータの圧倒的な演算能力によって可能となる。加えて高度に暗号化された通信回線や電文は敵への情報の露呈を防ぎ、なおかつ自身の情報戦能力の高さも相俟って敵に対する情報優勢を作り出せるのだ。

「戦艦『山城』戦闘準備完了。」

「巡洋艦『比叡』戦闘準備完了。」

オペレータからの報告によって艦隊がその牙を剥き出しにしていく様子が感じて取れる。

やがて全ての艦が戦闘準備を完了し第一艦隊と連合艦隊直属戦隊がその持ちつる武装の数々を迫り来る敵へとぶつける用意ができた。

「艦長、総員配置に就きました。」

「空母『千歳』、直援機隊の発艦を始めました。全機発艦完了まで3分です。」

艦隊所属の中型空母より多数の『疾風改』が発艦する。空母『千歳』は艦体上部のリニアカタパルト4基と両舷に上部甲板とは垂直に1基ずつ備え付けられたリニアカタパルトをフルに活用して艦載機を宙に上げることが出来る。

従って直援機隊が配置に着くまでそこまで時間はとらなかった。

東郷が次々に飛び立っていく艦載機群に見とれていると『長門』がよそ見をしていた事にたいする注意のつもりなのか若干強い口調で東郷に艦隊の状況を報告する。

「あと2分で敵艦隊との交戦領域に入ります。」

「・・・長官。」

秋山も東郷に命令を促す。

2分、直援機隊を宙に上げることには間に合い、防衛態勢も万全の

状態で敵を迎え撃つ形になりそうだ。

既に艦隊所属の各種戦闘艦は自らの持つ強力な武装システムを間合いに入った敵に対して使用することが出来ている。

後は敵が自分たちのエリアに入ってくるのを待つのみだ。

「長官、本艦隊は敵との交戦領域に入りました。」

既に準備は整っている。ならば言うべき事は一つだ。

「戦闘開始！！」

東郷の号令とともに艦隊はその力を持って邪魔者を粉碎すべく動き出す。

ミサイルのVLSが開放され砲塔は敵艦隊に向く。

レーダーは敵艦隊を捉えつつ新たな脅威を探し、ソナーは敵潜水艦を捕捉し続けながら対潜警戒を怠らない。

全ての準備が整い今まさに攻撃を開始しようとする時になって「長門」FICのオペレータが敵艦隊が自分達に対して先手をとった事を告げる。

「敵艦隊より高速飛翔体を確認。大きさから対艦ミサイルと思われる。数126、速力1500宇宙ノットで真っ直ぐ本艦隊に向かってきています。」

数126、纏まった数のミサイル攻撃である。しかし既に東郷たちの艦隊は直援機隊をあげており戦闘準備も整っている。

ならば特に大きな問題は無い。命じる事で全ては解決するのだ。

「全艦迎撃用意。」

「『長門』、VLS1番から6番までを開放。目標敵対艦ミサイル。射程に入り次第逐次発射。」

「了解。」

「『千歳』所属部隊、迎撃を開始します。」

空間モニターに映る航空機隊を示す光点の群れが一斉に迫りつつある敵ミサイルに殺到する。

接近したインターセプターは対空ミサイルを発射し敵ミサイルを撃墜していく。

どうやら迎撃に心配する事は無さそうだ。

しかし艦隊に迫るのは何もミサイルだけではない。新たな脅威は別次元から姿を現した。

「ソナーに反応あり、艦隊両舷より対艦量子魚雷です。数は12、本艦隊へと速力60宇宙ノットで接近中。」

「迎撃は駆逐艦に任せる。各艦はFAJ及びMODの発射を行え曳航ジャマーも忘れるな。」

「了解しました。」

言った傍から操作を開始するオペレータ。

艦隊所属艦から敵魚雷の誘導を妨害する各種ジャマーが展開される。それに加え汎用駆逐艦からは対魚雷用魚雷が発射される。これは魚雷を迎撃する事を想定して開発された魚雷であり、敵魚雷に接近すると強力な電磁パルスが発生させ敵魚雷の沈黙を図るものである。

尤も高価な事に加え潜水艦を保有する国家が日本のほかにはバレンタイン程度しか居ない為に対潜戦闘の主役となる対潜巡洋艦や汎用駆逐艦にしか装備されていないのだが……。

「接近中の敵対艦ミサイル残数61、艦隊防空領域まで15秒。射程に入り次第戦艦及び対空巡洋艦、駆逐艦は迎撃を開始します。」

艦隊防空領域、それは戦艦や防空艦に搭載されている長射程対空ミ

サイルの射程圏のことであり敵ミサイルにとっては第二の関門とでも言うべき領域であった。

「ファイア。」

「撃ち方始め。」

各艦から対空ミサイルが連続して発射される。VLSよりリニアレールで射出されたミサイルの群れはまるで猟犬のごとくに敵ミサイルに殺到する。

もちろん敵ミサイルはその数を大きく減らし当初の攻撃力からは想像も出来ないほどに減少していく。

「接近中の敵魚雷残数5、内2発が命中コースに入っています。」

「敵ミサイル、射程に入りました。VLS1番から6番、計36発連続発射を開始します。」

「敵魚雷一発が巡洋艦『筑摩』艦尾に命中、機関が大破。艦隊より落伍します。」

鉄壁ともいえる迎撃体制を整えていても隙は生まれる。『筑摩』はその最たるものと言えるかもしれない。彼女はエネルギー供給の要である機関を破壊されその機動力を喪失。発電機能の喪失によって武器システムの運用も不可能となっていた。

しかし敵の攻撃は魚雷だけではない。

「接近中の敵ミサイル残数4、個艦防空領域に入りました。」

個艦防空領域、短距離ミサイルと主砲や副砲を使用しての防空エリアである。

各艦のVLSからは一斉に短距離ミサイルが発射され主砲が何条もの光を連続して放ち迎撃を行う。それはさながら光の壁のようにも見える。

そして今までの迎撃でその数を大きく減らしていた敵ミサイルは完全に沈黙。この宙域に於ける敵の第一波攻撃は終了した。

「接近中敵ミサイル残数0、迎撃が完了しました。」

ならば………？

「よし、全艦対艦ミサイル発射開始。」

そう、攻撃である。

「VLS49番から64番開放、計16発連続発射を開始します。」

迎撃の為に順番の無かった対艦ミサイルが続々と発射体制を整える。

攻撃の緒元入力を完了。

リニアレーン準備完了。

管制システム正常作動確認。

全ての用意は整った。後は命令するだけでこの一撃必殺の大型ミサイルはその隠密性と高速性をもって敵艦隊に殺到し、自慢の火力で敵艦粉碎できる。なによりこの艦隊は日本国防宇宙軍が誇る連合艦隊直属戦隊と最強艦隊と名高い第一艦隊。その搭載するミサイルの数や計り知れない。

それを十分に知っている東郷は一言告げる。

「ファイア。」と

次々と放たれる対艦ミサイル。その総数は200を超え、もちろん第二波、第三波の用意もある。

これで敵前衛艦隊への対処は一段落といったところだろうか。

もちろんさきほど苦汁を飲まされた潜宙艦に対する対処も忘れてはいけない。

「長官、敵潜宙艦がSUMの射程内に入りました。」

「そうか、放って置く訳にもいかないからな。駆逐艦に対処させてくれ。」

「了解いたしました。」

この後、命令を受けた駆逐艦は対潜ミサイルや魚雷を持って潜航している敵潜水艦を執拗に追い回すことになる。

「敵艦隊へ接近中のミサイル残数174。敵航空隊の迎撃は消極的です。」

「ふむ、やはり第一航艦の部隊のおかげかな。」

東郷が言う第一航艦とは第一航空艦隊のことであり、連合艦隊を構成する三つの航空艦隊の中でも最大の規模を誇り、連合艦隊の攻撃力の中核として期待されている艦隊の一つである。

今回は敵主力艦隊からの航空攻撃を未然に防ぐ為に敵主力航空艦隊は第一航空艦隊が受け持ち、航空戦能力に乏しい敵前衛艦隊との戦闘は第一艦隊及び直属戦隊が受け持っていた。

「長官、これより敵の主砲の射程範囲に入ります。」

「分かった。．．．旗艦『長門』より全艦に通達。これより砲撃戦を開始する。戦艦『薩摩』が前衛を務め空母を後方に。駆逐艦は空母を囲むように展開しろ。」

「了解しました。」

「さて、皆張り切っているのか。」

交戦開始から順調な滑り出しを見せる東郷率いる艦隊。

ではその威力を一身に受ける事になる敵艦隊の視点に立って見てみよう。

さて皆さんお気づきだろうか。

そう、東郷率いる連合艦隊直属戦隊の敵となって立ちはだかるは連合艦隊が一角、田中雷蔵率いる第三艦隊なのである。

つまり・・・今回のこれは戦闘などではなく・・・

“ 実戦形式の大軍事演習 ” なのである。

これは年一回行われる大規模な演習であり、ミサイルや実体弾などの消耗品の在庫一斉セールも兼ねる為に参加する艦隊の規模も相俟って日本一の派手さを誇る。

そして今回の演習では管理局との武力衝突が現実味を帯びてきた事もあり規模が大幅に拡大。新編成された連合艦隊から連合艦隊直属戦隊、第一艦隊、第三艦隊、第一航空艦隊、第三航空艦隊が参加するという前代未聞の規模になっている。

演習は大規模な艦隊戦を想定し二つの軍集団に分けて戦闘を行うものであり東郷率いる連合艦隊直属戦隊と山本率いる第一艦隊と第一

航空艦隊で構成される集団、小澤率いる第三航空艦隊及び第三艦隊で構成される集団に分けられている。

もちろん演習であるため実弾を当てるわけにも行かない。そのため使用する対艦ミサイルは炸薬や信管を抜いてかわりに魚雷用の浅異層次元潜航装置を搭載することによって目標に着弾寸前に浅異層次元に消えうせたり、主砲の粒子砲の攻撃力も目標のシールドで完全に防げるレベルにまで抑えられている。(しかし迎撃訓練などでは従来どおりにロックオンから発射までの動作を行い、タイミングや目標の動作や各要素を客観的に判断する事によって判定する。)

ではカミングアウトも終わったところで東郷・山本艦隊のミサイル攻撃を受ける事になった不幸な第三艦隊を見ていこう。

「司令！敵ミサイルは現在135発！急速に接近中です。接触まで40秒！」

「迎撃を続ける！」

「了解！」

第三艦隊旗艦『朝日』のFICは巢をつついたような混乱が発生していた。先ほどの第一波攻撃が失敗に終わった事も彼らを落胆させるに十分なものであったが、さすがに200を超えるミサイル攻撃を仕掛けられたとなればいつまでも悲しみにくれているわけにも行かない。

しかしだからといってただでさえ規模がそれほど大きくは無い第三艦隊を二つに分けて主力である第三航空艦隊の護衛に割いているのに、その半分である前衛艦隊程度では敵主力艦隊の攻勢を防ぎきれずも無かった。

現に航空戦力が貧弱な上に敵第一航空艦隊航空機隊に漸減させられた航空戦力では敵主力のミサイルを完全に迎撃する事は出来ず。その大半を第一防空領域を突破させる事を許している。

「敵ミサイル近接防御領域に侵入。接触まで30秒！」

「攪乱しろ！その後全艦緊急退避行動をとれ。総員対衝撃防御！」

「了解！！」

その数秒後に艦内に響くアラーム音。これが衝撃の変わりにミサイ

ルの直撃を告げる証である。そして艦隊の状況を確認し終えたFICのクルー達は続々と被害報告を行う。

「巡洋艦『秋津島』大破、駆逐艦『敷波』大破。」

「空母『龍驤』飛行甲板大破、第5カタパルト損傷。」

「敵魚雷により潜宙艦隊に甚大な被害が出ています。」

虎の子の航空母艦の実質喪失の報に加え先ほど唯一戦果を挙げた潜宙艦隊が壊滅したと言う報告には常に強気さを見せる田中の心を乱すのに十分であった。

(チツ・・・さすがに東郷の野郎に山本の爺さんもいるだけのこと
はある。)

戦力差、経験の差、そして能力の差、連合艦隊の艦隊司令の一人としては最年少である彼はそれを痛感する。もはや勝ち目など無かった。このままでは悪戯に戦力を消耗させるだけであり自分の護衛対象である第三航空艦隊の負担も大きくなってしまふ。

もはや是非もなし。田中はある決断を下す。

「潜水艦隊は後方に退避、艦隊の被害を知らせる。」

「了解。空母『龍驤』は航行に支障ありませんが母艦能力を喪失。修復には後方に退避する必要があるでしょう。巡洋艦3隻が大破または航行不能、駆逐艦は2隻が撃沈、3隻が大破、1隻が機関出力が低下しています。」

「本艦は第二主砲塔が旋回不能、通信システムは半壊、一応戦闘に支障はありません。」

「……………」

「司令？」

「……………撃沈、大破判定を受けた艦は戦域より離脱。残存艦を終結させ敵艦隊を足止めする。第3艦隊が合流するまでの辛抱だ。それまで時間を稼ぎつつ後退する……………できるな？」

彼には珍しく静かな口調だった。

しかしその面持ちから真剣さが感じられ、クルー達も自らの上司の問いに真剣に答える。

「はい。」

その様子に田中は満足そうに反応するとコンソールを操作し艦隊に属する全ての艦との通信回線を開く。

「旗艦『朝日』全艦に通達、これより我が艦隊は味方第三航空艦隊が此方に合流するまで敵主力艦隊の足止めを行う。空母『大鷹』は航空機隊を出撃させ艦隊の直援を行い、その他の戦闘艦はこれより敵主力との砲撃戦を行う！駆逐艦は対潜警戒も怠るな！」

「司令！敵主力艦隊、あと30秒で砲撃圏内に入ります。」

一度やるべきことが明確に決まった以上、彼の動きは早い。すぐさま艦隊に戦闘準備を命令する。

「分かった。．．．全艦、砲撃用意！」

「戦艦『朝日』、第一、第四番主砲エネルギー充填完了。目標敵艦隊前衛。」

旋回を終え徐々に仰角を付けていく主砲塔、狙いは敵主力艦隊の前

衛に位置する戦艦に定められている。

あくまで自分たちの現在の目的は足止めである以上、積極的に攻撃を仕掛ける必要は無い。

「敵艦隊、砲撃圏内に入りました！」

全ての用意が整った。既に砲手はトリガーに指をかけているだろう。周りを見渡せば参謀以下全てのクルー達も指揮官の命令を今か今かと待ち続けている。

田中は報告を受けると意を決したように命令を下す。

その様子は連合艦隊きつての猛将の風格を感じさせるものだった。

「一斉撃ち方——！！！」

「撃ち方始め！！！」

対する此方は第一艦隊旗艦、戦艦『日向』。現在彼らは連合艦隊司令長官東郷の指揮下に組み込まれており少々窮屈な思いをしながらも戦闘に従事していた。

そんな中、敵前衛艦隊からの砲撃を受け戦闘意欲旺盛なクルー達も任務に力が入る。

「敵艦隊からの砲撃です！」

それと同時に彼らが望む命令が下る。

「東郷総司令より戦闘許可下りました！」

「．．．やっとか、よし！全艦主砲斉射開始！若造に第一艦隊の底力を見せ付けてやれ！」

「了解！全艦、砲雷撃戦開始！」

彼らこそ戦意旺盛にして熟練揃い、歴戦の智将山本無限率いるこの艦隊こそ連合艦隊最大規模にして最強と名高い大艦隊。

無敵艦隊こと第一艦隊である。

国防宇宙軍連合艦隊第三航空艦隊

「司令、前衛艦隊が敵主力艦隊との戦闘を開始しました。」

薄暗いFIC、通信中継機や索敵艦からの情報が整理され報告が行われるこの場所は現在、静けさを保ちつつも連合艦隊を構成する三つの航空艦隊の一つ、第三航空艦隊に属すると言う誇りと敵役でありライバルでもある第一艦隊への対抗心で満たされていた。

「・・・分かりました。第一航空艦隊は排除できませんでしたから我が艦隊はこのまま敵主力艦隊の背後を突きます。」

「了解しました。」

静かに指示を飛ばす彼女こそ第三航空艦隊司令、小澤祀梨。航空戦情報戦の第一人者にして連合艦隊きつての腐女子と名高い(?)天才少女である。

「ところで後衛艦隊は撤退に成功しましたか？」

「いえ、それが・・・敵第一航空艦隊の分艦隊の熾烈な攻撃に晒され壊滅状態に陥ったようです。壊滅判定が出るのも時間の問題です。」

「・・・分かりました。まあ第一航空艦隊を一部とはいえ排除できたのですから良しとしましょう。全艦最大戦速で敵第一艦隊連合艦隊直属戦隊の後背に回り込みます。攻撃隊は一時補給の為に帰艦してください。あと直援機隊を後退させておくように。」

「了解しました。」

やはり同業者にして最強と名高い航空艦隊である第一航空艦隊に対する対抗心は強い。損害を与えたといっても侮れない事を実感しつつ彼女は目の前の任務に向き直る。

「さて長官、勝負はまだこれからですよ・・・第三航空艦隊の力を見せてあげます。」

あえてフラグをたてる彼女。

しかし彼女はもとよりそんな物を回収するつもりなど毛頭無い。航空戦のプロを自認する彼女にとっては敵は強大であればあるほど面白いものとなる。

第一艦隊と連合艦隊直属戦隊、この二つの獲物は彼女の心を奮い立たせるに十分な餌となっていたと言えるだろう。

国防宇宙軍連合艦隊第一航空艦隊

「全く小澤提督も容赦ないな・・・正規空母まで喰うとは・・・」

お通夜のようなムードの旗艦『赤城』のFIC、彼らは先の第三航空艦隊からの攻撃によって3隻ある正規空母の内一隻を大破させられ多数の護衛艦を撃沈させられると言う大失態を犯していた。

司令である佐藤のぼやきはそれを許した自分を罵るとともに優秀な味方への賞賛を含んでいるのだ。

「『蒼龍』が大破判定を受けたのはきついですね。それに中型空母も2隻とも中破判定か小破判定を受けてしまいましたし。」

航空参謀の言うとおり第一航空艦隊はその保有する3隻の正規空母の内一隻を喪失、防空能力を補助する役目を持つ中型空母もそれなりの損害を受けていた。それに加え敵の攻撃によって多くの航空機が撃墜判定を受けた事もあって艦隊の航空戦力は半減に等しい損害を受けていたのだ。

佐藤はそれらの悲報を聞いて自らの不手際を後悔するがすぐに次の行動を始める。

「ともかく分艦隊との合流が済み次第第一艦隊の応援にいくぞ。」

「具体的には？」

「田中提督の前衛艦隊は時間の問題で壊滅する事は確実、小澤提督の第三航空艦隊は田中艦隊が第一艦隊の目をひきつけている間に第一艦隊の後背に回り込む気だ。」

「その後ろを突くと？」

「．．．まあそういうことになる。」

「．．．しかし我々が着くまで東郷長官と山本提督が持ち堪えてくれるかどうか．．．間に合わなければ東郷長官達が艦隊前後から挟撃されてしまうのでは？」

航海参謀の言うとおり自分達が現場に到達するのが遅ければ先発する敵第三航空艦隊が敵前衛艦隊と共同で第一艦隊を攻撃するのは自明の理であった。そして仮にそのような状況で第一艦隊が壊滅するような事があれば戦力的に劣っている第一航空艦隊が敵に捻りつぶされるのは明白、現状はどう見ても自分達に不利な状況であった。

しかしそんな航海参謀の心配をよそに佐藤は笑う。それは自分だけが知る何かを相手が知っていない事への優越感から来るものだった。

「フッフッフ．．．アハハハハ！」

「司令？」

訝しげに上官の顔を窺う航海参謀。佐藤は笑いを静めると自身ありげに言った。

「持ち堪えるさ。あれは．．．そういう人間だ。」

「はあ。」

妙に自信満々に上官が言った言葉の意味を航海参謀が考え始めたとき、佐藤は意を決したように通信回線を開いて第一航空艦隊残存艦艇に命令を下す。

そこに先ほどまで落胆や失望、自嘲の色が濃かった佐藤の姿は無い。

「第一航空艦隊旗艦『赤城』より全艦へ！分艦隊との合流が済み次第攻撃隊の補給を行いつつ敵第三航空艦隊を追撃する。小澤の小娘に遅れを取るなよ？各員は第一航空艦隊構成員としての誇りと矜持を胸に努力せよ！以上！」

「『了解！』！」「『』」

そつこの威厳ある姿こそが伝統ある第一航空艦隊現司令、佐藤鉄次郎の姿である。

FICのクルー達が慌しく動き始める中、命令を下し終えた彼は口

元に笑みを浮かべながら一人呟く。

「さあ、祀梨君。勝負はこれからだぞ？」

第二十三話 『国務大臣達の日常2』（後書き）

皆様最近は何をお過ごしでしょうか？私は美術の課題が終わりそうも無く必死に無い想像力をフルに使って作業しております。

それはさておき今回から軍事演習が始まりました。ゲームの方でもありましたしね軍事演習。おそらく次は演習の続きから始まるのではないのでしょうか。出来る限り執筆も急ぎます。

ご意見感想お待ちしております。今回もお読みいただき真に有難う御座いました。

第二十四話 『国務大臣達（+総統閣下）の日常3』（前書き）

出来ない約束はもういたしません。

次からは速度よりも内容を重視していければと思っております。

更新速度は今回のように遅くなってしまうかもしれませんが今後ともよろしく願います。ちなみに今回更新が遅れた理由と謝罪は後書きのほうに書かせていただきました。

第二十四話 『 國務大臣達（＋総統閣下）の日常3 』

2160年12月21日・第一艦隊旗艦・戦艦『日向』FIC

「戦艦『東』中破！」

「直援機隊損害率20%を超えました。」

艦内に響く悲報、本来ならばそれは悲しむべき事象なのだがこれはあくまでも“演習”であるため幾分か気持ちも和らぐ。

というよりも溢れんばかりの闘争心を糧に眼前の敵を叩きのめす事しか頭に無い連中は、少ない戦力を効率的に運用して此方に犠牲を強いている敵役に対して最大限の賞賛を寄せていた。

「空母『千歳』に命中弾！第一、第五カタパルト使用不能になりま
す。」

続く悲報もそこまで気にはならない。特に第一艦隊司令を務める山本は自分たちの後進が育ってきている事に満足していた。

「・・・田中の坊主も中々やるもんだな。ちつとばかり舐めとったかもしれん。だが・・・」

「敵旗艦戦艦『朝日』沈黙！」

「そつら一丁上がりだ。」

とうとう第三艦隊旗艦を撃破する事に成功した。尤も誰もが時間の問題だと思っているあたりが彼我の戦力差を暗に示していると言えるだろう。

旗艦を失った第三艦隊は指揮系統の混乱から統制の取れた射撃も取れなくなり始め、既に圧倒的な優位に立つ山本たちの障害ではなかった。

「山本司令、これより敵残存艦の掃討にあたろうと思つのですが・・・よろしいでしょうか？」

「東郷の奴に訊いてみる。」

「分かりました。」

すぐに回線を繋ごうとする参謀を尻目に山本は口元に薄く笑みをうかべて上官たる東郷が居る戦艦『長門』を見つめていた。

「尤も直ぐに拒否すると思うがな．．．。」

そうこうしている間に山本の居る『日向』と東郷の『長門』との間に回線が開かれた。空間ディスプレイに映る東郷はいつもどおりの明るい表情で山本と挨拶を交わした。

『よっ山本の爺さん。さすがは第一艦隊だ。』

「はっはっは、褒めても何も出んぞ？．．．さてと、これからどうする。時間の問題で奴らが来るんじゃないか？」

このとき山本が危惧していたのは第三航空艦隊のことであった。先刻、第一航空艦隊が大きな損害を受けた事から判断すれば第三航空艦隊は大きな迂回行動をとりながら自分たちの後ろに回ることが出来る時間が確保されているはずだった。

もちろんだが東郷も同じ考えに至っていた。

『こっちもそう考えている。彼女の事だから俺たちの後背を突くために大きく迂回しながら接近している事だろう。』

「ほう、とすると第一航空艦隊は予想よりも・・・。」

「数分前から強力なジャミングで状況は分からなくなってる。だが最後の報告だけ見れば第三航空艦隊から手酷くやられたと見て良いだろう。最悪の状況を考えて第三航空艦隊とは我々だけで戦う必要があるだろうな。」

当初は二人とも第一航空艦隊は第三航空艦隊との交戦状態になり、敵後衛艦隊を攻撃する為に二分していた戦力の内、本隊の方に敵の全戦力をぶつけられた為に大きな損害を出しつつも壊滅は防げたものと判断されていた。

しかし敵の妨害活動が活発な事や第一航空艦隊の情報が入ってこないために東郷と山本は最悪の場合“第一航空艦隊の壊滅”という状況を考えて行動する事にした。

「まあそうなるわな。・・・それで、どのルートでいくんだ？」

一度決断を下した以上、彼らの行動は早い。連合艦隊の司令長官と第一艦隊の司令を務める提督たちはどのルートを利用すればタイミングよく敵艦隊の後背を突けるかを考え始めた。

『まあ、第三航空艦隊もそう時間をかけずにこの宙域に到達するだろう。そのタイミングに合わせて不意を突くには大きく迂回をしても時間を節約できるルートをとりたい。』

「ふむ．．．で？」

山本が先を促すと東郷は悪戯を実行する前の好奇心に満ちた子供のよような笑顔で言った。

『そこで惑星『ノクターン』の重力を利用して急速に回帰しようと思っ。』

「．．．．．。」

沈黙、それに加え東郷の隣に立つ秋山はどこか呆れているようだ。

『．．．ほら長官、山本提督も呆れてるじゃないですか。私は反対したのですが。』

秋山はそう言ったが彼は一つ勘違いをしている。

そう、山本は呆れて声が出ていないのではない。東郷が示した行動方針を頭の中で判断していたのだ。

有効性、危険性、そして面白さ。

それらを総合的に考えて彼が出した答えはもちろん・・・

「いや、面白い。やってやろう。」

イエスであった。

『はっ。』

一人声が出ない秋山、しかし乗り出した二人はもう止まらない。

『そこなくちな。』

「すぐに始めるぞ。ひさしぶりにおもしろいバクチが打てそうだわ

い。」

『よし、まずは目の前の敵残存艦隊を突破して惑星『ノクターン』へ向かおう。今なら間に合うだろう。秋山、始めるぞ。』

二人のやり取りを見て自分の無力さを痛感すると共に秋山はこの二人の判断に賭けて見る事にした。

『．．．分かりましたよもう！やり遂げればいいんでしょう！』

連合艦隊司令長官の女房役こと秋山参謀長。彼がその優秀さで天才的な上官の暴走を抑止できる日は．．．．．いつか来る。(多分)

「よし、この調子なら第一艦隊の応援に間に合うかもしれん。」

「はい。中破判定を受けた艦も修復判定を受けていますから戦力も少し回復しました。」

主力艦隊の面々から既に故人扱いになっているとは知らずに第一航空艦隊司令の佐藤はほぼ無傷の分艦隊と合流を果たし、加えてカタパルト等の損傷判定も解除されてある程度回復した航空戦力を誇る第一航空艦隊を眺めながら呟いた。

「しかし、冷静になって考えてみると“あの”東郷長官達が敵前衛艦隊を倒してそのまま第三航空艦隊と正面对決する可能性は低いんだよな。」

「何故ですか？」

佐藤の言葉に怪訝な顔で疑問を呈する参謀、それに佐藤は当たり前のように答える。

「あの長官の事だから祀梨君の後ろか横、まあ不意を突く為に大きく迂回機動をとると思うんだ。」

ご丁寧に空間ディスプレイを一つ増やしてまで説明をする佐藤。参謀も敵がきたらどうするんですか？随分と余裕ですねとは言えない。

仕方ないのでこの一時を使って佐藤の講義を受ける事にした。

「・・・しかし時間がかかりすぎて逆に小澤提督に攻撃のチャンスを与えてしまうのでは？」

「・・・まあそこは如何にかするんだろうな。一緒に居るのが山本長官だし多少の無茶も聞くだろう。」

「無茶って・・・これ演習ですよ？」

ある意味もつともな発言のように聞こえたがこの演習でその理論は通用しない。

何故ならこの演習の目的は“実戦を想定した”戦闘訓練なのだ。シナリオなど用意されてはいないし決められているのは具体的な判定基準と行動範囲、そして両チームに課せられる作戦目的のみ。

この作戦目的も至極単純なものであり理解するのにそうそう時間を浪費する事は無い。

それもその筈、作戦目的は一つ、“敵チームの殲滅”であるからだ。

勿論この目的を達成する為ならばルールに違反しない範囲でどのような手段でもとることができる。ちなみにこの自由度の高さが原因で過去に事故まで発生しているのだが、演習による練度の上達を考えた結果毎年の恒例行事となっている。

それこそが兵士を戦士に変えると専らの噂となっている日本国防宇宙軍総合軍事演習なのである。

そしてこの演習に初めて参加するものと経験者とは演習というものに対する考えが根本的に変わることが有名で、先ほどの参謀の発言は彼がこの演習に初参加だった事から来るものであった。

そんな参謀を見て佐藤は悪い笑みを浮かべながら発言を嗜めた。

「ふむ、君は演習に本気で参加しないのか。問題発言だな。」

「い、いえ！そんなことはありません。ただ、演習で貴重なクルーを危険に晒す事は慎むべきではないかと考えただけです。」

「冗談だよ本気にするな。それに……………」

慌てて弁解を始めた参謀を見て満足したのか佐藤は軽く謝罪をすると共に一人呟くように言った。

「演習だからこそ多少の無茶を試せるんだ。」

その言葉は誰に聞かれることも無かったが彼の中で何かのスイッチが入ったのか妙にやる気を見せながら部下に命令を下す。

「参謀閣員に通達、味方主力艦隊が予想宙域に存在しない場合、我々は我々に対して優勢な敵第三航空艦隊との戦闘を強要される可能性がある。心して任務に当たる様に。」

「了解。」

手負いとは言えど正規空母を含めた大艦隊が味方を救うべく星海を往く。

翻ってその対象は今どうしているのだろうか？

「長官、まもなく惑星『ノクターン』軌道の上に到達します。」

「・・・では始めましょうか。第一艦隊も既に準備は整っているそうです。」

第一航空艦隊が救援しようと奮起していた対象、東郷率いる主力艦隊は第一航空艦隊が予想している状況とは全く違う状況にあった。

彼らは統制の取れない第三艦隊残存部隊にありつたけの対レーダーミサイルと大量の電波妨害用無人機をを発射して中央突破を行い、その後大きく迂回軌道をとつつ惑星『ノクターン』の衛星軌道の上に到達していた。

「よし。・・・全艦に通達！機関最大出力！惑星の低軌道上を最大戦速で突き抜ける。皆、惑星の重力に曳かれすぎるなよ！」

威勢良く言う東郷、彼の言うとおり少しでも気を抜いて高度を落とすすぎたり速度を遅くしすぎでは直ぐに惑星の重力に捉えられて艦隊から落伍する可能性があった。

しかしそんなことは百も承知のクルー達、無言で任務に打ち込む彼

らの背中は何にも変えがたい頼もしさを感じさせるものだった。

「『長門』、機関最大出力、加速を開始します。」

管制AIが報告すると同時に艦内に僅かな振動が伝わる。日本国防宇宙軍最大の戦艦がその全力を速力に発揮する証である。

「『長門』、これより惑星『ノクターン』に接近します。」

徐々に近づく惑星の美しさにため息を吐きながらも自分たちのルートを維持する事には四弁が無い。

「本艦隊、これより回帰軌道に入ります。全艦は重力圏に接近しすぎないよう細大の注意を払いつつ最大戦速を維持してください。」

航海参謀を始めとした艦の航行システムのコントロールを任される人間達は始めてみる自艦の速力に驚きと恐れを隠せない。

惑星の重力すら利用した高速航行、一歩間違えればそのまま地表に激突するかもしれないような行為を行っている自分達に呆れと誇りを感じながら彼らは持ち前の技量を持って戦艦『長門』をコントロールしていく。

「．．．本艦隊、現在回帰軌道を航行中、今のところ艦隊から落伍した艦は確認できません。順調に航行しています。」

レーダー員もどこか安心したように報告する。

しかし勝負はこれからなのだ現に今も艦の速力は増加の一途を辿っている。数値だけ見れば新米の航海士なら卒倒しかねない速力だった。

「よし、この調子でいくぞ。」

「『長門』、現在回帰軌道の中点を突破しました。」

その報告に反応して速力を見て息を呑む航海参謀。生まれてから初めて見る数値だった。．．．否、戦闘機やミサイルの速力と比べれば遅いのは当たり前なのだが戦艦の速力としてはありえない数字が出ている。

むしろこの速力にも対応できる設計をした技術師達と卓越した技能を持つクルー達のどこから褒めたものか分からなくなってくる感覚

に襲われていた。

FICのクルーたちの幾人かがそのような思いで居る中、総司令である東郷は至って冷静に各所に指示を飛ばしていた。

「あまり降下しすぎるな。捉えられてはそのまま地表に激突するぞ。」

「

了解しました。」

「回帰軌道完了まで30秒。各艦は一層の注意をお願いします。」

この悪夢のような航海もあと少しで終わる。

そんな気持ちが芽生えた時が最も失敗をしやすくなる。それを教育課程に於いて痛いほど思い知らされている国防軍人達はより一層身を引き締めた。

ある者はこれからの戦いに思いを寄せ

ある者は美しき『ノクターン』に別れを告げ

またある者は状況が分からない友軍の身を案じる

「・・・長官、第一航空艦隊はどうしているでしょうか。」

「あの佐藤提督がそう簡単にやられるとは俺も思っていないが無視できない損害を受けてのは確実だろうな。まあ尤もそんな状況を作り出した小澤提督を採用したのも俺という何とも皮肉な展開で嬉しさ半分悔しさ半分と言ったところか。」

いや貴方のその顔は明らかに笑っていますよ、と内心で思いつつも秋山は今は私語は慎むべきと考え真面目に話を続ける。

「しかしもし第一航空艦隊が有力な戦力として行動できる場合、あの佐藤提督はどのような行動をとるのでしょうか？」

「恐らくだが分艦隊との合流を果たした後に俺たちの応援に駆けつけるだろうな。」

「・・・それって場合によっては非常に拙いのでは？」

「ああ、敵の攻撃で脱落した艦もあるのに加えて疲労もたまっているであろう第一航空艦隊は田中の残存艦隊を吸収してさらに強力に

なっている小澤提督の第三航空艦隊と戦闘することになるだろうな。

「
ある程度予想は出来ていたがあまり的中しては欲しくないものだ。

索敵艦の報告によって小澤艦隊が自分達がもっていた宙域にかなり接近している事は分かっていたので、このままでは敵の後背を突くどころか再編された敵艦隊によって手負いの味方艦隊が殲滅されてしまいかもしれなかった。

何はともあれ皆の思いは一つ

「・・・急ぎましようか。」

「同感だ。」

第三航空艦隊旗艦・航空母艦『葛城』FIC

「主力艦隊が、いない……………」

独白。それは第三航空艦隊旗艦航空母艦『葛城』の主席参謀を始めとした全幕僚に共通する思いだった。

「はい、居るのは田中提督の残存艦艇のみです。現在本艦隊への吸収と共に敵主力の情報を集めています。皆口々に『最大戦速でどこかに飛んでいった』と言うばかりです。」

報告の曖昧さに顔をしかめつつも敵の優秀さに舌を巻くしかない。何故なら敵主力はなんとも豪華な置き土産を置いて行ってくれたのだから。

「それに加えて東郷長官達が執拗に対レーダーミサイルを発射していたせいでレーダー等の索敵系の大破判定を受けている艦が多く、敵の行き先は依然判明しておりません。」

加えてと参謀は周辺宙域に大量に展開されている妨害用無人機のこととも報告する。それのおかげで艦隊の通信障害まで起きる始末であった。全く持っていない迷惑である。

(田中提督がそこまで早くやられるとは・・・いや、長官達が残存艦艇の掃討を行うと思ひ込んでいた私にも責任はありますね。・・・しかし、そうになると・・・)

考えを纏めた小澤は現状取りえる最善の策を選択しようと画策する。反省ならば後でも出来るのだから今は何処から来るか分からない敵艦隊に対処する方法をとらなければならなかった。

それに小澤にはある不安があった。

「航空参謀、早期警戒機を出撃させるのと直援部隊の交替をお願いします。航海参謀、第三艦隊残存艦艇を指揮下に置いた後に最大戦速で現宙域を離脱します。目的地は宙域ポイントE-05928です。」

「了解しました。．．．しかし何故？」

「現在の状況が私たちにとって少々厄介なものになりました。現状での戦闘は不利と判断した為我々の体制を立て直す為にも「小澤司令!」「」．．．まさか!？」

小澤祀梨の不安にして失態。それは．．．

「後方から敵第一航空艦隊接近中！」

佐藤率いる第一航空艦隊の被害を過大に判断していた事だった。

第一航空艦隊旗艦・航空母艦『赤城』 F I C

「よし、間に合ったようだな。」

「やはりというか何と云うか東郷長官達は居ませんね。」

苦笑しながら言う参謀、もはや彼も自らの上官がどつという軍人なのが漠然とではあるが理解できたようである。

佐藤はそんな成長（？）を遂げた参謀を満足そうに見ると先ほどの講義の復習をするかのように語り始める。

「予想していた事だろう？恐らく一度姿を眩ましてから小澤提督の

後ろを取れば万々歳、それが失敗しても敵の妨害範囲を脱してから我々と合流できれば戦力的優勢を確保できるからな。」

「つまり我々がすべき事は・・・。」

「そう。時間稼ぎだ。」

意思疎通を迅速に完了させると参謀は佐藤の意図を完全に理解して部下に司令を下す。

「では当初の予定通りに始めます。」

「おう、存分にやってくれ。」

そして全ての準備が完了するのを待っていると佐藤の下に先ほどの参謀に唆されたのか通信参謀が近寄ってくる。

意図は何だと訝しげに見ているとどうやら演説をしてほしいらしい。

年寄りの口上なんぞ聞いても得にならんだろうと笑いながら返しつつも指揮下の艦隊との間に通信を繋げると力強く明瞭に、頼もしく自分たちの目的を告げる。

「第一航空艦隊旗艦、航空母艦『赤城』より全艦へ。これより本艦隊は敵主力を殲滅すべくその全火力を投じるものとする。各攻撃機隊は管制AIの指示に従い攻撃を開始、全戦闘艦は陣形を維持したまま敵の后背を突く！」

『『『『『『『『了解！！』』』』』』』』

「戦闘開始！！」

存外返事が大きかった事に年甲斐も無くはしゃいでしまったのは自分だけの秘密だと思いながら眼前に広がる第三航空艦隊の布陣を見て佐藤は次の次の一手を考える。

第三航空艦隊旗艦・航空母艦『葛城』FIC

「迎撃開始！！」

「りよ、了解しました!!」

(まさかここまで戦力を維持していたなんて・・・甘かったです。)

経験、能力の差、それだけで彼女を責める事は出来ないだろう。実戦形式とはいえ演習と言う特殊な環境下に於いては彼女の判断がこの結果を招いたと言わざるを得ないのだから。

これが実戦であれば第一航空艦隊は彼女の艦隊によって壊滅に近い損害を受けた可能性さえあるのだ。良くも悪くも演習と言う状況が不確定要素を小さくしたと言えるかもしれない。

「司令、分艦隊司令から反転して攻撃する許可の申し出が・・・。」

「無視してください、本艦隊はこれより最大戦速で大きく迂回するコースをとって現宙域を離脱します。急いでください!」

後ろから砲撃されている状況で反転攻勢なんて頭が狂っているとは思えなかった。状況が自分に圧倒的に不利なだけに彼女の言葉も珍しく荒いものとなっているが判断自体は至極まっとうなものだった。

ここにも小澤祀梨という提督が東郷と言う稀代の名提督に登用された一つの要因があると感じさせられる。

「了解しました。」

報告を終え、僚艦に内容を伝えるために通信回線を繋ぐクルーがいれば僚艦からの悲報を届けるクルーもいた。

否、むしろそれが過半であった。

「空母『飛龍』撃沈！」

「巡洋艦『羽黒』撃沈しました。」

「駆逐艦『初月』大破！機関停止します。」

続々と上ってくる被害報告、今のところ艦隊の要である正規空母を含む大型艦6隻が大破判定を受け、他にも多数の中小破判定を受けていた。

半ば奇襲のような形で攻撃を受けた為に始めに宙に上げていた直援

機隊は全滅に近い損害を受けており、急遽先ほど艦に戻ったばかりの部隊も入れた戦闘機部隊を迎撃に当てていた。

そんな切羽詰った状況の中、さらに状況が悪化したことを告げる報告が飛び込んでくる。と同時に自分たちの前に一筋の光が見えた。

「敵第二波攻撃隊接近中。」

「敵主砲の最大射程圏を離脱します!」

(よし、このままいけば。。。)

そう、このままいけば第一航空艦隊の追撃も振り切って態勢を整えた後に再度攻勢を仕掛ける事も不可能では無かった。

。。。そう、このままいけば。

「司令!」

「今度は何ですか!??」

相次ぐ悲報に慣れてきていたのか疲れてきたのか若干の笑いまで見せながら言う小澤にリーダー員が状況が自分達にとって不利を通り越して絶望的になった事を告げた。

そう。

「本艦隊左舷、惑星『ノクターン』軌道上に多数の艦影を確認、これは・・・敵主力艦隊です!!」

「・・・もう・・・やだ。」

小澤祀梨が巡り合う事を待ち望んでいた敵主力艦隊は、もはや運命的とも言えるようなシチュエーションで彼女の前に現れた。

彼我の戦力差は1:3。もはや詰みゲーであった。

「前方に敵第三航空艦隊を確認しました。第一航空艦隊との交戦中のようです。」

「ほう、さすが佐藤提督だ。素晴らしい指揮能力だな。．．．秋山、通信回線を開けるか？」

「ええ、さすがにもう妨害も通用しないでしょう。今すぐ繋ぎます。．．．しかし、分艦隊との合流、損傷を受けた艦を引き連れての長距離航行、それをこの短時間でこなしてしまうなんて．．．流石は歴戦の提督といった所ですね。」

「ああ、頼りになるな。」

余裕、その言葉がピッタリとはまる空気の中で連合艦隊を取り仕切るこの二人は傍から見れば油断しきっているように見えるが本人達は全くそんなつもりは無かった。

二人は談笑をしながらも自艦隊と味方艦隊、そして敵艦隊の位置、被害、そしてこの後の動きを予想しつつ最善の策をとろうと頭をフル回転させていたと言えるだろう。

「長官、第一航空艦隊司令、佐藤鉄次郎提督との通信がつながりました。」

「ああ、有難う。」

東郷の目の前に映し出されるのは上機嫌さを隠すまでもないという風の佐藤。尤も彼も内心ではこのまま東郷たちが現れなければ如何した物かと戦々恐々としていた為、上機嫌と言うよりはほっとしたという表現の方が適切かもしれない。

『 お？、やあ東郷、元気にしてたか？』

「おかげさまで。」

二人の間で交わされる軽い言葉達、それらは重い意味を持って大艦隊に影響を与えていく。

そんなことは百も承知の提督たちは会話もそこそこに早速本題に入る。

『そうか、ところで頼みがあるんだがお前さんの艦隊の位置からなら敵主力を横から叩けるだろ？やってくれないか。』

現在の各艦隊の位置は明らかに東郷たちに有利なものとなっていた。小澤率いる第三航空艦隊を追撃する形で第一航空艦隊が展開し、東郷率いる連合艦隊直属戦隊と山本率いる第一艦隊は敵艦隊の左舷を攻撃する事ができると言う絶好のポジションにいた。

加えて敵艦隊は被害多数、士気減少、疲労困憊と満身創痍な状態なのに対してこちらは第一航空艦隊が手負いとはいえ士気は高く、それによって溜まった疲労もある程度無視できている。そしてなにより圧倒的な戦力というアドバンテージを有していた。

誰がどう見ても戦闘が終局を迎えつつある事が分かると言うものだ。無論それは東郷も承知の上である。

「もとよりそのつもりだ。どうやら彼女も諦めたのか全面对決の姿勢を見せているからな。」

そう、彼の言うとおり小澤も当初は各個撃破するつもりだった敵艦隊が合流してしまった為に勝ち目が無いと悟ったのか最後の賭けに出ようとしていた。

それを東郷は心底うれしそうに楽しそうに見つめる。それは幾ら経

っても解けない難問に果敢に取り組む生徒を見るような眼だった。

『面白い。お手並み拝見といこうか。』

「気を抜かないでくれよ？」

大演習は終わりに向けてその雰囲気を変えると共に最後の饗宴を始めようとしていた。

数時間後

「終わってみればあっけなかったな。」

結論から言おう。あとの戦闘は本当にあっけないものであった。

激しい戦いほど呆気なく空しく終わるものはないといわれるが、まさに今回の演習はそれを体現していたといえる結果だった。

具体的には追い詰められた小澤が宙域からの撤退を断念。せめて一矢報いようと艦隊を大きく迂回させつつ防御から攻勢へと転じた。

その速度たるや山本や佐藤も目を見張らざるをえないもので小澤の艦隊の攻勢を許した事により第一航空艦隊は正規空母を含めた5隻が大破、東郷率いる直屬戦隊と山本率いる第一艦隊は戦艦を含む3隻が大破していた。

が、その間に小澤率いる第三航空艦隊も甚大な被害を受けており、最終的に小澤が降伏するまでの損害は正規空母2隻大破1隻中破、戦艦1隻大破1隻中破、巡洋艦2隻撃沈1隻大破、その他の戦闘艦艇は壊滅に近い損害を受けていた。

最終的には第三航空艦隊の残存艦艇は中破判定を受けた旗艦『葛城』を含めた数隻にまで激滅し、素人目で言う全滅に近い状態であった。

しかし圧倒的な戦力差、位置的な不利、疲労、士気の低下等の問題を抱えながらも戦力的に優勢な東郷たちに無視できない損害を与えた事は評価に値する。尤もそれゆえ彼女の疲労感も半端ではなくなってしまうのだが……。

「いやいや、長官も佐藤提督も酷すぎるでしょう。最後の方は完全にいじめになってましたよね。」

「はっはっは、うちの空母をあれだけ喰っというそのまま何てこの私が許すわけが無いだろう?」

泣き真似をしながらそう愚痴る小澤を満面の笑みで佐藤が勝者の余裕を撒き散らしながら自身の勝利を誇らしげに語っている。

そこそこは演習が終了した艦隊が終結している惑星『蓬莱』にある宇宙軍基地の会議室。

ここでは先ほど演習を終えた提督たちが反省会を兼ねて心と体を休めていた。

先ほどから会話を聞くと予想よりも善戦した若手の提督たちをベテランが褒めたり問題点を指摘したりする場面が多いが、基本的にはこの後に控える“宴会”の為に体力を回復させるのが主な目的であったりする。

「どちらにしる嬢ちゃんはよくやったほうだ。2倍の敵を相手取つての奮闘振り、ああいう博打は好きだぜ？」

「．．．どうせ俺は初っ端で負けたよ．．．．．。」

落ち込む田中、なまじ自分の力量に自身があっただけに一番に戦死判定を受けた事は彼の心に深い傷を作ってしまったらしい。

それを見て拙いと思ったのか参謀長の秋山がフォローに入る。

「まあまあ、田中提督も活躍していましたよ。」

確かに彼は今回の演習での初の戦死判定を受けプライドに深い傷が出来てしまっただけだが、東郷の艦隊や山本の艦隊の足止めに成功して小澤の第三航空艦隊が佐藤の第一航空艦隊を攻撃する時間をしっかりと確保していた。

そういう面では田中は今回、戦術で負けて戦略に勝ったと言えるのであった。作戦遂行能力が連合艦隊の一艦隊司令として申し分ない事を証明していたと言えよう。東郷も自らの人選が誤りでなかったことに満足していた。

ちなみに秋山がフォローしている間に他の提督は田中の事を見向きもしないのだが、それは彼らが田中に失望しているわけでも見捨てているわけでもなく勝手に悩んで勝手に学んで勝手に復活するだろぅと心から思っているからである。

決して秋山が居るから自分達が面倒な仕事をしなくてもすむなどと思っているわけではない。．．面倒くさいなどは思っていないのだ。

フォローもある程度終わったのか田中の下を離れた秋山に東郷が声をかける。

「ところで秋山、お客さんにはお帰りいただけただけか？」

「はい。丁重に見送らせました。」

その東郷の表現に首を傾げる者とけらけらと笑うもの、その中でも笑ったうちの一人である山本は自身の率直な気持ちを語りだした。

「あの坊主どもも黒いな（笑）。わざわざこっちの戦力を見せ付ける為にあえて追っ払わないなんてな。いつもだったら追っ払うように言ってくるのに今度はどういふ風の吹き回しだ？」

「なにはともあれ我々は軍人です。政治は政治家に任せましょう。総理や大臣達には彼らなりの考えがあるでしょう。……………そして我々がすべき事は。」

「今日の反省だな。」

この東郷の言葉から30分間、部下から宴会の用意が出来たと報告が来るまで彼らは今回の演習内容の確認、各艦隊の動きや問題点などを思いつく限り挙げていき、この演習に参加しなかった艦隊司令の為に詳細な報告書が作成された。

ところで、東郷が言ったお客さんとは一体どこの誰の事だったのだろうか？

翌日・バレンタイン第三帝國・首都ザクセン・総統官邸

国際連合加盟国中最大の戦力を保有する軍事大国として名を馳せるバレンタイン第三帝國。その総統府において各部署の最高責任者級が名を連ねる代表者会議に於いてその出席する代表者たちは配布された資料を見て驚きを通り越して呆れの色を見せ始めていた。

もちろんそれはこの場の最高責任者である帝國総統、レーティア・ハーデルハイトも例外ではなかった。

「・・・何だこの戦闘は・・・。」

政治家であり軍人であり、そしてそれ以前に科学者である彼女は目の前に出された同盟国の軍事力に圧倒されていた。

宣伝相のグレシア・ゲッペルスは驚きで言葉も出ない彼女の代わりに報告書の概要を説明していく。

「戦闘艦の能力、戦闘機の能力、そして指揮官を始めとした軍人の練度、どれをとっても私たちの当初の予想を上回ってる。それに加えて偵察に出ていた潜宙艦が最後に確認した日本の潜宙艦部隊。」

「うん、このコースは明らかにこちらの動きを読んでいたね。」

そのゲッベルスの言葉に同調しつつ状況を分析するのはバレンティン宇宙軍の元帥にして「砂漠の狐」の異名を持つ軍人、エル・ロンメルであった。

そう、東郷の言っていたお客さんとはバレンティンの潜水艦の事であった。彼らは普段あまり公表されなかつたり公表されたとしても低めに見積もる事の多い日本軍の戦闘能力を把握する為に情報収集に特化した潜水艦を数隻ほど日本軍の演習宙域に展開させていた。

エイリス程ではないとしても普段から情報収集に余念が無いバレンティン第三帝國は潜水艦こと国産Uボートの性能がある程度満足のいくものに仕上がったので、それが日本に通用するかのテストも兼ねて日本の大規模な軍事演習の偵察行動を試みたのだった。

当初は防諜に過剰なまでに力を入れている日本軍に妨害されるだろうと思われていたが始めてみると存外簡単に侵入する事に成功。結果的に映像や画像のみではあるが日本国防宇宙軍の最大戦力である連合艦隊の戦闘能力を（演習と言う事に加え一部艦隊が抜けているが）収集する事に成功していた。

そして本来ならばその部隊は収集した情報を持って静かにその場を離れて本国に帰還するだけだったのだがここで予想もしていない事態に遭遇してしまった。

日本の潜水艦隊がルート上に待ち構えていた上に追跡まで受けしまったのであった。

これは日本が機関音等を分析すれば自分達が日本の軍事演習を無断で偵察していた事を簡単に知りえる事を意味しており、外交上とても大きなダメージとなるものであった。

最悪今後の技術供与が減少する事や軍事協力に深い溝を作ってしまう。

それらはバレンタインの主要閣僚にとっては非常に大きな問題であったが同国の軍人達や技術者達はもつと別のことに注目していた。

それは自分達バレンタインの潜水艦と日本の潜水艦で性能に予想よりも大きな差があると言う事だった。

実は今回の偵察に使用したのはバレンタインでも最新鋭のUボートであり攻撃任務よりも偵察任務や特殊作戦支援能力等に特化した隠密性の高い特殊作戦艦であった。

それゆえに同盟国とはいえライバルに簡単に発見されてしまった事は彼らにとって非常にショックであったのだ。

尤も心の隅ではどこかこうなることを予測していたものもあり、そんな人間は口々に同じ言葉を述べていたが……。

「やはり、感づかれていた……か。」

潜宙艦技術に理解がある閣僚の男が空しく呟いた。

そんな彼に同情しつつもレーティアはただ冷静に現実を見て、冷淡に現状を述べた。

「予想はしていたさ。忌々しいが現状では奴らの方が技術力は上だし、それを利用した高度な訓練や宇宙怪獣討伐などで練度も高い。今回の演習に潜宙艦や索敵艦を参加させていると知った時点でこうなることは覚悟していた。」

「しかし……向こうの外務省からは何か言ってきていないのですか？」

そう、それがバレンタインの外務を担当するアンナ・フォン・リッベントロップにとっての最大の懸念事項であった。

最悪過労死も考えなければならぬほど自国が追い詰められるのかもしれないのだ。心配にならないはずが無かった。

宣伝相のゲッベルスは傍から見てもアワアワとろたえしている彼女に萌えながらも日本の外務省の長である星野のメッセージを伝えるために空間ディスプレイを映し出す。

「言ってきたわよ。」と言っても内容は思いもよらないものだったけど。」

「？」

“言ってきた”ということとは文書ではなく映像又は音声で伝えてきたのである。何時もならば文書で伝える事が多い日本がわざわざ口頭でそれも外務大臣が伝えると言う事はバレンタインの閣僚、軍人達に今回ばかりは日本が本気で怒っているのではないかと言う危険を抱かせるのに十分なものであった。

内容を知っているレーティアを除いて戦々恐々とする室内の人間の顔と何とも言えない部屋の空気に顔をしかめつつゲッベルスはP Cを操作して日本の星野からのメッセージを開いた。

数秒後、画面に映し出された映像の男性は口元に微笑を浮かべていた。

この日本人独特の気色悪い愛想笑いを見せる男こそ日本国外務大臣の星野遙であった。

彼はゲッベルスとレーティアに簡単な挨拶を済ませた後にバレンタインのUボートが演習宙域に侵入した事について確認を取ると共に日本国としての意思を述べ始めた。

『周辺宙域は実戦形式での大規模演習を行っている為に通常空間、浅異層次元空間共に非常に危険な状況となっております。貴国所属の潜水艦の脅威となりうる対象物は此方が排除いたしました。今後とも同じように対処できるとは限りません。出来れば次回からは正規の外交ルートを使用して観戦して頂きたい。』

「……………だつて。」

「「「」」」

予想外の話に頭が追いつかない。

果たしてそれは厳格にして冷静、そして優秀な事で知られるバレン
タインの閣僚、軍人達への2発目の爆弾となった。

これが記録映像ではなくLIVE映像だったらこの会議はさらに紛
糾した事だろうと閣僚の一人が後に語っている。

第二十四話 『国務大臣達（+総統閣下）の日常3』（後書き）

エースコンバットAHをプレイしておりました

本当に申し訳ありません！！

今後自重致します。加えて学校のほうでの行事の準備が忙しくて中々時間が取れませんでした。今回更新できて内心ではほっとしています。

ところで作品の中ではそろそろ新年を迎えます。そろそろあの方々にも再登場願おうかと思うしだい・・・これ以上はネタばれになるので言いませんが。

ともかく更新が遅れて申し訳ありませんでした。前書きにもあるように今後は更新速度も遅くなるかもしれませんが。それでも書き続けたいきますのでこれからもよろしく願います。

ご意見ご感想よろしく願います。今回もお読みいただきまして本当に感謝しております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6143s/>

新たなる世界 ~日本の歩み~

2011年10月28日07時01分発行